

宮崎市文化財調査報告書 第132集

みやざきじょうあと  
宮崎城跡

平成 29・30 年度確認調査報告書



2020

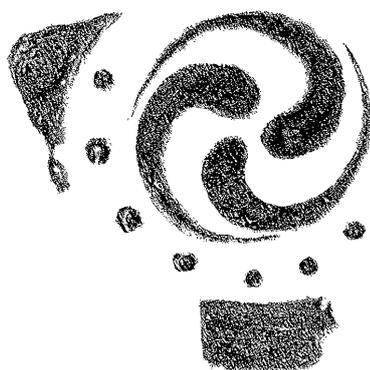
宮崎市教育委員会



宮崎市文化財調査報告書 第132集

みやざきじょうあと  
宮崎城跡

平成 29・30 年度確認調査報告書



2020

宮崎市教育委員会



# 序

宮崎県宮崎市に所在する宮崎城跡は南九州の大型山城です。南北朝期から近世初期までの長い歴史を持ちますが、戦国期末の城主が記した『上井覚兼日記』により、城内の様子や城主その人の生活がつぶさにわかるという、日本史上においても稀有な城跡です。

本書で報告いたします平成29・30年度の確認調査は、宮崎城跡の歴史上、初めての発掘調査となります。小規模な調査ではありましたが、極めて良好な状態で遺構・遺物が保存されていることが確認されました。この貴重かつ重要な山城を守り将来に伝えていくために、宮崎市では現在、国指定史跡を目指して事業を進めております。

これまで宮崎城跡は、池内宮崎城クラブをはじめとする地域の方々の御尽力により守られ、顕彰されてまいりました。今回の発掘調査も、少なからぬ地域の方々のご協力により実現したものです。本市としましては、文字通り宮崎の名を冠した本県を代表する城跡の一つである宮崎城跡について、今後も地域との連携を密に図りながら、その保護と普及に取り組んでまいりたいと考えております。

最後になりましたが、ご指導をいただきました宮崎市城跡保存整備専門委員会の諸先生方をはじめ関係諸機関の皆さま、毎日急坂を登って作業に従事された発掘作業員の皆さま、根気強く出土遺物の資料化をしてくださった整理作業員の皆さまに厚く御礼申し上げます。

令和2年3月

宮崎市教育委員会

教育長 西田 幸一郎

# 例 言

1. 本書は宮崎県宮崎市池内町および大字上北方に所在する宮崎城跡の、平成 29・30 年度に実施した確認調査の報告書である。
2. 発掘調査の実施期間は平成 29 年 11 月 6 日～11 月 30 日（平成 29 年度調査）および平成 30 年 4 月 16 日～6 月 13 日（平成 30 年度調査）である。同じく整理作業の実施期間は平成 30 年 2 月 6 日～2 月 28 日および令和元年 5 月 27 日～10 月 30 日である。
3. 調査実施にあたり宮崎市城跡保存整備専門委員会の指導を受けた。委員会の構成は以下のとおりである。

委員 長 谷口 義信（宮崎大学名誉教授）

委 員 伊藤 哲（宮崎大学農学部）

包清 博之（九州大学大学院芸術工学研究院教授）

千田 嘉博（奈良大学文学部教授）

三木 靖（鹿児島国際大学名誉教授）

八卷 孝夫（中世城郭研究会）

横田 漠（宮崎大学国際連携センター特任教授）

4. 調査実施にあたり文化庁記念物課、宮崎県教育庁文化財課の指導を受けた。

5. 調査は宮崎市教育委員会が主体となっておこなった。調査組織は以下のとおりである。

平成 29 年度（発掘調査・整理作業）

文化財課 課 長 羽木本光男

文化財管理係 課長補佐兼係長 小窪 裕俊

主 査 今城 正広（事務担当）

埋蔵文化財係 副主幹兼係長 井田 篤

主 査 竹中 克繁（発掘調査・整理作業担当）

嘱 託 菊池ひろみ（整理作業担当）

〃 白上いつみ（発掘調査担当）

平成 30 年度（発掘調査）

文化財課	課長	富永 英典
文化財管理係	副主幹兼係長	今城 正広
	主査	山口 宏樹（事務担当）
埋蔵文化財係	主幹兼係長	井田 篤
	主査	竹中 克繁（発掘調査担当）
	嘱託	今井 直緒（ 〃 ）
	〃	白上いづみ（ 〃 ）

令和元年度（整理作業・報告書作成）

文化財課	課長	富永 英典
文化財管理係	副主幹兼係長	今城 正広（事務担当・報告書作成担当）
埋蔵文化財係	主幹兼係長	井田 篤
	主査	竹中 克繁（整理作業・報告書作成担当）
	嘱託	小牟田智子（整理作業担当）

- 掲載した遺構図面の実測は今井・白上・竹中が、遺物図面の実測は秋成雅博（宮崎市教育委員会文化財課）・菊池・小牟田および整理作業員がおこなった。また遺構図面の製図は白上・竹中が、遺物図面の製図は小牟田がおこなった。現場および遺物の写真撮影は竹中がおこなった。
- 本書の執筆は第 3 章第 2 節および巻末資料を今城がおこない、他は竹中がおこなった。
- 本書の編集は竹中がおこなった。
- 本書で使用する方位記号は全て真北を指す。
- 本書中の記述に使用する曲輪No.は、宮崎市教育委員会が 2009 年に発行した『宮崎城跡測量調査報告書』（宮崎市文化財調査報告書 第 75 集）掲載の千田嘉博氏作成宮崎城跡縄張図（初出は千田嘉博 2004 年「戦国期の城下町構造と基層信仰 上井覚兼の宮崎城下町を事例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 112 集 国立歴史民俗博物館）によるものである。
- 本書に掲載している平成 29・30 年度確認調査の図面・写真および出土遺物・表採遺物は宮崎市教育委員会で保管している。

# 本文目次

第1章	はじめに		第9図	宮崎城跡に近接する攻城側の陣跡	13
第1節	宮崎城跡の地理的・歴史的環境	1	第10図	平成29・30年度調査箇所位置図	16
第2節	宮崎城の歴史	3	第11図	曲輪Ⅰ調査区配置図	17
第3節	宮崎城跡の調査・研究略史	7	第12図	H30-ⅠA平面・土層断面図	17
第2章	発掘調査成果		第13図	H30-ⅠA出土遺物	18
第1節	平成29・30年度調査の概要	15	第14図	H30-ⅠB平面・土層断面図 および土師器坏出土平面図	19
第2節	調査成果	15	第15図	H30-ⅠB出土遺物①	19
第3節	小 結	33	第16図	H30-ⅠB出土遺物②	20
第3章	考 察		第17図	H30-ⅠC平面・土層断面図 および遺構土層断面図	21
第1節	宮崎城跡の縄張について	41	第18図	H30-ⅠC出土遺物	21
第2節	文献史料からみた宮崎城跡	53	第19図	H30-ⅠD平面・土層断面図 および遺構土層断面図	22
第3節	南九州における宮崎城跡の位置付け	59	第20図	H30-ⅠD出土遺物	22
第4章	まとめ	67	第21図	曲輪Ⅰ表採遺物①	23
卷末資料	「宮崎城」関係史料	(90)	第22図	曲輪Ⅰ表採遺物②	24

# 挿 図 目 次

第1図	宮崎平野と宮崎城跡の位置	1	第23図	曲輪Ⅰ表採遺物③	25
第2図	宮崎城跡周辺主要遺跡分布図	2	第24図	曲輪Ⅱ調査区配置図	26
第3図	富永嘉久氏による宮崎城跡測量図	7	第25図	H30-ⅡA平面・土層断面図	26
第4図	直純寺所蔵「宮崎城見取図」	8	第26図	H30-ⅡA出土遺物	26
第5図	『日本城郭大系』掲載の宮崎城要図	8	第27図	曲輪Ⅲ調査区配置図	27
第6図	『図説中世城郭事典』掲載の八巻孝夫氏 による宮崎城跡縄張図	9	第28図	H29-ⅢA平面・土層断面図	27
第7図	宮崎城跡現況地形測量図	11	第29図	H29-ⅢA出土遺物	28
第8図	宮崎城跡周辺の小字名	12	第30図	H29-ⅢB平面・土層断面図	29
			第31図	H29-ⅢB出土遺物	29
			第32図	H29-ⅢC平面・土層断面図	30
			第33図	H29-ⅢC出土遺物	30
			第34図	曲輪Ⅲ表採遺物	30
			第35図	曲輪Ⅴ調査区配置図	31
			第36図	H30-ⅤA平面・土層断面図	31
			第37図	H30-ⅤA出土遺物	32
			第38図	曲輪Ⅶ調査区配置図	32
			第39図	H30-ⅧA出土遺物および曲輪 Ⅷ表採遺物	32
			第40図	H30-ⅧA平面・土層断面図	32
			第41図	その他の表採遺物	33

第42図	千田嘉博氏作成の宮崎城跡縄張図	42
第43図	八巻孝夫氏作成の宮崎城跡縄張図 (第2版)	43
第44図	曲輪Ⅰ周辺の字図	44
第45図	宮崎城跡の機能分化	51
第46図	穆佐城跡の機能分化	52
第47図	南九州の群郭式城郭諸例	60
第48図	佐土原城跡縄張図	61
第49図	日向国移封後の秋月・高橋氏の 本城と支城	63

## 本文中写真目次

写真1	曲輪Ⅰ現況	44
写真2	曲輪Ⅱ・Ⅴ間堀切現況	46
写真3	曲輪Ⅷ現況	46
写真4	金丸口(満願寺口)現況	47
写真5	和田口(曲輪Ⅱ南側虎口)現況	48
写真6	平成30年台風第24号の被害で剥き 出しになった佐土原城跡の岩盤斜面	61

## 表目次

表1	土器・陶磁器観察表①	35
表2	土器・陶磁器観察表②	36
表3	土器・陶磁器観察表③	37
表4	土器・陶磁器観察表④	38
表5	土器・陶磁器観察表⑤	39
表6	瓦観察表	39
表7	金属製品観察表	40
表8	石製品観察表	40
表9	『上井覚兼日記』に見える 宮崎城関連記事	58

## 図版目次

図版1	宮崎城跡遠景①	69
図版2	宮崎城跡遠景②	69
図版3	曲輪Ⅰ調査区	70
図版4	H30-ⅠBの土師器坏片出土状況	70
図版5	H30-ⅠB3層の瓦片出土状況	70
図版6	H30-ⅡA	71
図版7	H29-ⅢA	71
図版8	H29-ⅢB	71
図版9	H29-ⅢC	72
図版10	H30-ⅧA	72
図版11	H30-ⅤA	72
図版12	H30-ⅠA出土遺物①	73
図版13	H30-ⅠA出土遺物②	73
図版14	H30-ⅠB出土遺物① およびH30-ⅠD出土遺物	73
図版15	H30-ⅠB出土遺物②	74
図版16	H30-ⅠB出土遺物③	74
図版17	H30-ⅠC出土遺物①	75
図版18	H30-ⅠC出土遺物②	75
図版19	曲輪Ⅰ表採遺物①	75
図版20	曲輪Ⅰ表採遺物②	76
図版21	H30-ⅡA出土遺物	76
図版22	H29-ⅢA出土遺物①	76
図版23	H29-ⅢA出土遺物②	77
図版24	H29-ⅢB出土遺物	77
図版25	H29-ⅢC出土遺物	77
図版26	H30-ⅤA出土遺物	78
図版27	曲輪Ⅲ表採遺物	78
図版28	H30-ⅧA出土遺物	78
図版29	その他の表採遺物	78



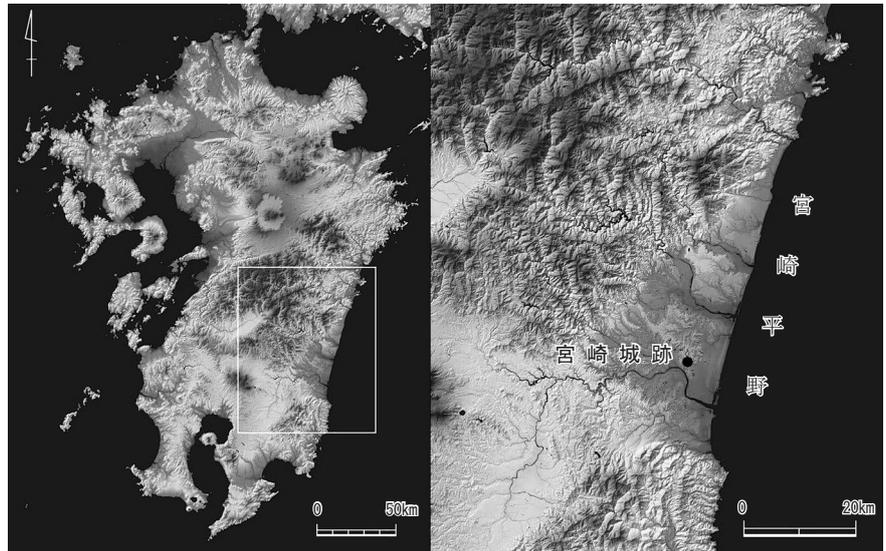
# 第1章 はじめに

## 第1節 宮崎城跡の地理的・歴史的環境

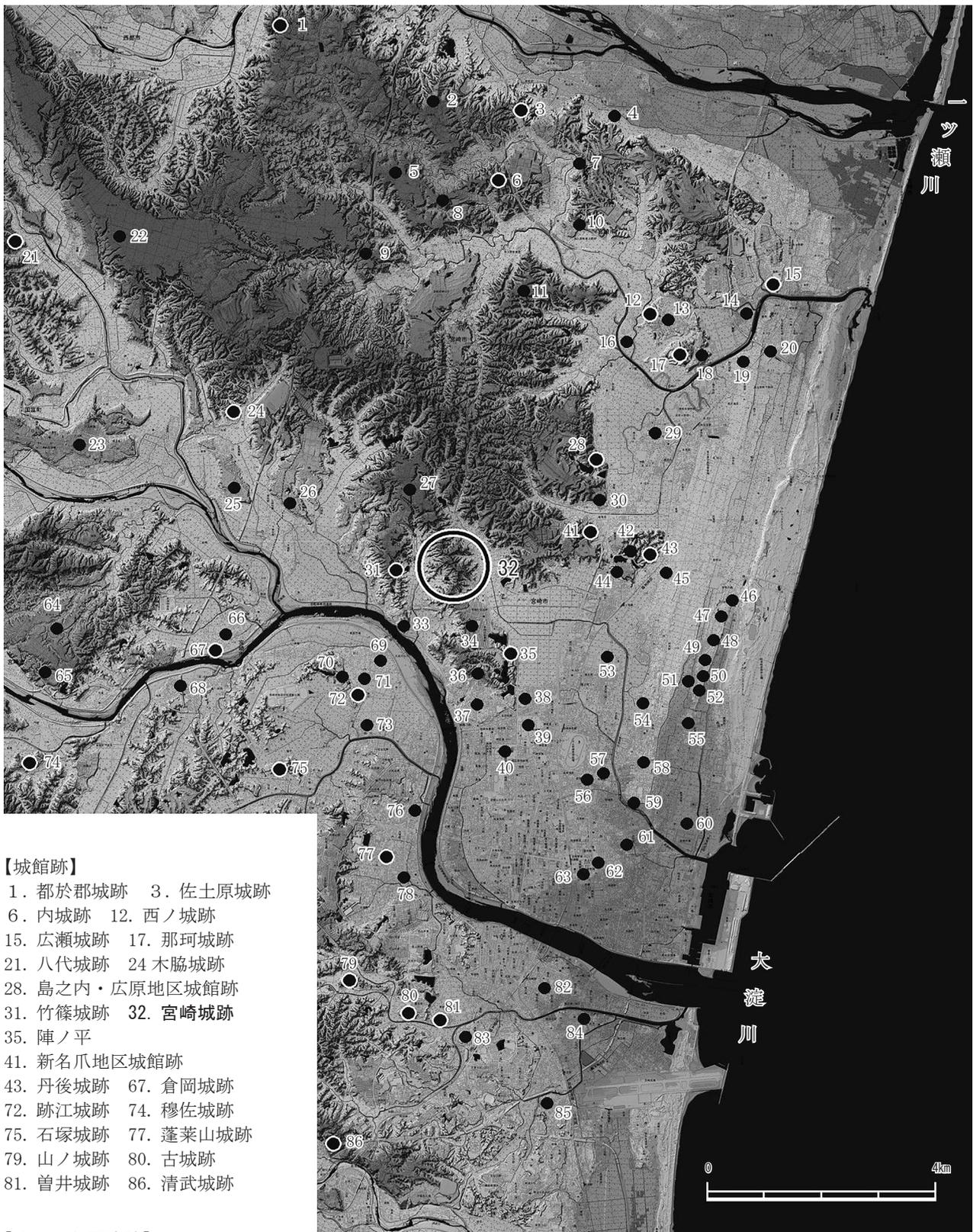
宮崎県宮崎市池内町および大字上北方に所在する宮崎城跡は、地理的には宮崎平野南半部のほぼ中央に位置する。宮崎平野は九州島の東に位置する宮崎県の児湯郡都農町、東諸県郡綾町、宮崎市青島付近を結んだ平面直角三角形形状の範囲で、太平洋（日向灘）に面した沿岸部に広がる最大延長東西30 km、南北60 kmの海岸平野である。地質的には1億年前から3千万年前に形成された四万十累層群の上を、1千万年前から2百万年前に堆積した泥岩と砂岩による宮崎層群が覆い、さらにその上に更新世形成の円礫層、火山由来である2万5千年前のシラス土、ローム土、7千3百年前のアカホヤ土などが載る。宮崎平野は更新世以降の地盤隆起による洪積台地面が卓越するが、その中で平野部中央を東進する一ツ瀬川、その南を東進する大淀川沿いなどには第4紀完新世形成の沖積平野が広がる。

宮崎城跡は九州第2の流域面積を持った大淀川の下流北岸において、平野部に向かって南に突出する標高90 mの尾根上に構築され、海岸部までを一望する位置にある（第2図）。その尾根の基点となる北側の丘陵上には、垂水第2遺跡（宮崎市教委編2004）等、旧石器～縄文時代の遺跡が集中する。また南側には断続的に狭小な尾根が続いたのち、古墳時代後期における南九州最大の前方後円墳である墳長約100 mの下北方13号墳が構築された標高70 mの越ヶ迫丘陵につながる。さらにその南側には大淀川に面して標高約20 mの段丘面があり、旧石器時代から近世までの遺跡が高密度で分布する下北方遺跡群となっている。古代においては瓦を持つ寺院の存在が発掘調査で確認されており（宮崎市教委編2011）、宮崎郡衙の有力な比定候補地となっている。宮崎城跡周辺の一帯が近世にかけて宮崎と呼ばれたのは、この段丘面周辺の郡家院開発により宮崎荘が立券されたことに由来する。ちなみに近世にはここに延岡藩の宮崎代官所（下北方代官所）が置かれ、明治期に旧宮崎代官所支配の地に県庁が設置されたため、現在の宮崎県という県名が成立したと考えられている（竹内編1986）。

宮崎城跡の西側には、同じく北側の丘陵から南に伸びた尾根があり、大淀川に接したその突端には縄文時代早期の柏田貝塚がある。迫を共有するこの丘陵と宮崎城跡の丘陵それぞれの斜面には、県指定史跡瓜生野村古墳として複数の横穴墓が構築されている。また先の柏田貝塚



第1図 宮崎平野と宮崎城跡の位置  
※国土地理院デジタル標高地形図「九州周辺」使用



【城館跡】

- 1. 都於郡城跡 3. 佐土原城跡
- 6. 内城跡 12. 西ノ城跡
- 15. 広瀬城跡 17. 那珂城跡
- 21. 八代城跡 24. 木脇城跡
- 28. 島之内・広原地区城館跡
- 31. 竹篠城跡 32. 宮崎城跡
- 35. 陣ノ平
- 41. 新名爪地区城館跡
- 43. 丹後城跡 67. 倉岡城跡
- 72. 跡江城跡 74. 穆佐城跡
- 75. 石塚城跡 77. 蓬萊山城跡
- 79. 山ノ城跡 80. 古城跡
- 81. 曾井城跡 86. 清武城跡

【その他主要遺跡】

- 2. 永尾遺跡 4. 宮ヶ迫遺跡・古城第2遺跡 5. 下屋敷第1遺跡 7. 下村竈跡 8. 南学原第1・2遺跡 9. 長藪原第1遺跡
- 10. 福城寺遺跡 11. 年居原遺跡 13. 下那珂馬場古墳 14. 囲跡 16. 浮橋遺跡 18. 下那珂遺跡 19. 片瀬原遺跡
- 20. 中溝第1・2遺跡 22. 六野原古墳群 23. 本庄古墳群 25. 塚原遺跡 26. 柿木原地下式横穴墓
- 27. 金剛寺原第1遺跡・垂水第2遺跡等 29. 住吉1号墳・島之内萩崎遺跡等 30. 北ヶ迫遺跡 33. 柏田貝塚 34. 池内横穴群
- 36. 下北方13号墳 37. 下北方遺跡群 38. 垣下遺跡 39. 船塚古墳 40. 船塚遺跡 42. 蓮ヶ池横穴群 44. 住吉村古墳
- 45. 中ノ原第2遺跡 46. 産母遺跡 47. 山崎上ノ原第1遺跡 48. 山崎上ノ原第2遺跡 49. 下ノ原第1遺跡 50. 下ノ原第2遺跡
- 51. 中須遺跡 52. 石神遺跡 53. 桜町遺跡 54. 萩崎第2遺跡 55. 猿野遺跡 56. 権現町遺跡 57. 浮ノ城第2遺跡
- 58. 江田原第2遺跡 59. 檜遺跡 60. 池開・江口遺跡 61. 北中遺跡 62. 大町遺跡 63. 浄土江遺跡 64. 蔵野遺跡
- 65. 橋山第1遺跡等 66. 倉岡古墳群 68. 迫内遺跡 69. 大屋敷遺跡 70. 生目古墳群 71. 城平遺跡 73. 間越遺跡
- 76. 大淀3号墳 78. 京園遺跡 82. 福長院塚古墳 83. 源藤遺跡 84. 下鶴遺跡 85. 津和田第2遺跡等

第2図 宮崎城跡周辺主要遺跡分布図

※国土地理院 1/25000 デジタル標高地形図「宮崎」使用

と同所に近世前期開山の笠置山直純寺があるが、境内には織豊期の宮崎城代権藤種盛の墓があり、直純寺そのものも種盛の子・孫を開基とする。大淀川を挟んで南西の対岸には、100 m級前方後円墳3基を含み古墳時代前期における九州最大の首長墓系譜と評価される国指定史跡生目古墳群がある。その西側の淀川沿いには宮崎城跡と同じく拠点城郭の倉岡城跡が、さらにその上流には国指定史跡穆佐城跡があり、両城ともに宮崎城跡と可視の関係にある。

宮崎城跡の東側には、基点を同じくする北側の丘陵地帯から南東に伸びた尾根があり、その突端に国指定史跡蓮ヶ池横穴群がある。蓮ヶ池横穴群は古墳時代後期から終末期にかけての横穴墓が80基前後、その周辺にも県指定史跡住吉村古墳として複数の横穴墓があり、列島における大規模横穴墓群の南限とされる。近接して近世飢肥街道が南北に通るが、周辺には古代の円面硯が出土した北ヶ迫遺跡（宮崎市教委編2000）や丹後城跡、新名爪地区城館跡、島之内・広原地区城館跡などの中世山城もあり、古くから北の佐土原方面へと通じる主要道であったと考えられる。さらに東には、山崎上ノ原第2遺跡（宮崎県埋セ編2003）をはじめ弥生時代から古墳時代、古代の遺跡が集中して存在する海岸部の砂丘列が南北に伸び、その東側には太平洋が広がる。

#### 【引用・参考文献】

甲斐亮典編著 2009年『大淀川流域の歴史』第1巻 有限会社鉦脈社

竹内理三編 1986年『角川日本地名大辞典 45 宮崎県』株式会社角川書店

宮崎県埋蔵文化財センター編 2003年『山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第79集 宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎市教育委員会編 2000年『北ヶ迫遺跡』宮崎市文化財調査報告書第43集 宮崎市教育委員会

宮崎市教育委員会編 2004年『垂水第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書第58集 宮崎市教育委員会

宮崎市教育委員会編 2011年『下北方塚原第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書第82集 宮崎市教育委員会

有限会社平凡社地方資料センター編 1997年『宮崎県の地名』株式会社平凡社

## 第2節 宮崎城の歴史

### （1）史料上の初出（南北朝期）

宮崎城の歴史は南北朝の争乱初期に遡る。日向国（現在の宮崎県全域および鹿児島県北東部の志布志市一帯）において足利尊氏方として活動した大塚土持氏作成の軍忠状に、建武3年(1336)正月14日、「(南朝方肝付)兼重党類(の)一坪六郎入道慈円」が「楯籠宮崎池内城」したため、土持氏一族が「馳向彼城」、慈円とその甥を捕縛・処刑したと記されている（「土持宣栄軍忠状写」『豫章館文書』※宮崎県編1990）。同日付作成の宛所が異なる別の軍忠状では、この「宮崎池内城」を巡る事件が起こったのは正月12日になっており、慈円の名も一坪ではなく「図師」となっているが（前掲同）、この図師氏は宇佐宮領宮崎荘の荘官と考えられる（みやざき歴史文化館編2012）。

宮崎城跡は現在の宮崎市池内町と同大字上北方にまたがって所在し、10世紀初頭、宮崎郡の郡家院開発によってこの一帯に宮崎荘が成立している（竹内編1986）。先の軍忠状における「宮崎(の)池内城」は宮崎城の前身と考えられ、宮崎県内では穆佐城跡（宮崎市）、八代城跡（国富町）、猪見城

跡（同）などとなり、史料上に確認される最も古い城郭のひとつになる。

ただし文献上で次に宮崎城の存在が確認されるのは、次項に述べる室町期の半ばである。100年以上の空白を隔てたこの間も「宮崎池内城」が城郭として存続・維持され、室町期以降の宮崎城と連続性を持つものか否かについては、今後の発掘調査等により慎重に確認・検討すべき事項である。なお宮崎城跡の縄張調査をおこなった八巻孝夫氏は南北朝期の「宮崎池内城」について、戦乱が激しさを増し全国各地に城が取り立てられる動きの中で築城された臨時の城であり、現在の宮崎城跡に比べればはるかに小規模な城であったろうと推測している（八巻 2013）。

## （2）伊東氏時代（室町～戦国期）

文安3年（1446）、都於郡城（西都市）を本拠とする伊東祐堯が宮崎城の縣土持氏を攻略し、落合彦左衛門尉を城主（地頭）とした。伊東氏の家譜『日向記』（宮崎県編 1999）では「宮崎ハ昔藤北殿ノ格護也シヲ後ハ伊東・縣殿持玉フ也、（中略）文安三年丙寅六月二十日宮崎ヲ責落シ玉フ」とあり、伊東氏と縣土持氏の分有ないし共同統治であった宮崎を伊東氏が武力制圧したということのようである。

この前後数年をかけて祐堯は宮崎平野一円を勢力下におさめ、以降約130年間、当時「山東」と呼ばれた宮崎平野域は伊東氏勢力圏の中心となった。文明6年（1474）に書かれたとされる「文明六年三州処々領主記」（『都城島津家文書』※宮崎県編 1994）では伊東祐堯勢力下の「山東城」のひとつとして「宮崎」が挙げられている。これ以降のしばらくは史料上、宮崎城に関する目立ったものではなく詳細が不明である。ただし近接する奈古神社（宮崎市南方町）の文書には「城内安全」（大永8年の寄進状。※1528年）、「城内屋作」（年不詳の大宮司あて書状）などの文言が見えるものがあり（『奈古神社文書』※宮崎県編 1990）、伊東氏領有期の宮崎城に関するものと考えられている（平凡社編 1997）（本書第3章第2節も参照のこと）。

天文3年（1534）、伊東家で家督争いが起こり、後継者候補の伊東祐吉が宮崎城に入った。この前後の動きを見ると、伊東氏は本拠都於郡城にくわえ佐土原城（宮崎市）と宮崎城の3城を重要拠点と位置付けていたようである。祐吉は二十歳前に宮崎城で亡くなり、伊東家の跡目は祐吉の兄である義祐（祐清）が継いだ。天文6年（1537）、義祐の居城佐土原城で火災が起こり、以後数年間、義祐は宮崎城に居た。天文10年（1541）、先の家督争いを遠因として伊東家中の長嶺地頭長倉能登守とその兄である穆佐地頭長倉上総介が反乱を起こした（長倉能登守の乱）。長倉兄弟は飢肥（日南市）を領する島津豊州家からの援軍も得たが、義祐によって鎮圧された。なお『日向記』ではこの時豊州家の武将が「北ノ金光ハ義祐ノ御座所宮崎城カ」と言ったとされ、この「金光」が明治から昭和にかけて誇大に解釈されて行き「宮崎城には金の天守があった」という巷説を生むことともなった。

永禄11年（1568）、義祐は島津氏との長年の係争地だった飢肥を攻略し、土持氏領縣（延岡市）、島津氏領真幸院（えびの市）・庄内（都城市）・志布志（鹿児島県志布志市）をのぞく日向国の大半を勢力下におさめ、伊東氏の全盛時代を築いた。当主義益ついで義賢の居城都於郡城、隠居義祐の居城佐土原城を中心とした伊東氏領国の城郭群を俗に伊東四十八城と呼び、そのひとつである宮崎城は『日向記』中の記事「分国中城主揃事」に「宮崎城主 肥田木勘解由左衛門尉 今長嶺紀伊守・肥田木越前守」と記されている。

伊東氏は続けて島津氏領真幸院への進出を図るが、元龜3年（1572）の木崎原の戦い（えびの市）

で島津氏に大敗し、以降島津氏の攻勢に押された義祐は天正5年（1577）、一族を連れて縁戚の大友氏を頼り豊後（大分県）に落ち延びることとなった（伊東氏の豊後落ち・都於郡崩れ）。

### （3）島津氏時代（戦国期末）

天正6年（1578）、伊東氏の旧領回復を大義名分として侵攻した大友氏を、新納院高城（木城町）を巡る戦い（耳川の戦い・第1次高城川合戦）で破った薩摩・大隅（鹿児島県）の島津義久は、日向国の支配圏を確立した。島津氏は前代における伊東氏の支配拠点（伊東四十八城）をおおむね踏襲する形で国内各地に地頭（平時の地域行政官、有事の軍事指揮官）と衆中（島津家の直臣で、地頭配下の武士団）を配置し（福島1988）、天正8年（1580）、それら諸地頭の束ね役として老中上井覚兼が宮崎地頭を兼務して宮崎城に入った。

なお天正5年（1577）の伊東氏の豊後落ちから同8年に覚兼が配置されるまでの間の宮崎城については、天正6年正月23日に島津義久が「豊州（島津豊州家朝久）江宮崎三百町可被成安堵之由被仰出」（『日州御発足日々記』『旧記雑録後編1』※鹿児島県維史編所編1981）と、一旦は島津庶子家の私領になった（あるいは内定に留まったか）ようである。しかしその2年後には宮崎地頭上井覚兼が配置されており、何らかの理由で本宗家直轄領に変更されたということになる。この間の事情について近世薩摩藩の『本藩人物誌』（鹿児島県編1973）では、島津朝久が「日州宮崎三百町拝領イタシ家臣日置越後守忠充ヲ差遣為致警護」したが、弓の名手である忠充はその門人の中に伊東の旧臣がいたことから逆心を疑われて宮崎を召し上げられ、その余波で朝久も主家の勘気をこうむったとしている。このエピソードの真偽は不明であるが、覚兼が宮崎城に配置される前年には伊東氏の本拠であった都於郡、佐土原を私領として義久末弟の家久が佐土原城に入っている。先の項で述べた宮崎平野域における伊東氏時代の3大拠点（都於郡、佐土原、宮崎）を当主弟と老中という島津家中枢の人間を入れて押さえる、そうした戦略的な判断が重視された結果とも考えられる。

島津家老中にして宮崎地頭の上井覚兼は、当該期研究の一級資料であり島津家文書の一部として重要文化財に指定されている『上井覚兼日記』の筆者として著名である。残念ながら宮崎城に入った最初の数年間についての日記は失われているが、現存する天正10年（1582）11月4日から同14年10月15日までの4年間については「宮崎城主」の詳細な動向を知ることができる。当主義久から「殊ニ日州（日向国）之事、（覚兼を）別て御頼被成（、宮崎に）被召移候」（『上井覚兼日記』天正11年6月14日条※東大史編所編1954）と言われるほどの厚い信任を得て宮崎城に入った覚兼は、宮崎平野を中心とする地域の諸地頭を統括し（福島前掲同、新名2013）、平時は佐土原領主島津家久をもその管轄下に置いていた（宮崎県編1998）。上井覚兼は島津氏による日向国経営の要としての役割を担った人物であり、必然的にその居城宮崎城もまた日向国の中心的な位置を占める存在となった。

### （4）延岡領時代（織豊期）

天正15年（1587）、豊臣秀吉の九州征伐に島津氏は降伏し、続く豊臣政権の国わけにより日向国は五分割されることとなった（延岡高橋氏領、高鍋秋月氏領、佐土原島津氏領、飢肥伊東氏領、薩摩島津氏領）。宮崎は豊前国香春（福岡県）から移封されて縣（延岡市）の松尾城に入った高橋元種が、三城（日向市・門川町）と合わせて領有した。本拠からは間に複数の他領を挟んだ遠隔の飛び地でありながら、高橋氏領の総石高5万3千石（宮崎県編2000）のうち2万石を占める宮崎の支配につい

ては、宮崎城を当該地唯一の支城としてこれにあたった。なお文献上で確認される延岡（縣）高橋氏領の城郭は本城松尾城（関ヶ原の合戦後、のちの延岡城である縣城を築城して移転）と支城宮崎城のみであるが、近年の宮崎県埋蔵文化財センターの発掘調査により三城地域の塩見城跡（日向市）も関ヶ原の合戦前後まで機能していた可能性が示されている（宮崎県埋蔵文化財センター編 2012）。

慶長5年（1600）9月15日の関ヶ原の合戦に連動し、飢肥の伊東氏が東軍方として日向国内で活動した。伊東氏は西軍方であった高橋氏領宮崎城を10月1日に攻め落とし、宮崎城代権藤種盛も戦死した。しかし西軍方として美濃大垣城（岐阜県）に籠城していた高橋元種は、日向国における宮崎城戦に先立つ9月17ないし18日時点で東軍方へ寝返り許されていたため、翌慶長6年（1601）、徳川家康の裁定によって宮崎城は伊東氏から高橋氏に返還された。

その後の宮崎城については史料に乏しく詳細が不明である。高橋氏は慶長18年（1613）に改易となり、翌19年に肥前国日野江（長崎県）より有馬直純が旧高橋氏領を引き継ぐ形で移封された。支城宮崎城は翌元和元年（1615）の一国一城令により廃城になったと考えられる。

#### 【引用・参考文献】

鹿児島県維新史料編さん所編 1981年『鹿児島県史料 旧記雑録後編1』鹿児島県

鹿児島県史料刊行委員会編 1973年『本藩人物誌』鹿児島県史料集（XIII）鹿児島県立図書館

竹内理三編 1986『角川日本地名大辞典 45 宮崎県』株式会社角川書店

東京大学史料編纂所編 1954年『大日本古記録 上井覚兼日記 上』株式会社岩波書店

新名一仁 2013年「戦国末期宮崎城主上井覚兼と宮崎衆の軍事行動」『宮崎市歴史資料館研究紀要』第4号 宮崎文化振興協会

新名一仁 2014年『日向国山東河南の攻防』有限会社鉦脈社

福島金治 1988年『戦国大名島津氏の領国形成』吉川弘文館

宮崎県編 1990年『宮崎県史』史料編 中世1 宮崎県

宮崎県編 1994年『宮崎県史』史料編 中世2 宮崎県

宮崎県編 1998年『宮崎県史』通史編 中世 宮崎県

宮崎県編 1999年『宮崎県史叢書 日向記』宮崎県

宮崎県編 2000年『宮崎県史』通史編 近世上 宮崎県

宮崎県埋蔵文化財センター編 2012年『塩見城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第210集 宮崎県埋蔵文化財センター

みやざき歴史文化館編 2012年『宮崎城と上井覚兼』みやざき歴史文化館開館20周年特別企画展パンフレット みやざき歴史文化館

八巻孝夫 2013年「日向国・宮崎城の基礎研究」『中世城郭研究』第27号 中世城郭研究会

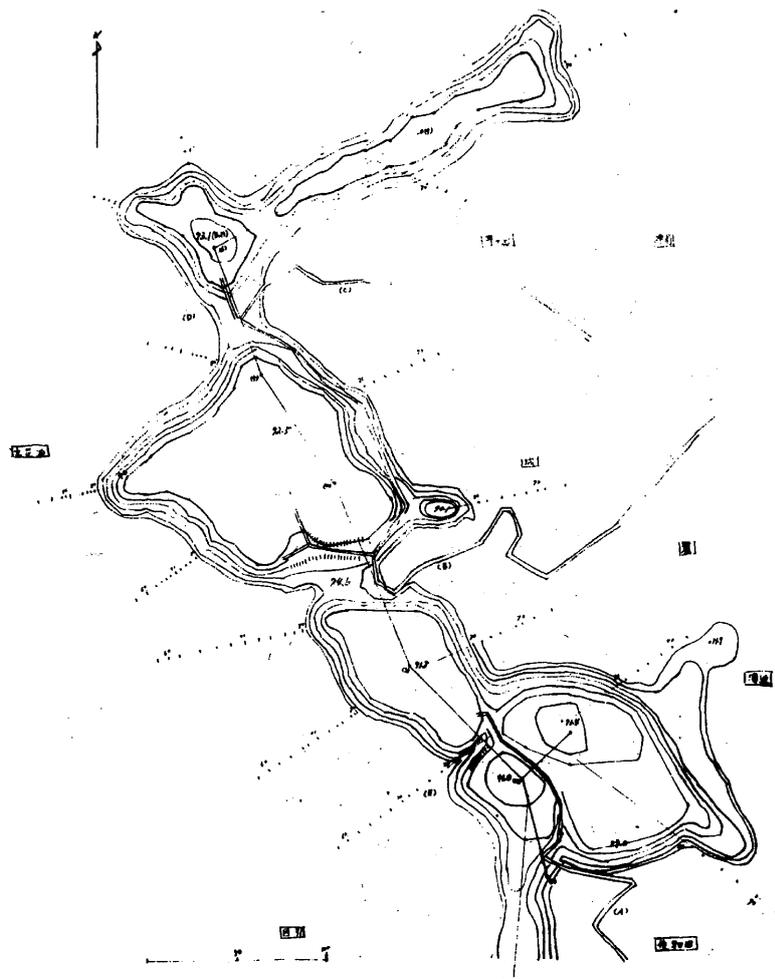
有限会社平凡社地方資料センター編 1997年『宮崎県の地名』株式会社平凡社

### 第3節 宮崎城跡の調査・研究略史

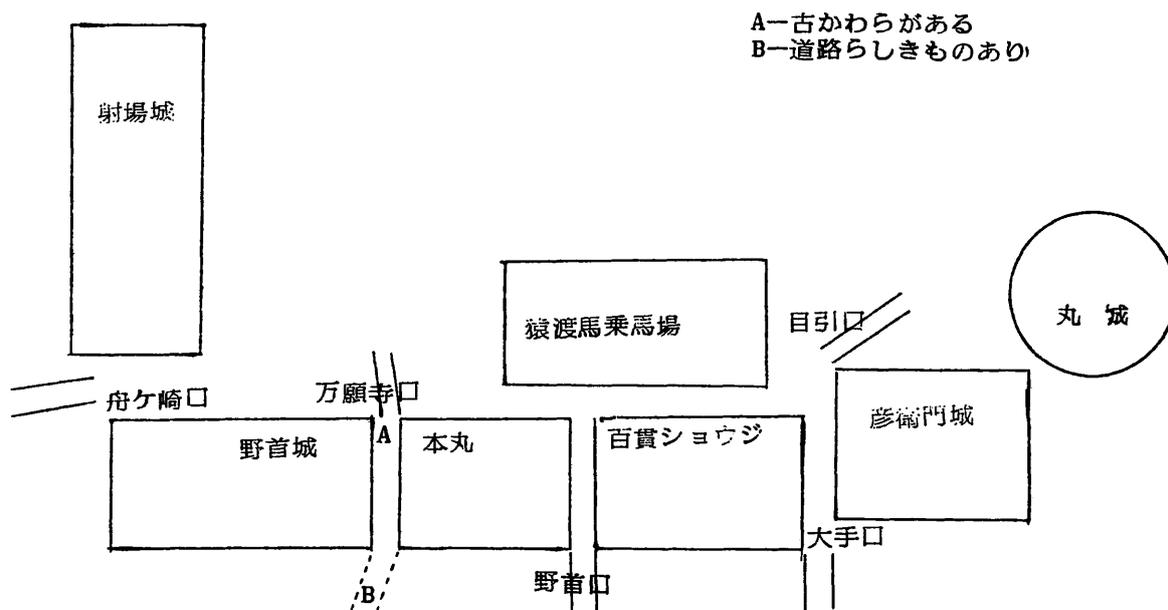
宮崎城跡に関する調査・研究の嚆矢は、平部嶺南が明治17年（1884。※刊行は昭和4年）に著した『日向地誌』（野口1976）である。同書は旧飢肥藩重臣であった平部が明治8年に宮崎県より地誌編輯取調掛を命じられ、自ら県内各所の現地調査、資料調査をおこない、また各郡村戸長からの報告書を収集して明治17年に完成させたもので、現在でも本県の歴史調査・研究において欠くべからざる基本資料のひとつとなっている。この地誌の中で「宮崎城墟」は宮崎郡池内村の古跡の項に記される。冒頭に丘陵地帯の端部に位置するその立地と可視範囲に言及し、続いて「椎城（本城）」「齊藤城」「服部城」「長友城」「彦右衛門城」「弓場城」と曲輪の伝承名を挙げ、慶長年間に城将（各曲輪の守将）だった者の名等に由来するものと考察している。また登城路については「四門アリ」として「西南門ヲ目曳口ト云」「東南門ヲ船ヶ崎口ト云」「東北門ヲ野頸口ト云満願寺口ト云」と具体的に比定している。くわえて飢肥伊東氏の家譜である『日向記』をもとに南北朝期から元和元年の一国一城令までの宮崎城の歴史をまとめている。

昭和2年（1927）に宮崎県が刊行した『宮崎縣史蹟調査』では、「宮崎城址」として前述の『日向地誌』をベースとした解説がなされている（宮崎縣編1927）。

昭和53年（1978）、富永嘉久氏の「宮崎城址及びその周辺」で初の宮崎城跡測量図（第3図）が発表された（富永1978）。これは主要部の簡易測量図で、図上には文献上で確認される城門5口の所在が比定されているが、氏は同時に地形的には6口であった可能性も指摘している。くわえて地元での曲輪名等の伝承を記したと見られる直純寺所蔵「宮崎城見取図」（第4図 ※後述の八巻2013では戦後作成の可能性が指摘されている）や、南北朝期から元和の一国一城令までの宮崎城の歴史をまとめた一覽、『上井覚兼日記』から抽出したものをはじめとする中世から徳川初期と考えられる半径2km圏内の社寺

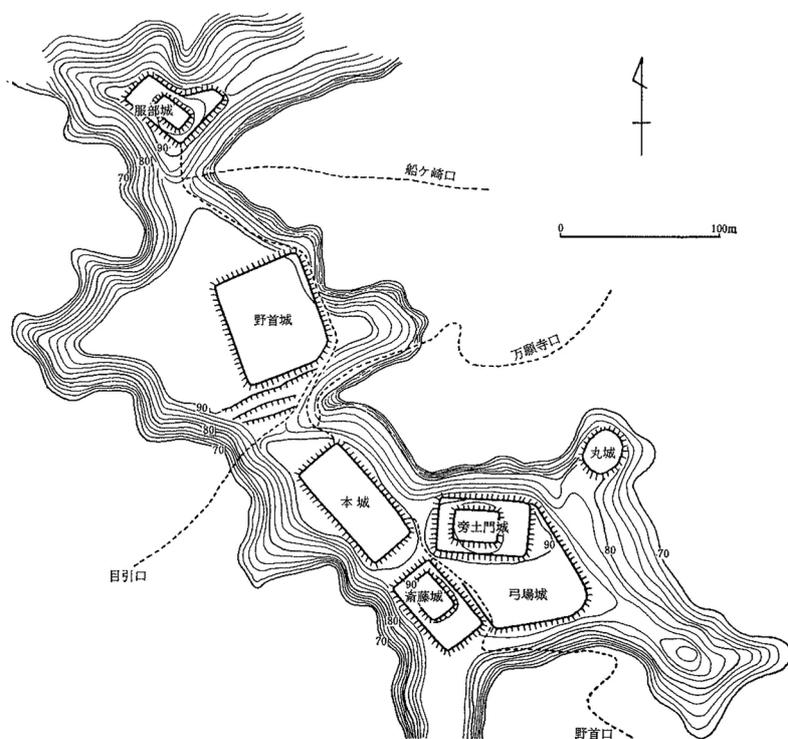


第3図 富永嘉久氏による宮崎城跡測量図 ※富永1978より転載



第4図 直純寺所蔵「宮崎城見取図」(左が北) ※富永 1978 より転載

地名を記した同心円図の掲載など、宮崎城跡の総合的な研究が企図されている。後述する八巻孝夫氏の論考中では「この論文は、現在は忘れられているようであるが、改めて高く評価する必要があると思われる」とされている(八巻 2013)。また同文中では、現在の遺跡地図では認識されていない宮崎城の支城鶴ヶ城(前ノ城・前城。同文発表時の宮崎市水道局浄化池)なる存在が某氏系図中に認められることにも言及している。



第5図 『日本城郭大系』掲載の宮崎城要図 ※児玉他 1980 より転載

昭和 55 年 (1980) の『日本城郭大系』では、宮崎城跡を含む宮崎県域全体を石川恒太郎氏ひとりが担当している(児玉他 1980)。宮崎城跡についてはその歴史が紹介されているが、氏個人の解釈によって書かれたものの観が強い。また「宮崎城要図」(第 5 図)として地形測量図に曲輪をケバ線で表現した図が掲載されているが、曲輪はいずれも長形状に表現されており、あくまで概念的なイメージで描かれたものであ

る。各曲輪には「本城」、「斎藤城」、「旁土門城（「彦エ門城」の誤記と思われる）、「弓場城」、「丸城」、「野首城」、「服部城」、登城路には「船ヶ崎口」、「万願寺口」、「目引口」、「野首口」の名称が図示されているが、比定根拠がやや不明なものが多い。

昭和62年(1987)、『図説中世城郭事典』において初となる宮崎城跡の縄張図(第6図)が発表された。同書では宮崎県内で5ヶ所の城郭が掲載される中、八巻孝夫氏が新納院高城跡(木城町)、都於郡城跡(西都市)とともに縄張図作成と解説を担当している(八巻1987)。氏は宮崎城跡の縄張について、大規模な堀切の内側に位置する一群を主郭グループと分析し、明確な主郭の比定(図中の曲輪I)もおこなっている。また全体的な評価としては、一見大ざっぱに作られた城に見えるが、主郭から横矢



第6図 『図説中世城郭事典』掲載の八巻孝夫氏による宮崎城跡縄張図  
※八巻1987より転載

を掛ける堀や、土塁をともなう弧状の横堀を城域の東限と西限に入れるなど細かい配慮も見られるとしている。同じく尾根上に浅い堀が続く状況について、南北朝期以来の遺構と戦国期の修築が混在しているためであろうと推察している。

平成10年(1998)、宮崎県教育委員会により県内の城跡を集成した『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』Ⅰ〈地名表・分布地図編〉が、翌11年にⅡ〈詳説編〉が刊行された(宮崎県文化課編1998・1999)。同書には各々の城跡が所在する各市町村の担当者等も多く執筆に携わっており、宮崎城跡については先述の八巻孝夫氏作成による縄張図と、同氏の論考を基にした解説が掲載されている。

平成11年(1999)、若山浩章氏が「中世城郭の普請と作事 - 『上井覚兼日記』に見られる宮崎城の普請と造作を中心に -」で『上井覚兼日記』を用いた宮崎「城下」の検討をおこなった(若山1999)。この中で氏は、戦国期末に宮崎城に入った上井覚兼は、古来宮崎荘の中心であった城東の「麓」周辺よりも、宮崎城の西側を流れる大淀川沿いを水上交通・流通の関係でより重視し、発展させようとしたと分析している。具体的には、旧来の川沿いの町への新道敷設によりこれを「城下」として取り込もうと企図したことや、同じく川沿いに新たな町を設置したことなどで、後者には地元有力者の関与が認められることも指摘している。宮崎城の地域支配について、その具体像に迫る研究と言える。

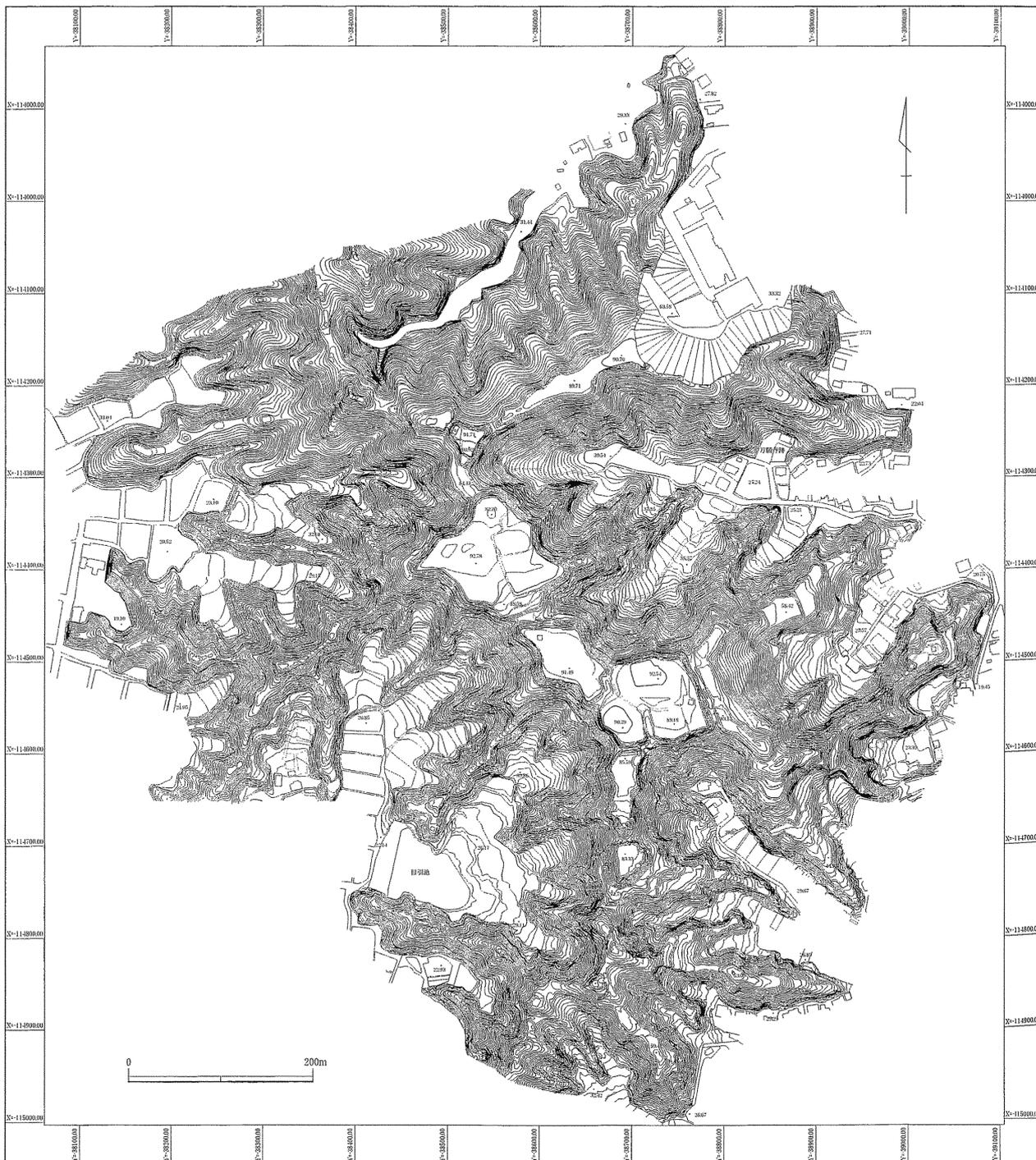
平成13年(2001)、田代学氏が「原典史料にみる宮崎城」を発表した(田代2001)。氏は宮崎城に関する文献をまとめるとともに、近世に編まれた複数の家譜類・軍記物や明治期の地誌、先行研究を比較して曲輪名の考察等をおこなっている。またこれら文献を用いて慶長5年の宮崎城戦について、「晦日」の日付をはじめとする極めて詳細な検討をおこなっている。氏の論考は二次史料に重きを置き過ぎる観があるものの、宮崎城の別名とされる「目引城」「馬索城」が史料上に確認されるか否かの検討や、巷間の「宮崎城には金の天守があった」という説への冷静な分析、先の『日向地誌』で紹介された人名を冠した曲輪伝承名についての、調査時点の土地所有者たちによる自らの祖先が守将であったとの主張によるものではないかとの推定など、魅力的な卓見が光る。

平成14年(2002)、若山浩章氏は「戦国末期の宮崎城下の町 - 上井覚兼在城時を例にして -」で先の論考に続き『上井覚兼日記』から宮崎城の普請と作事に関わる記事を抽出・分析し、史料から城郭の変化を捉える試みをおこなった(若山2002)。普請については日記中に認められる「和田口」「野首口」「目引口」「金丸口」「柏田口」「町口」の記事を抽出し、「城下」の町と密接に関わる口の整備に重点を置いたと分析し、また簡易な整備・準備作業であった弓場の普請は、覚兼が監督し衆中が作業にあたる武家儀礼的な要素が認められるとしている。作事については毘沙門堂と茶室に関する記述が大きな比重を占め、これは城が宗教や文化的な空間を含むようになったことの表れとしている。同論考は『上井覚兼日記』から宮崎城の内部構造を本格的に検討した初の研究と位置付けられる。

平成16年(2004)、千田嘉博氏が「戦国期の城下町構造と基層信仰 上井覚兼の宮崎城下町を事例に」を発表し、宮崎市の依頼により千田氏が平成12・13年度に作成した宮崎城跡縄張図が掲載された(千田2004)。氏は城内ルートの復元や各曲輪の機能を検討しながら遺構ひとつひとつについて詳述し、宮崎城跡の構造を細部に至るまで明らかにした。くわえて主郭における御殿や会所空間、庭園、茶室、風呂、工房などの存在や建物配置等、地表面観察からはわからない細部の構造について、『上井覚兼日記』を分析し、言及している。また一定地域がゆるやかに結合した分散的な構造の宮崎城下についての分析をおこない、覚兼は周辺寺社と深い関係を結んでいたが、職人集団を把握し交易・流通機構

の核であったこの寺社の存在こそが、「宮崎城下町」が凝集性の高い戦国期城下町となることを阻んだ要因であったと分析した。

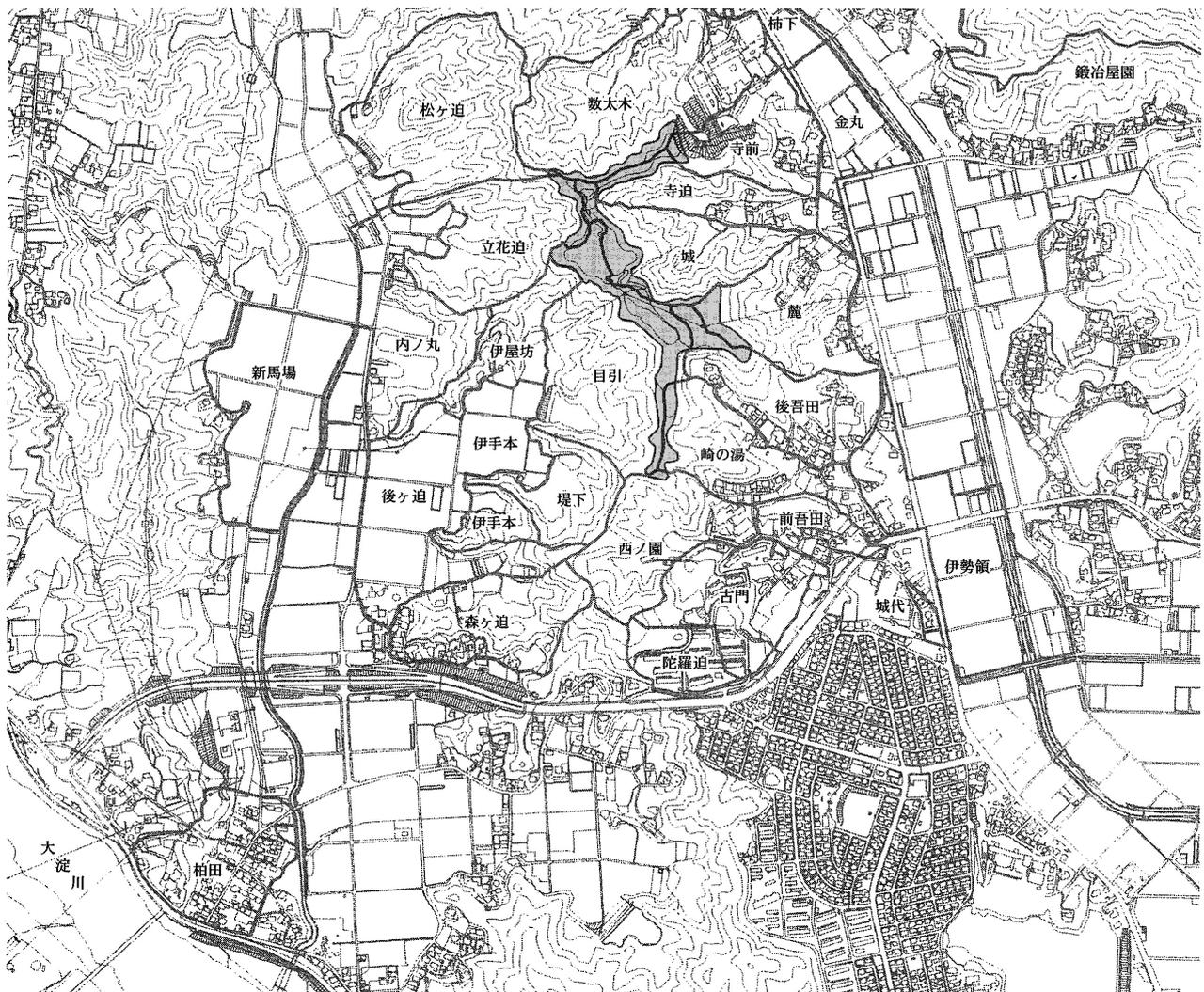
平成 21 年（2009）、宮崎市教育委員会が平成 16～19 年度に作成した地形測量図（第 7 図）を『宮崎城跡測量調査報告書』（宮崎市教委編 2009）として刊行した。同書中では先述の千田嘉博氏による縄張図（42 頁第 42 図）、および同論考中の縄張解説、『上井覚兼日記』による細部の構造に言及した部分等を抜粋して掲載している。また宮崎城跡周辺の地名（小字名）（第 8 図）を図示している。



第 7 図 宮崎城跡現況地形測量図 ※宮崎市教委編 2009 より転載

平成 25 年（2013）、八巻孝夫氏が「日向国・宮崎城の基礎研究」を発表した（八巻 2013）。氏は昭和 62 年の『図説中世城郭事典』において宮崎城初となる縄張図を発表していたが、氏自身が改めて再調査をおこない、新知見を加えて加筆・修正した縄張図第 2 版（43 頁第 43 図）を掲載している。踏査範囲を大きく広げて新発見となる遺構を多く図化するとともに、曲輪や各遺構について本来の微地形とそれに造作が加えられた機能的な意味等を考察しながら詳述している。また尾根上に城内側を敵とする構え方の遺構を複数確認し、慶長 5 年の宮崎城戦において守り手側の防御強化、攻め手側の陣地構築などにより城域が拡大したと推考している。同論考ではこれまでの宮崎城跡を巡る研究史を詳細にまとめるとともに、畝状空堀群を多用した秋月氏一族の高橋氏が領有しながら宮崎城跡に同種の遺構が認められないことや、南九州に特徴的な群郭式城郭の中での位置付け、権力構造が縄張に反映されたとする議論についての検討等、多岐にわたる総合的な考察がおこなわれている。

平成 27 年（2015）、竹中克繁が「宮崎城に対峙する陣跡－宮崎市池内町字陣ノ平所在の城郭関連遺構－」を発表した（竹中 2015）。これは宮崎城跡に近接して所在する攻城側の陣跡と考えられる遺構について縄張図を作成、掲載したもので（第 9 図）、宮崎城跡そのものについての検討ではないが、



第 8 図 宮崎城跡周辺の小字名 ※宮崎市教委編 2009 より転載

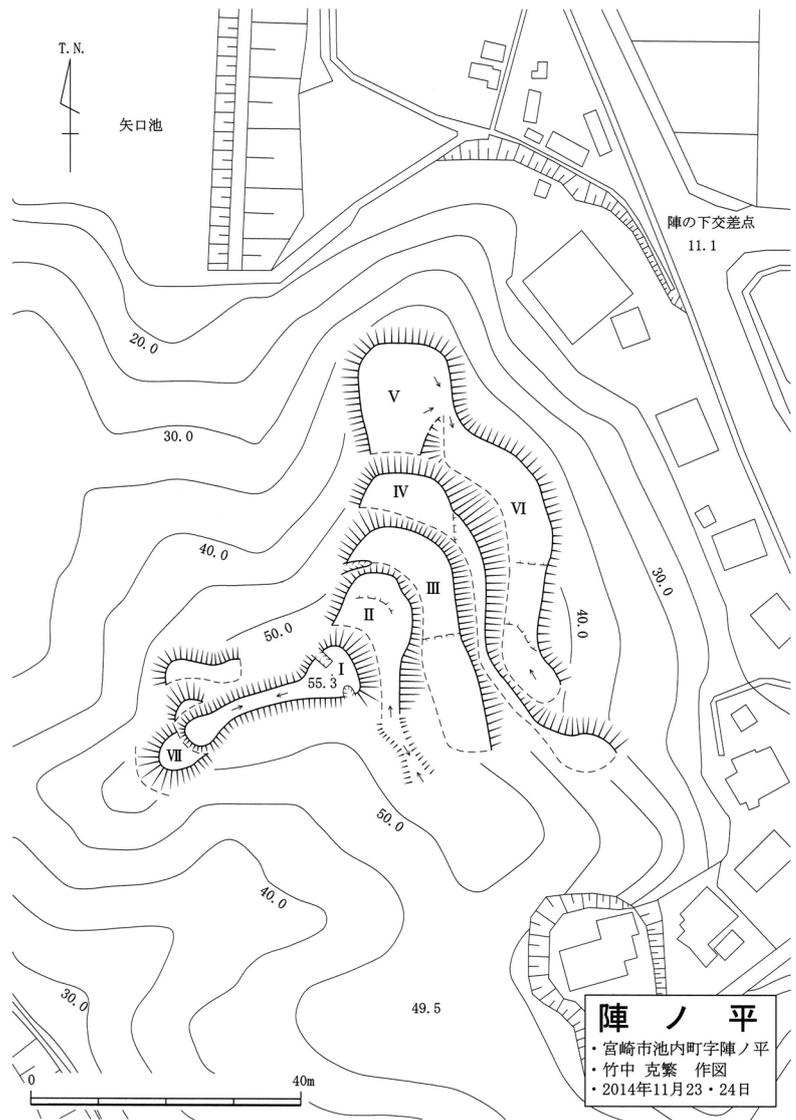
宮崎城の歴史を具体的に復元する上での資料整備として位置付けられる。

平成 29 年 (2017) の第 34 回全国城郭研究者セミナーにおいて、新名一仁氏が『上井覚兼日記』にみる南九州の城郭—その利用実態と攻城戦—と題する発表をおこなった (新名 2017)。氏は日記中に確認できる 5ヶ所の登城口の比定や曲輪の呼称等、宮崎城跡を分析の主眼に据えつつ、広く他の城郭についての記述も抽出し、日記から読み取れる城郭に関する情報の検討をおこなっている。

翌平成 30 年 (2018)、前年に続き新名一仁氏が『上井覚兼日記』にみる土木事業—城郭普請を中心に—を発表した (新名 2018)。同論考は書籍『戦国大名の土木事業』中に書かれたもので、『上井覚兼日記』の分析により戦国島津氏領国における土木事業の一端を明らかにすることを目的としたものである。したがって分析は宮崎城に限定したものではないが、風呂、茶室、毘沙門堂、弓場など宮崎城内の普請と作事を抽出して検討し、先の千田嘉博、

若山浩章両氏による研究を継承・発展させたものとなっている。また梅雨明け後に城内のメンテナンスを行うことが多かったとの分析は、宮崎城往時の内部景観を具体的にイメージする一助となる。

以上、宮崎城跡に関する調査・研究史を概観した。その特色として、城郭研究を構成する縄張・史料・考古学の 3 分野中、『上井覚兼日記』を主にした史料研究が継続しておこなわれており、また縄張研究では千田嘉博、八巻孝夫両氏による傑出した成果があるという 2 点が挙げられる。言い換えれば考古学の分野のみが、これまで発掘調査がおこなわれていなかったこともあって完全な空白の状態にあり、次章に報告する平成 29・30 年度の確認調査が初の考古学的成果となる。『上井覚兼日記』という無二の歴史資料を有する宮崎城は、縄張、史料、考古学の学際的研究を実現しうる極めて重要な存在である。史料分野における先の新名一仁氏の発表中でも「考古学的調査との比較が期待されている」(新名 2017) と述べられており、今後 3 分野総合の城郭研究が宮崎城跡で進展していくことが望まれる。



第 9 図 宮崎城跡に近接する攻城側の陣跡  
※竹中 2015 より転載

【引用・参考文献】

- 児玉幸多・坪井清足監修 1980 年『日本城郭大系』第 16 卷 大分・宮崎・愛媛 株式会社新人物往来社
- 千田嘉博 2004 年「戦国期の城下町構造と基層信仰 上井覚兼の宮崎城下町を事例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 112 集 国立歴史民俗博物館
- 竹中克繁 2015 年「宮崎城に対峙する陣跡－宮崎市池内町字陣ノ平所在の城郭関連遺構－」『宮崎考古』第 26 号 宮崎考古学会
- 田代 学 2001 年「原典史料にみる宮崎城」『宮崎県地方史研究紀要』第 27 輯 宮崎県立図書館
- 富永嘉久 1978 年「宮崎城址及びその周辺」『会報』第 3 号 宮崎県地方史研究会
- 新名一仁 2017 年「『上井覚兼日記』にみる南九州の城郭－その利用実態と攻城戦－」『第 34 回 全国城郭研究者セミナー』資料
- 新名一仁 2018 年「『上井覚兼日記』にみる土木事業－城郭普請を中心に」『戦国大名の土木事業 中世日本の「インフラ」整備』戎光祥出版株式会社
- 野口逸三郎校訂・解題 1976 年『日向地誌（復刻版）』新潮社
- 宮崎縣編 1927 年『宮崎縣史蹟調査』第 1 輯 宮崎縣
- 宮崎県教育庁文化課編 1998 年『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅰ 地名表・分布地図編』宮崎県教育委員会
- 宮崎県教育庁文化課編 1999 年『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ 詳説編』宮崎県教育委員会
- 宮崎市教育委員会編 2009 年『宮崎城跡測量調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第 75 集 宮崎市教育委員会
- 八卷孝夫 1987 年「宮崎城」『図説中世城郭事典』第三卷 株式会社新人物往来社
- 八卷孝夫 2013 年「日向国・宮崎城の基礎研究」『中世城郭研究』第 27 号
- 若山浩章 1999 年「戦国末期の宮崎城下の町 －上井覚兼在城時を例にして－」『宮崎県地方史研究紀要』第 25 輯 宮崎県立図書館
- 若山浩章 2002 年「中世城郭の普請と作事 －『上井覚兼日記』に見られる宮崎城の普請と造作を中心に－」『宮崎県地方史研究』第 15 号 宮崎県地域史研究会

## 第2章 発掘調査成果

### 第1節 平成29・30年度調査の概要

平成29・30年度に曲輪Ⅰ（主郭）、Ⅱ（百貫城）、Ⅲ（野首城）、Ⅴ（彦右衛門城）、Ⅷ（服部城）の主要5曲輪で確認調査を実施し、遺構・遺物の保存状態確認をおこなった（第10図）。

平成29年度調査は平成29年（2017）11月6～30日、曲輪Ⅲに2×5m規模のトレンチを2ヶ所、2×3.6m規模のトレンチを1ヶ所設定して実施した（H29－ⅢA～C。第27図）。調査面積は計27.2㎡である。平成30年度調査は平成30年（2018）4月16日～6月13日、曲輪Ⅰで3×3m規模の調査区を4ヶ所（H30－ⅠA～D。第11図）、曲輪Ⅱで2×5m規模のトレンチを1ヶ所（H30－ⅡA。第24図）、曲輪Ⅴで3×3m規模の調査区を1ヶ所（H30－ⅤA。第35図）、曲輪Ⅷで2×5m規模のトレンチを1ヶ所（H30－ⅧA。第38図）設定して実施した。調査面積は計65㎡である。2ヶ年度の調査で設定したトレンチ・調査区計10ヶ所の総調査面積は92.2㎡である。

なお遺構検出後、ピットは埋土を検出面から深5cm前後掘り下げ、遺構か否かの検証と上端形状の確認をおこなった。同じく土坑は半裁ないし一部の掘り下げ、溝状遺構および他の遺構はサブトレンチによる一部の掘り下げをおこなった。

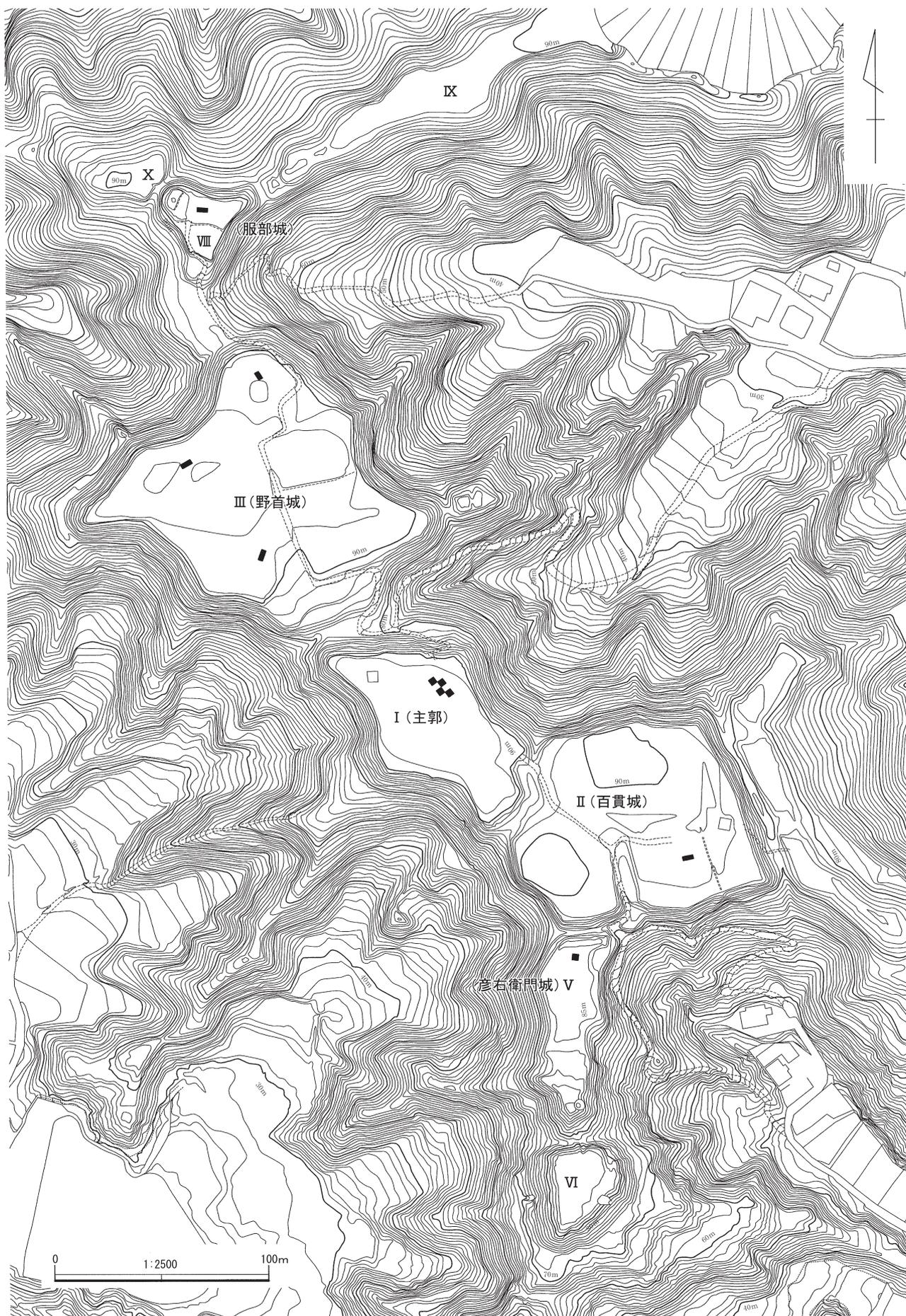
### 第2節 調査成果

#### （1）曲輪Ⅰ（主郭）

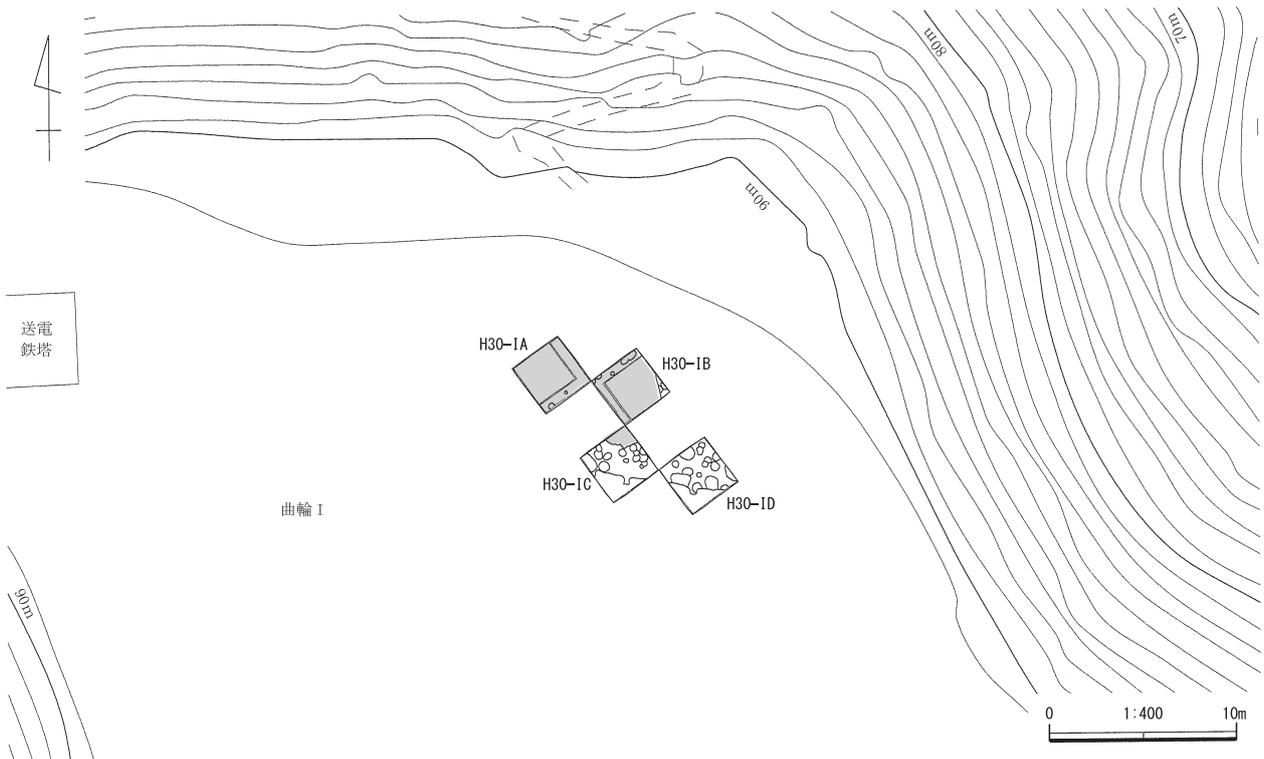
**H30－ⅠA**（第12・13図） 現地表よりの深0.1～0.2mで地山ブロック、焼土、炭を多く含有し、極めて硬くしまる褐色土（3層）が全面に検出された。土中には陶磁器類をはじめ遺物が一定量混入し、特に土師器坏片が多い。調査区東壁際および南壁際で幅0.6mのサブトレンチを設定してこの褐色土の掘り下げをおこない、南東角では検出面よりの深0.2m、南西角では深0.3m弱でローム土の地山を検出したが、サブトレンチの大部分では検出面からの深0.4mでも地山が検出されず掘り下げを中止した。土の様相からこの褐色土は人為的な埋め立て土の可能性が高い。

**H30－ⅠB**（第14～16図） 現地表よりの深0.1～0.2mでH30－ⅠAと同じ褐色土が検出されるが、調査区南東部ではローム土の地山が検出された。褐色土については幅0.6mのサブトレンチを設定して掘り下げをおこなった。北東角では検出面よりの深0.03mで地山が検出されたが、0.07m前後の段差がついたのち西にかけて緩やかに下がる。同じく南西角でも検出面よりの深0.06mで地山が検出されたが、北に向かって垂直に近く落ち込んでいる。サブトレンチの大半では検出面よりの深0.35mでも地山が検出されず掘り下げを中止した。褐色土中（3層）より平瓦2点が出土している（第16図64・65。土層断面図では3点だが接合）。褐色土の検出面では長軸0.9m、短軸0.5mの範囲で土師器坏片が多量に出土した（第14図。第15図46～58）。また客土中より華南彩片が出土し、線刻から鴨の尾羽と判断される（第15図45）。水注と思われるが器壁が薄く水滴の可能性もある。

**H30－ⅠC**（第17・18図） 現地表よりの深0.15～0.2mでローム土による地山が面的に検出されたが、北東部ではH30－ⅠA・Bと同じく褐色土が検出された。地山面では土坑1基、ピット13基が検出された。土坑は半裁し、検出面よりの深0.15mで掘り下げを中止したが、埋土中より基石

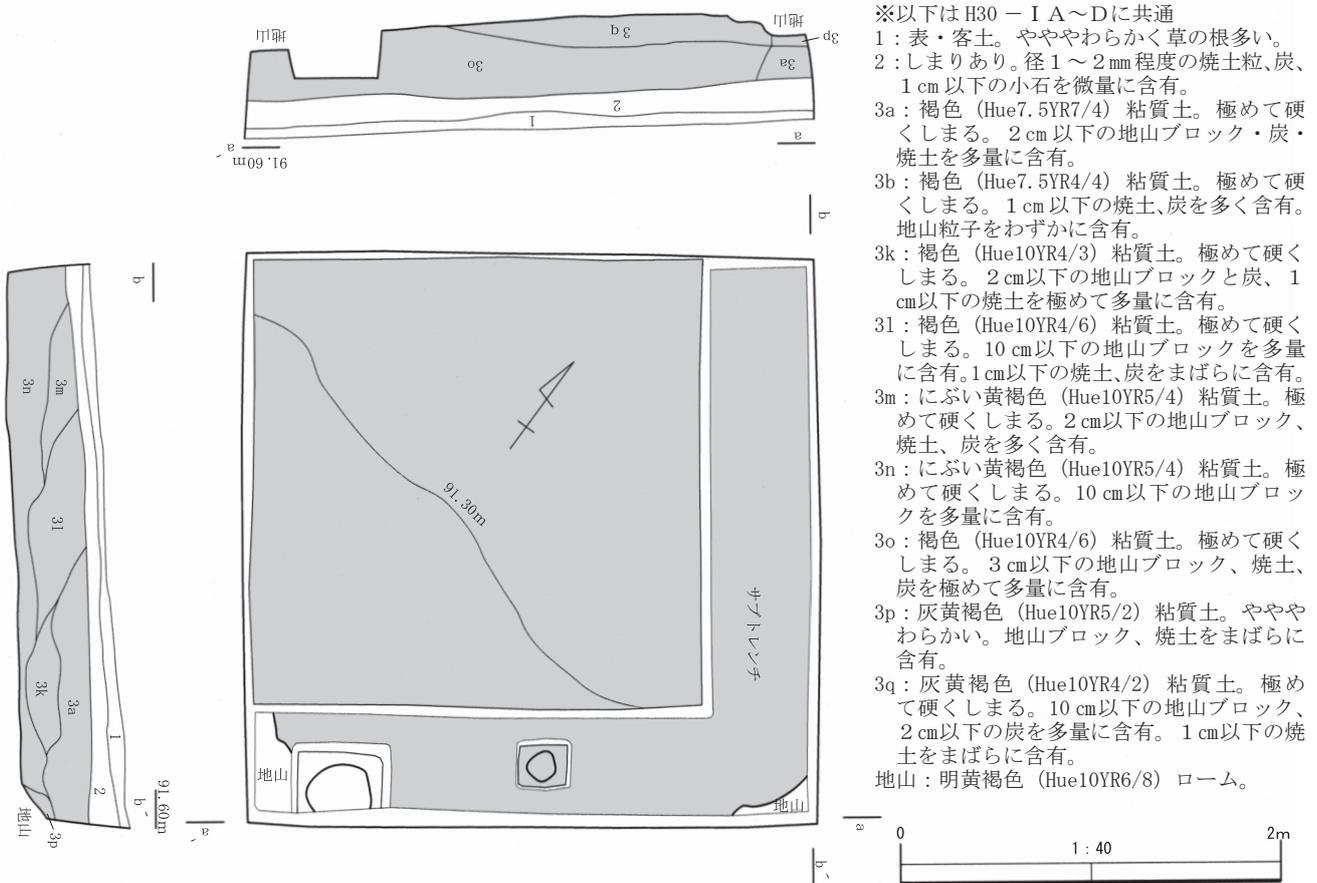


第 10 図 平成 29・30 年度調査箇所位置図 (Scale : 1 / 2500)



第11図 曲輪I調査区配置図 (Scale: 1/400)

※アミは人為的な埋め立ての可能性が高い褐色土

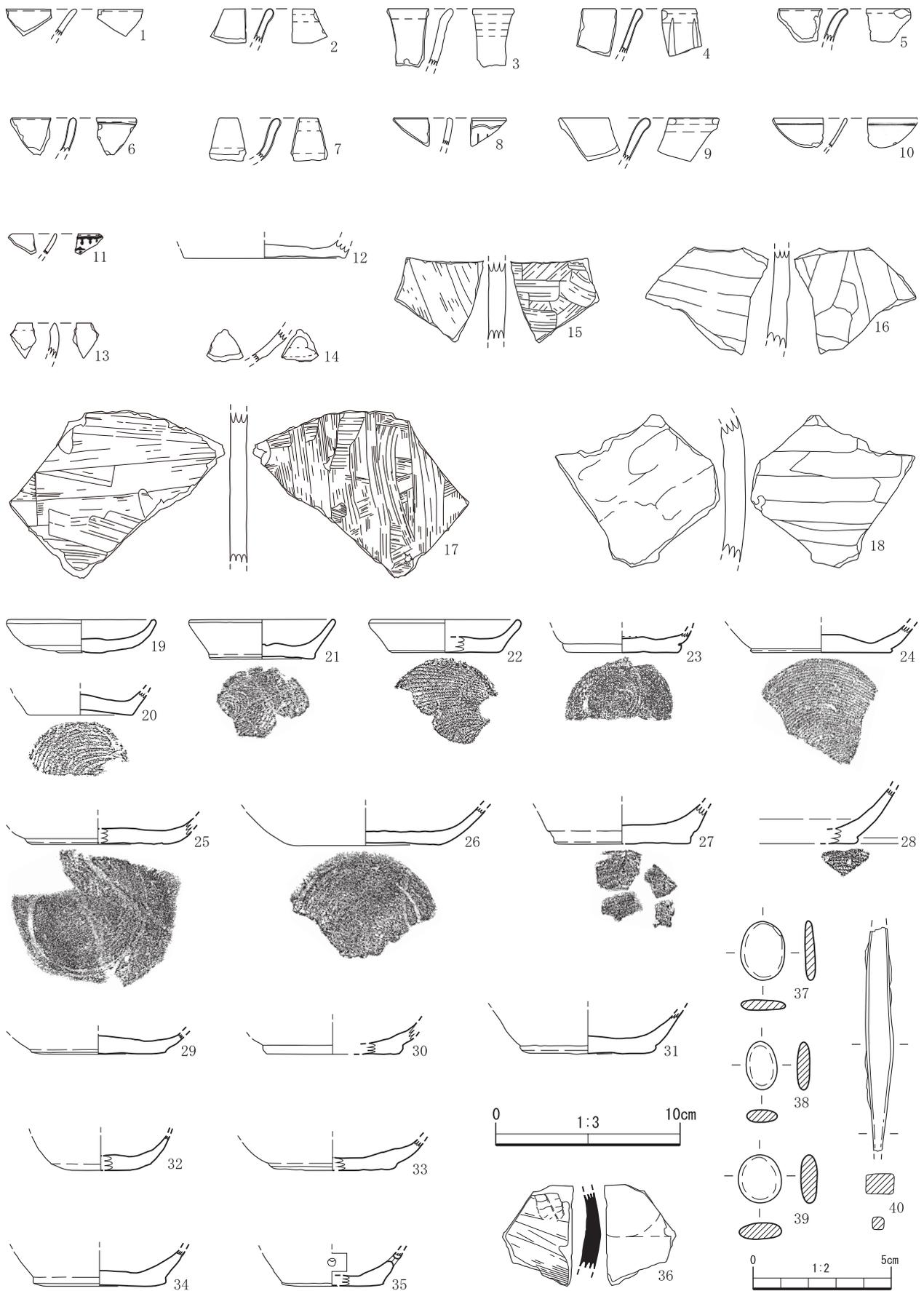


第12図 H30-1A平面・土層断面図 (Scale: 1/40)

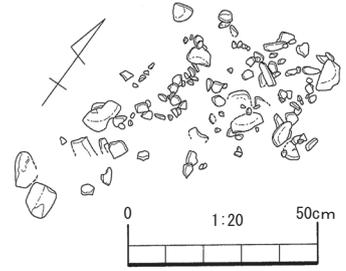
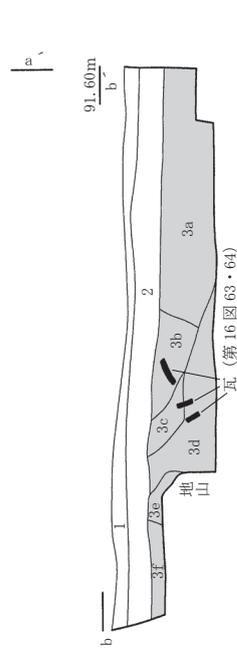
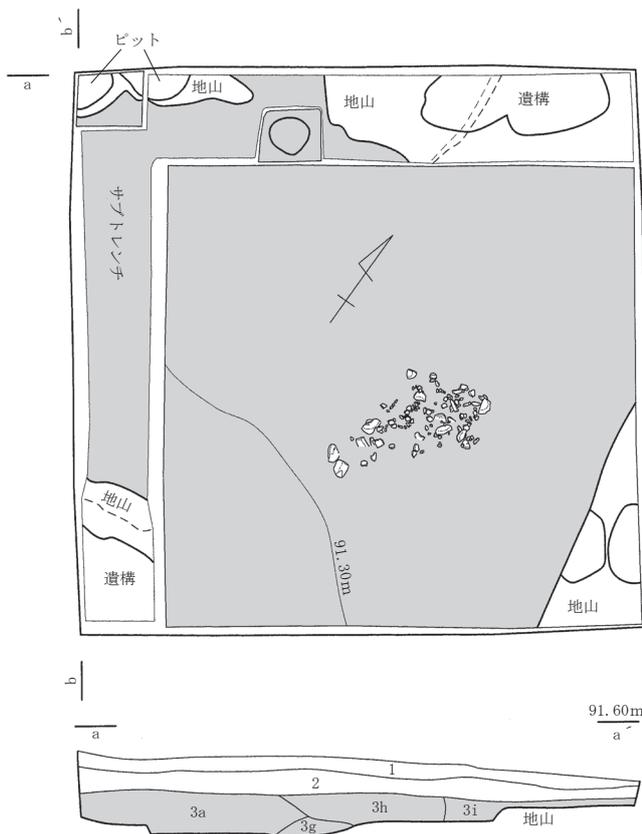
※アミは人為的な埋め立ての可能性が高い褐色土

※以下はH30-1A~Dに共通

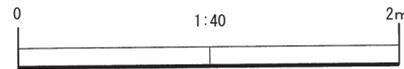
- 1: 表・客土。やややわらかく草の根多い。
  - 2: しまりあり。径1~2mm程度の焼土粒、炭、1cm以下の小石を微量に含有。
  - 3a: 褐色 (Hue7.5YR7/4) 粘質土。極めて硬くしまる。2cm以下の地山ブロック・炭・焼土を多量に含有。
  - 3b: 褐色 (Hue7.5YR4/4) 粘質土。極めて硬くしまる。1cm以下の焼土、炭を多く含有。地山粒子をわずかに含有。
  - 3k: 褐色 (Hue10YR4/3) 粘質土。極めて硬くしまる。2cm以下の地山ブロックと炭、1cm以下の焼土を極めて多量に含有。
  - 3l: 褐色 (Hue10YR4/6) 粘質土。極めて硬くしまる。10cm以下の地山ブロックを多量に含有。1cm以下の焼土、炭をまばらに含有。
  - 3m: にぶい黄褐色 (Hue10YR5/4) 粘質土。極めて硬くしまる。2cm以下の地山ブロック、焼土、炭を多く含有。
  - 3n: にぶい黄褐色 (Hue10YR5/4) 粘質土。極めて硬くしまる。10cm以下の地山ブロックを多量に含有。
  - 3o: 褐色 (Hue10YR4/6) 粘質土。極めて硬くしまる。3cm以下の地山ブロック、焼土、炭を極めて多量に含有。
  - 3p: 灰黄褐色 (Hue10YR5/2) 粘質土。やややわらかい。地山ブロック、焼土をまばらに含有。
  - 3q: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 粘質土。極めて硬くしまる。10cm以下の地山ブロック、2cm以下の炭を多量に含有。1cm以下の焼土をまばらに含有。
- 地山: 明黄褐色 (Hue10YR6/8) ローム。



第13图 H 30 - I A出土遺物 (1 ~ 36 Scale: 1/3、37 ~ 40 Scale: 1/2)



- ※以下は H30 - I A ~ D に共通
- 1: 表・客土。やややわらかく草の根が多い。
  - 2: しまりあり。径 1 ~ 2 mm 程度の焼土粒、炭、1 cm 以下の小石を微量に含有。
  - 3a: 褐色 (Hue7.5YR7/4) 粘質土。極めて硬くしまる。2 cm 以下の地山ブロック・炭・焼土を多量に含有。
  - 3b: 褐色 (Hue7.5YR4/4) 粘質土。極めて硬くしまる。1 cm 以下の焼土、炭を多く含有。地山粒子をわずかに含有。
  - 3c: 褐色 (Hue7.5YR4/4) 粘質土。極めて硬くしまる。1 cm 以下の地山ブロックを多く含有。
  - 3d: 褐色 (Hue7.5YR4/4) 粘質土。極めて硬くしまる。5 mm 程度の炭、焼土、地山ブロックまばらに含有。

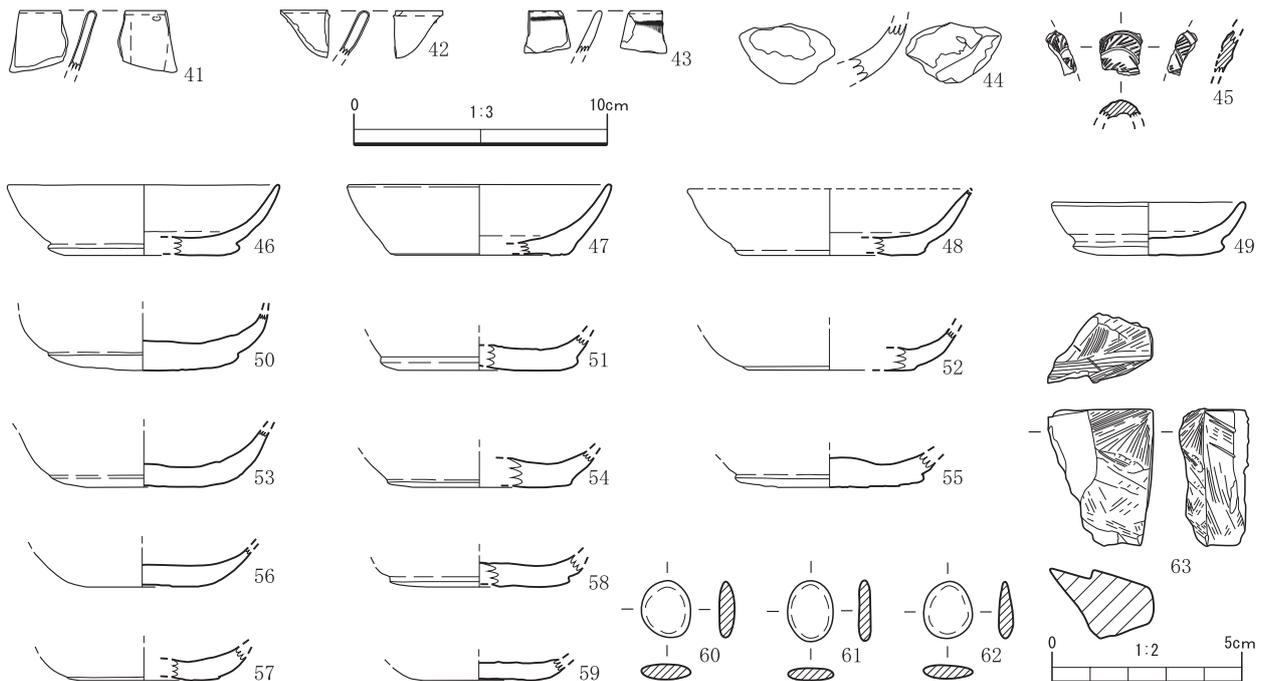


- 3e: 褐色 (Hue7.5YR4/3) 粘質土。極めて硬くしまる。2 cm 以下の地山ブロック極めて多量に含有。
- 3f: 褐色 (Hue7.5YR4/4) 粘質土。極めて硬くしまる。1 cm 程度の焼土、炭を微量に含有。
- 3g: 黄褐色 (Hue10YR5/6) 粘質土。極めて硬くしまる。5 cm 以下の地山ブロック多量に含有。1 cm 以下の炭を含有。
- 3h: 黄褐色 (Hue10YR5/6) 粘質土。極めて硬くしまる。地山ブロッ

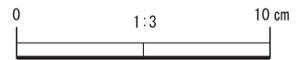
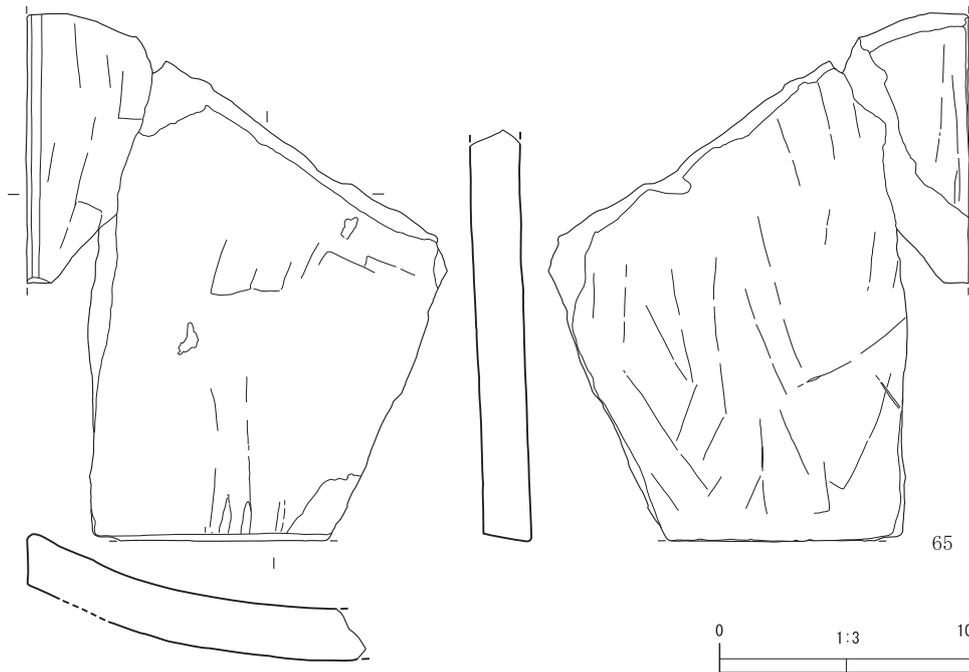
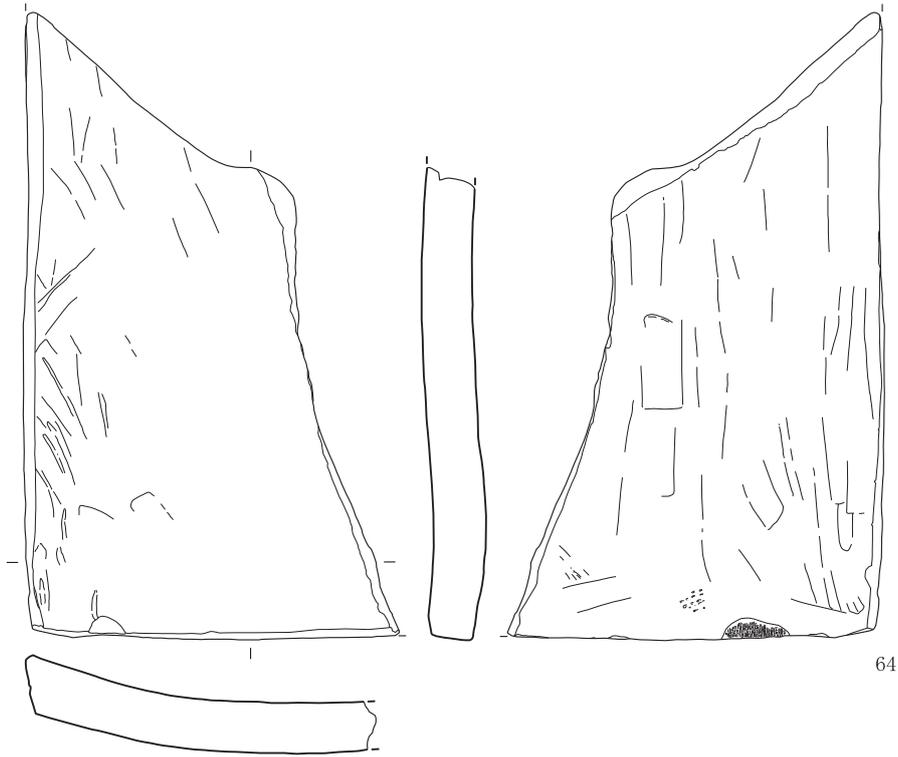
- ク及び地山斑を極めて多量に含有。1 cm 以下の焼土、炭まばらに含有。
- 3i: 褐色 (Hue10YR4/6) 粘質土。極めて硬くしまる。5 mm 程度の地山ブロック・焼土を極めて多量に含有。炭微量に含有。
- 3j: 褐色 (Hue10YR4/3) 粘質土。極めて硬くしまる。地山ブロック多量に含有。
- 地山: 明黄褐色 (Hue10YR6/8) ローム。

第 14 図 H 30 - I B 平面・土層断面図 (Scale : 1 / 40) および土師器坏出土平面図 (Scale : 1 / 20)

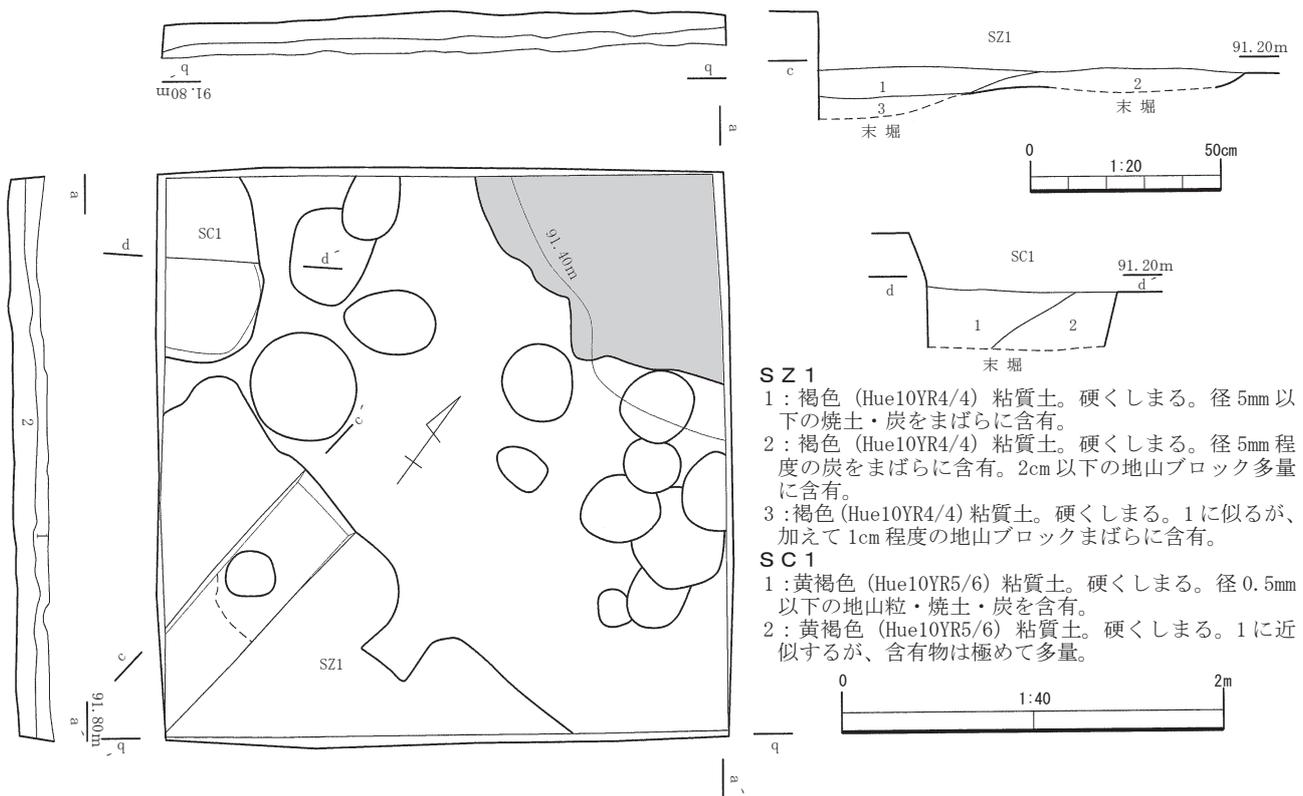
※アミは人為的な埋め立ての可能性が高い褐色土



第 15 図 H 30 - I B 出土遺物① (41 ~ 59 Scale : 1 / 3、60 ~ 63 Scale : 1 / 2)



第 16 図 H 30 - I B 出土遺物② (Scale : 1 / 3)

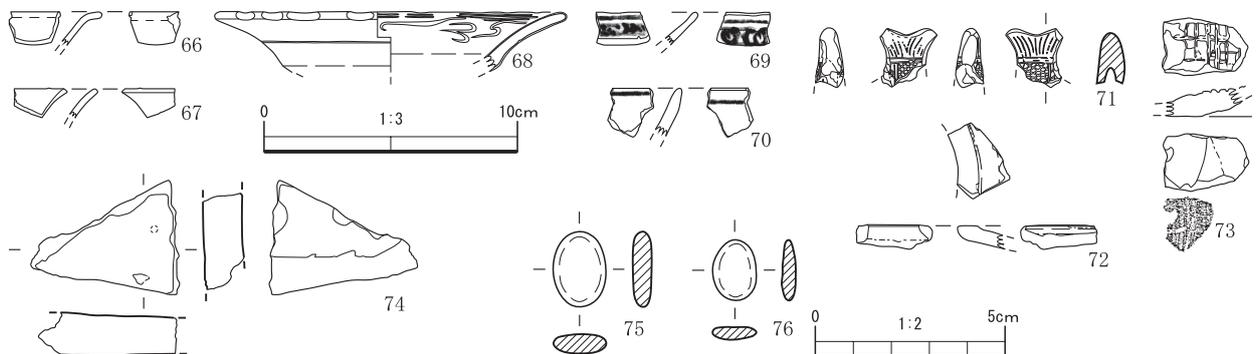


※以下はH30 - I A~Dに共通

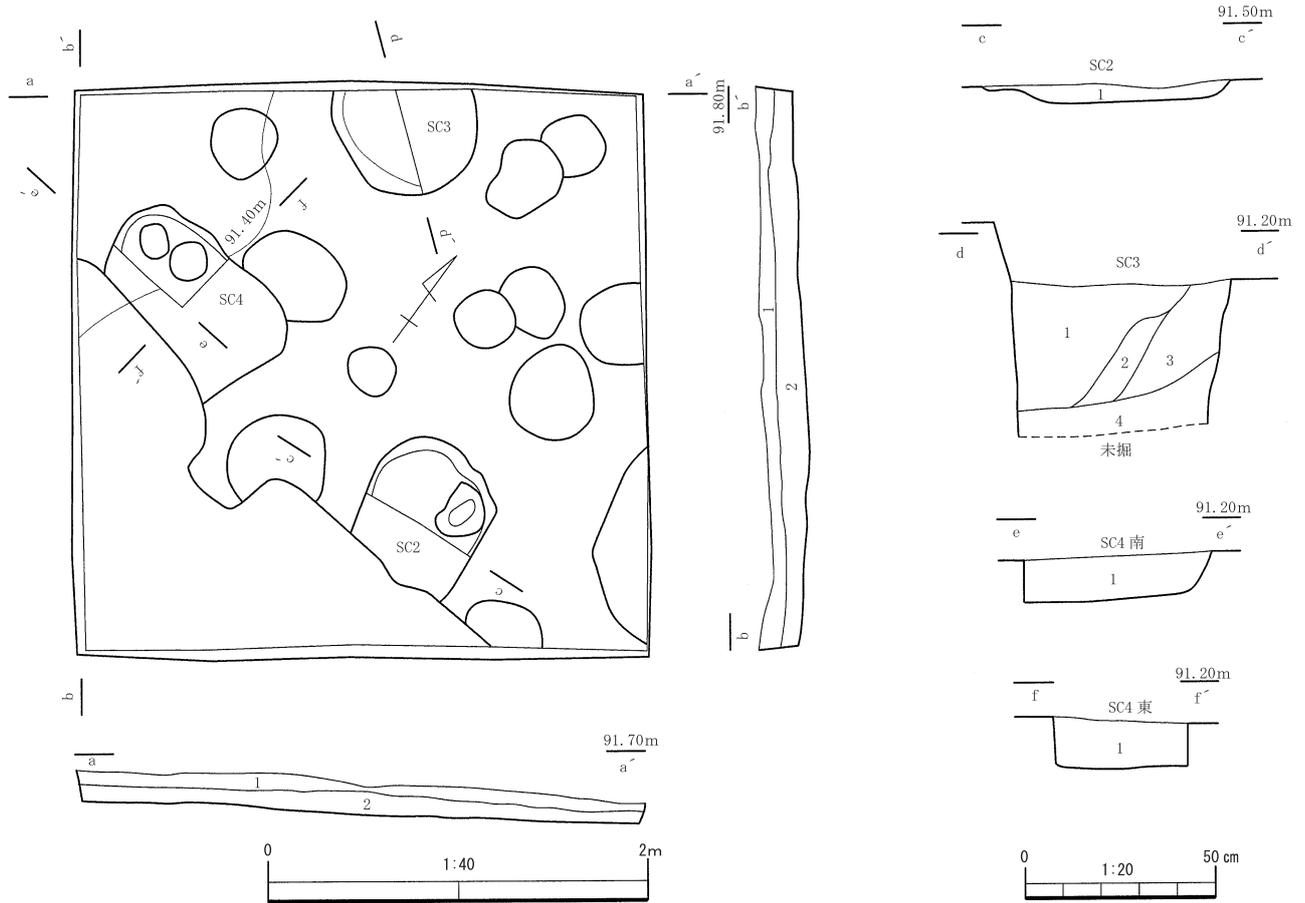
- 1: 表・客土。やややわらかく草の根多い。
- 2: しまりあり。径1~2mm程度の焼土粒・炭、1cm以下の小石を微量に含有。地山: 明黄褐色 (Hue10YR6/8) ローム。

第17図 H30 - I C平面・土層断面図 (Scale: 1/40) および遺構土層断面図 (Scale: 1/20)

※アミは人為的な埋め立ての可能性が高い褐色土



第18図 H30 - I C出土遺物 (66~74 Scale: 1/3、75・76 Scale: 1/2)



**H 30 - I D**

※以下は H30 - I A ~ D に共通

- 1 : 表・客土。やややわらかく草の根多い。
- 2 : しまりあり。径 1 ~ 2 mm 程度の焼土粒、炭、1 cm 以下の小石を微量に含有。

地山 : 明黄褐色 (Hue10YR6/8) ローム。

**SC 2**

- 1 : 褐色 (Hue7.5YR4/4) 粘質土。硬くしまる。径 1 cm 程の地山ブロックを多く含有。

**SC 3**

- 1 : 褐色 (Hue7.5YR4/6) 粘質土。硬くしまる。2、3mm の炭が微量に入る。地山土が斑状に多く含まれる。
- 2 : 褐色 (Hue7.5YR4/6) 粘質土。硬くしまる。1 に近似するが、地山斑は少ない。
- 3 : 褐色 (Hue7.5YR4/6) 粘質土。硬くしまる。1 と殆んど同じ。
- 4 : 褐色 (Hue7.5YR4/6) 粘質土。硬くしまる。1 に近似するが、地山斑は含まれない。

**SC 4**

- 1 : 黄褐色 (Hue10YR5/6) 粘質土。硬くしまる。地山土が斑状に多量に入る。φ 2、3mm の炭を微量に含有。

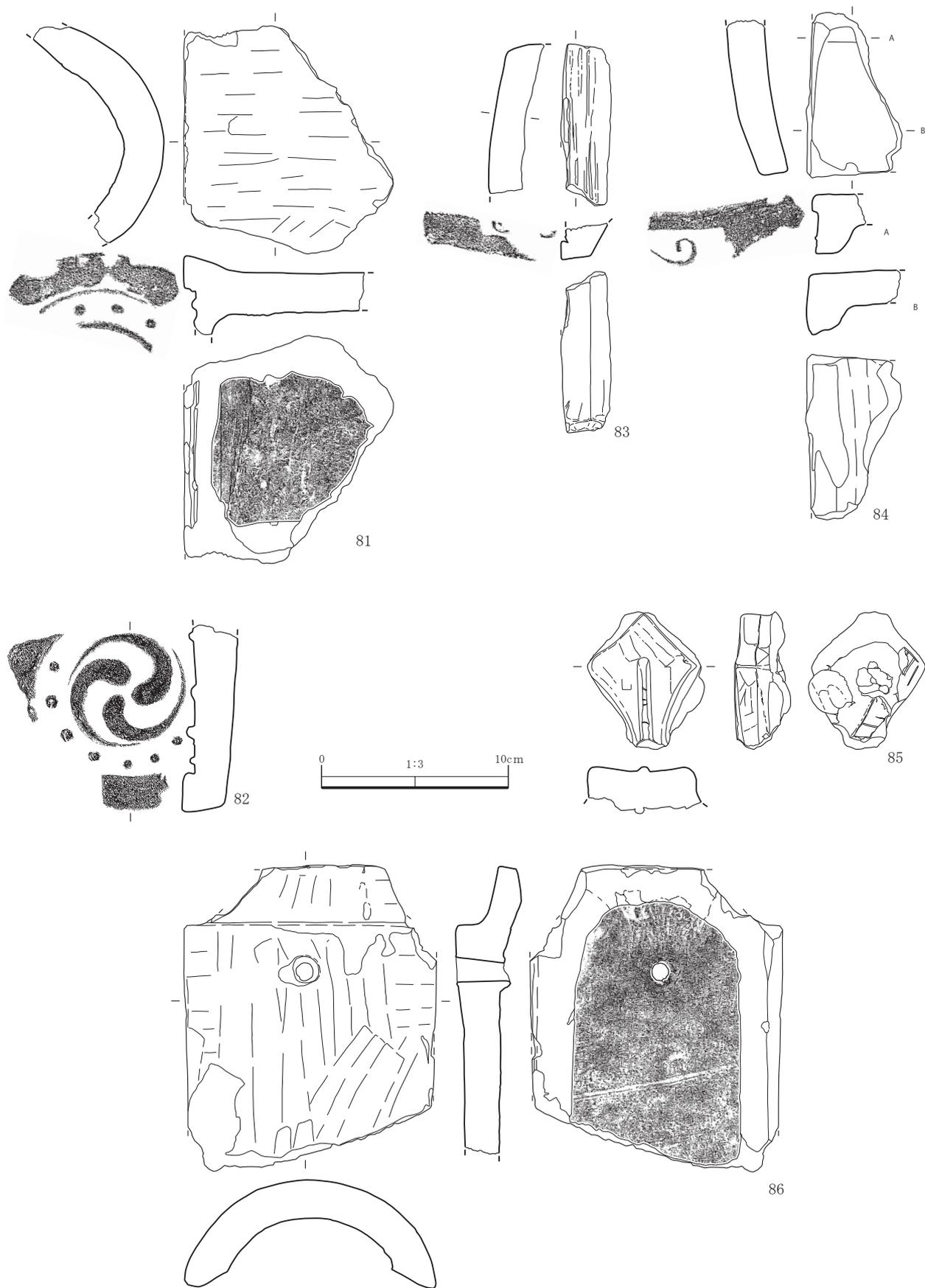
第 19 図 H 30 - I D 平面・土層断面図 (Scale : 1 / 40) および遺構土層断面図 (Scale : 1 / 20)



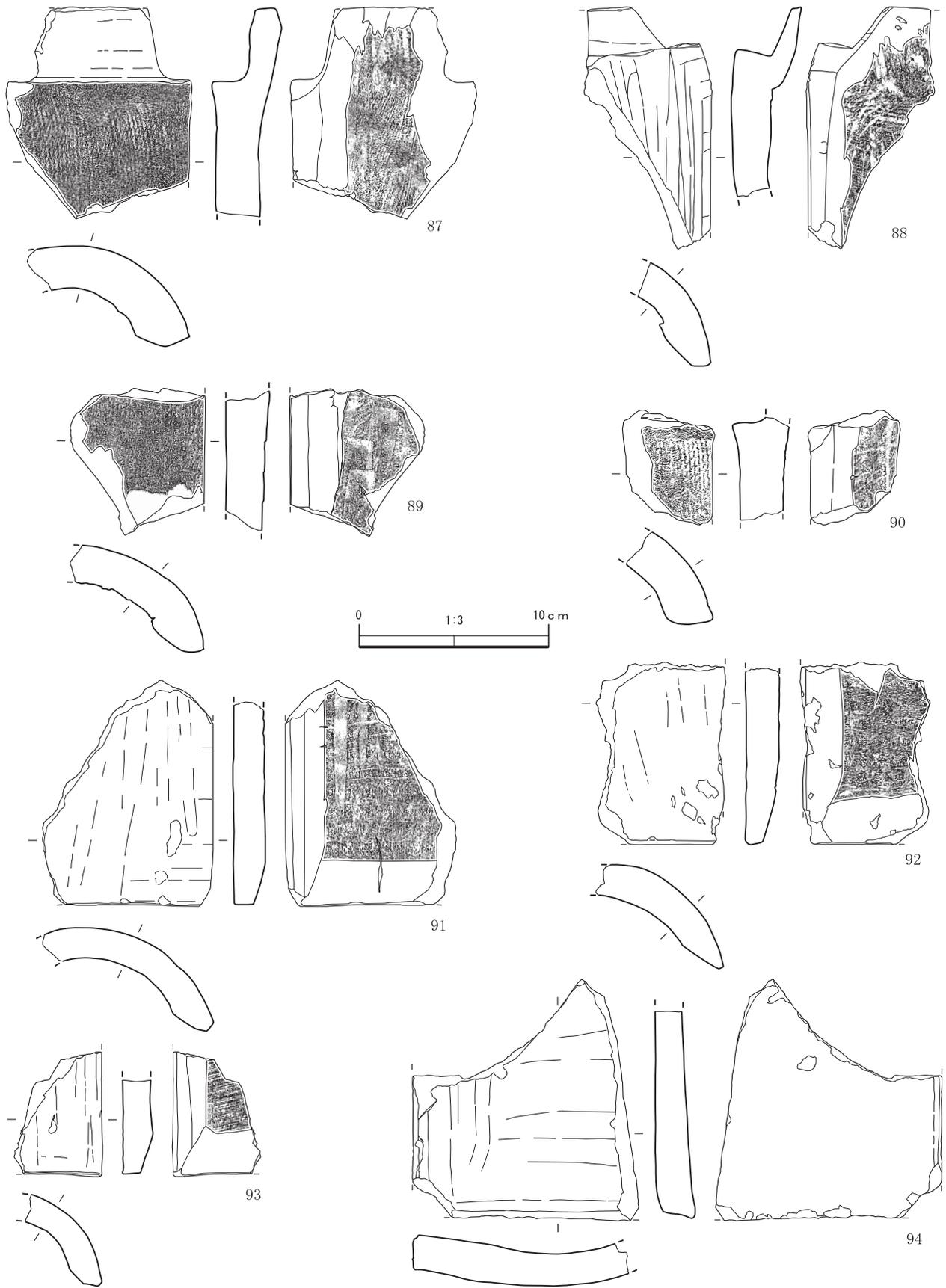
第 20 図 H 30 - I D 出土遺物 (Scale : 1 / 3)

が 1 点出土している (第 18 図 76)。調査区の南西では方形の堅穴建物が複数連結しているかのような平面形の遺構が検出された (SZ 1)。一部サブトレンチを設けたところ床面は内側に向けてゆるやかに下がり、壁際は溝状に下がるようである。用途、機能は不明であるが、埋土中より平瓦小片 (同 74) が出土している。また本調査区では客土中より華南彩魚形水滴片 (同 71)、おろし皿 (同 73) 等が出土している。魚形水滴は尾の部分で、身を反り返らせて尾を高く上げた形状の製品と思われる。

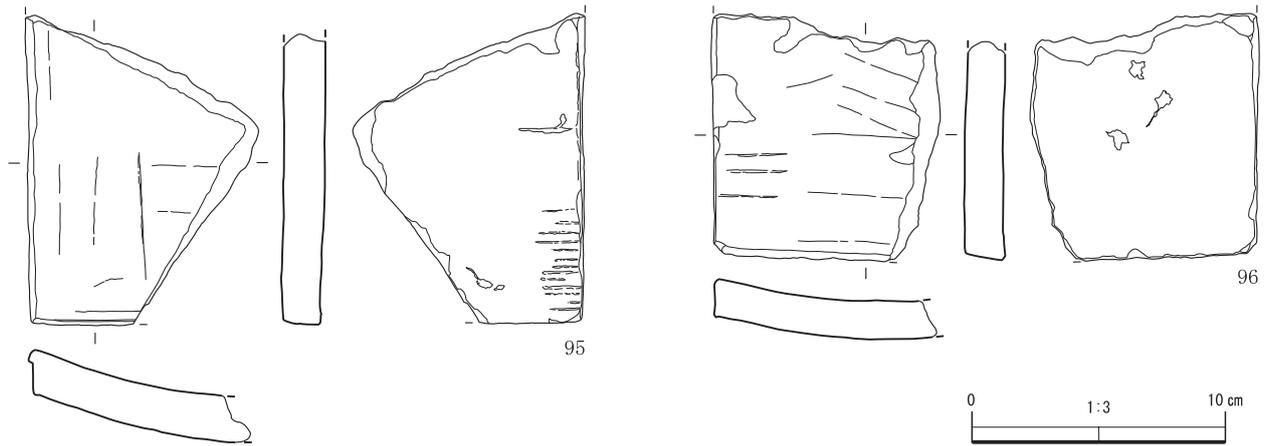
**H 30 - I D** (第 19・20 図) 現地表よりの深 0.1 ~ 0.2 m で全面的にローム土の地山が検出された。土坑 4 基、ピット 11 基および位置・形状から H 30 - I C で検出された連結堅穴状遺構と一連と考えられる遺構が検出された。土坑はうち 3 基で半裁ないし一部の掘り下げをおこなった。SC 3 は深 0.4 m でも底面が検出されなかったため掘り下げを中止した。



第 21 図 曲輪 I 表採遺物① (Scale : 1 / 3)



第22図 曲輪I表採遺物② (Scale: 1/3)



第23図 曲輪Ⅰ表採遺物③ (Scale : 1 / 3)

曲輪Ⅰ表採瓦 (第21～23図) 曲輪Ⅰ・Ⅲ間の堀切内である曲輪Ⅰの北側斜面下には多数の瓦片が散布している。位置から見て本来曲輪Ⅰのものであった可能性が極めて高い。81・82の軒丸瓦当は三つ巴紋で珠文がやや小さく、巴の頭は丸まって互いが離れ、尾は長いが圏線を形成するまでには至らない。83は軒平瓦当の顎の部分で、平瓦部との剥離面に圧着を高めるための沈線数条が観察される。85は飾瓦の一部で剣方喰や唐花等をかたどったものかとも思われるが、中央に茎状の表現があることがこれらと合致せずモチーフ不明である。丸瓦の凹面には87～90・93でコビキA、86・91でコビキBが観察される。またコビキAの87・89・90の凸面には縄目タタキののちナデ消しが施される。

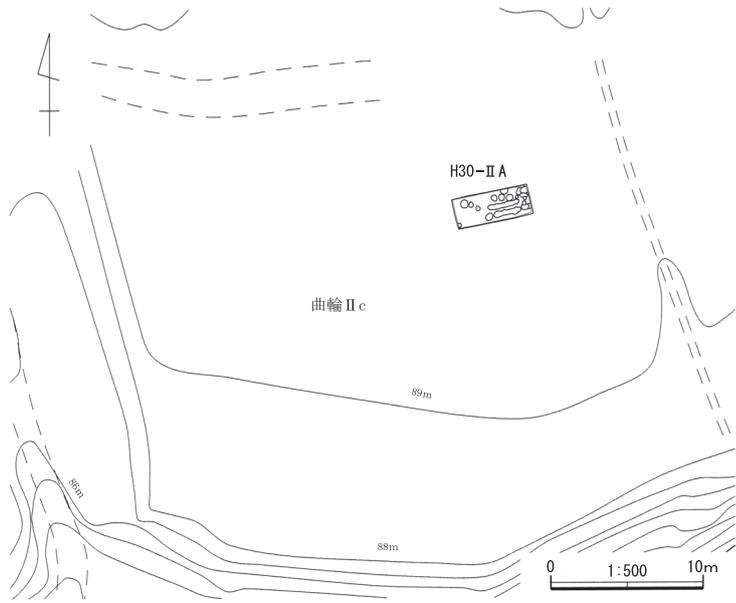
## (2) 曲輪Ⅱ (百貫城)

H 30 - Ⅱ A (第25・26図) 現地表よりの深0.2～0.35 mでローム土の地山となり、この面においてピット17基と短い溝状遺構2条が検出された。地山上より火縄銃の弾丸 (第26図113) や平瓦の小片 (同112)、客土中より天目碗 (同110) 等が出土している。

## (3) 曲輪Ⅲ (野首城)

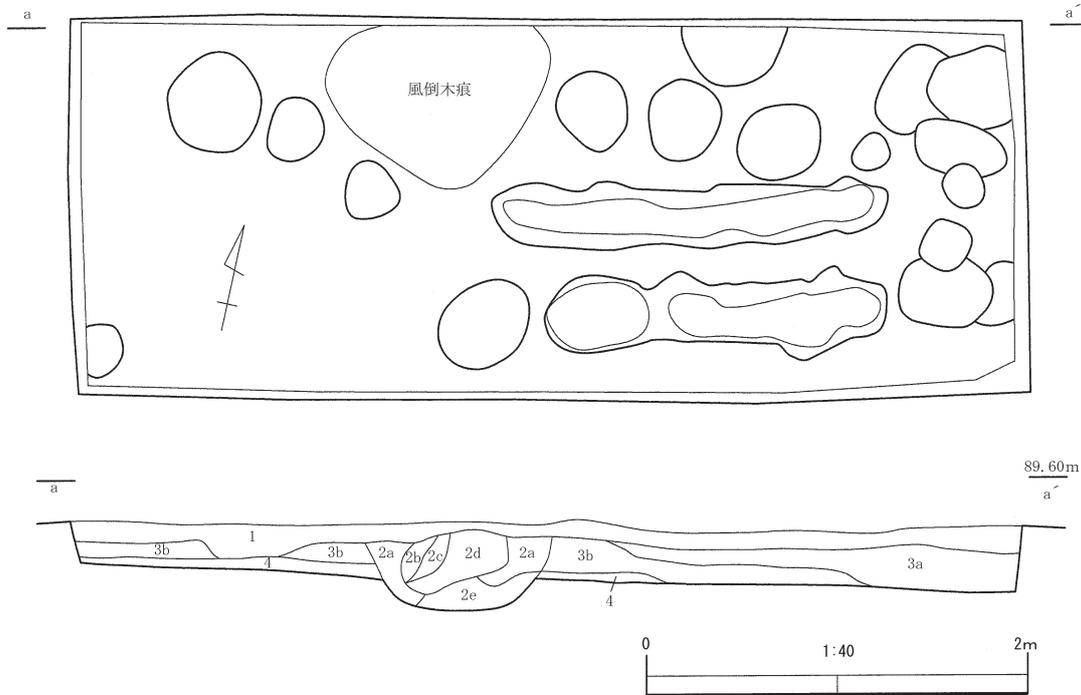
H 29 - Ⅲ A (第28・29図) 現地表よりの深0.35～0.45 mでローム土の地山となり、この面においてピット19基が検出された。またトレンチ中央から西にかけて長軸3.1 m以上で平面不整形の遺構が検出された。遺構内の掘削はおこなっていないため深さ等は不明である。埋土には地山のブロックや焼土、炭を多量に含有し、人為的に埋め立てられたものの可能性が高い。大型の土坑ないし堀・溝と考えられる。地山上より瓦質土器 (第29図146) が、客土中より碁石 (同152) 等が出土している。

H 29 - Ⅲ B (第30・31図) 現地表よりの深0.2 mでローム土の地山が検出され、この面において溝状遺構1条、ピット6基および、竪穴建物の角のように見受けられる遺構1基が検出された。なおこのローム土はやわらかく、地山面・遺構面である確認をおこなうためにトレンチ北壁際においてサブトレンチを設定して検出面よりの深0.2 mまで掘り下げ、その確認をおこなっている。客土中より平瓦片2点 (第31図166・167)、碁石などが出土している。また磁器質の馬具も出土している (同168)。

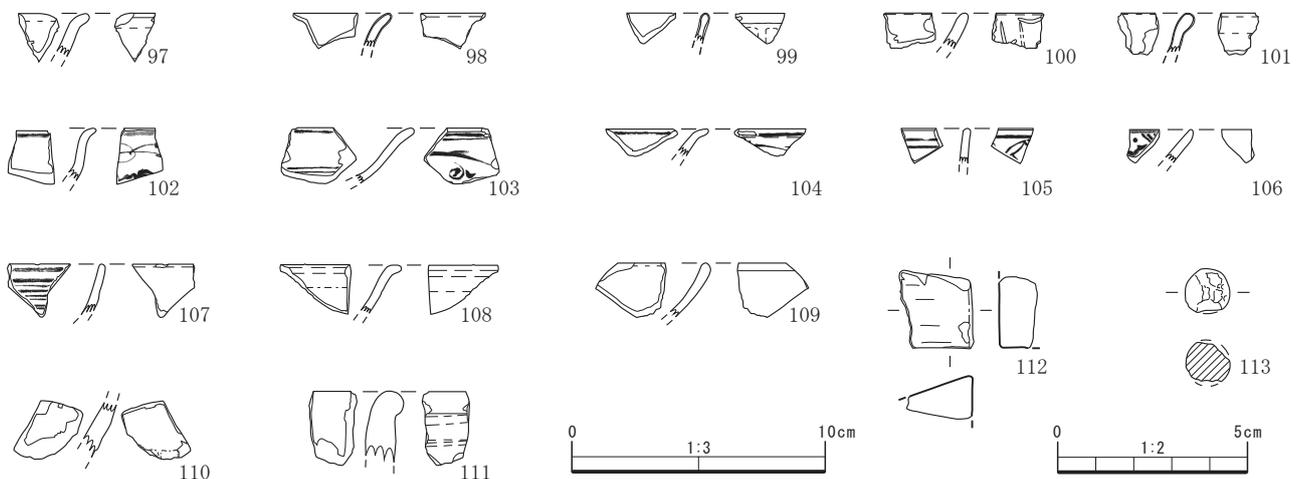


第 24 図 曲輪 II 調査区配置図 (Scale : 1 / 500)

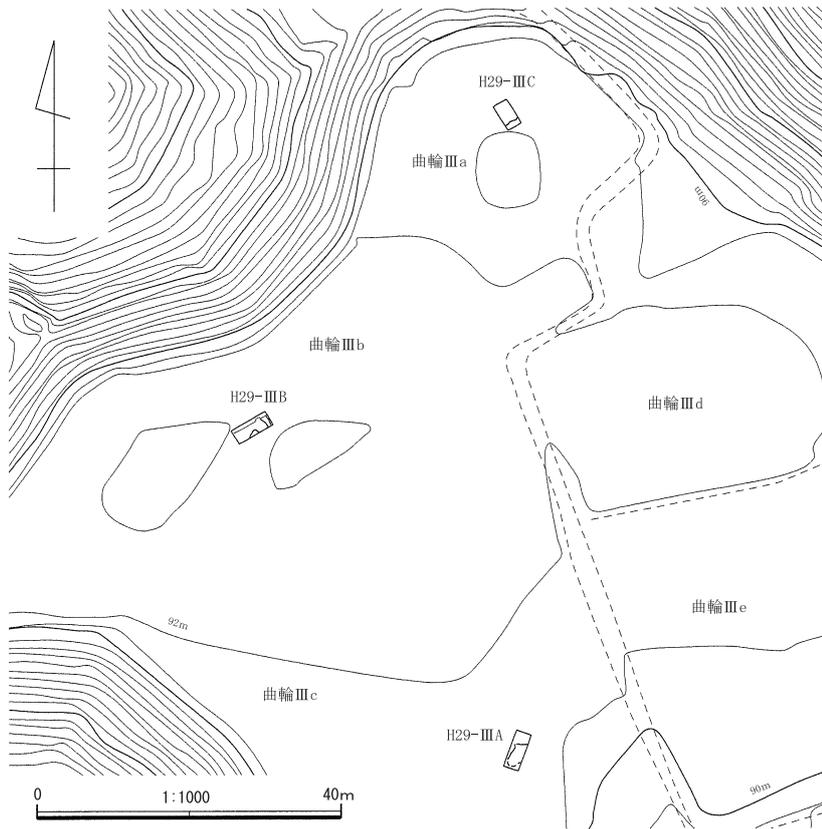
- 1 : 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 土。表土。しまりあり。1 cm 以上の小石をまばらに含有。
  - 2a : 灰黄褐色 (Hue10YR5/2) 粘質土。風倒木痕。やわらかく、ボロボロと崩れる。風倒木の間に 1 が流れ込んだものか。
  - 2b : 灰黄褐色 (Hue10YR6/2) 粘質土。風倒木痕。固くしまる。3b 層の横転。
  - 2c : にぶい黄橙色 (Hue10YR6/4) 粘質土。風倒木痕。2b と 2d が混ざる。
  - 2d : 明黄褐色 (Hue10YR7/6) 粘質土。風倒木痕。地山の横転。
  - 2e : 明黄褐色 (Hue10YR7/6) 粘質土。風倒木痕。やわらかい。地山土の崩れ。
  - 3a : 褐色 (Hue7.5YR4/4) 土。固くしまる。径 1 cm 程度の地山ロームブロックをまばらに含有。5 mm 以下の炭微量に含有。
  - 3b : 灰黄褐色 (Hue10YR6/2) 土。やややわらかい。径 1 cm 以下の小石微量に含有。径 5 mm 以下の地山ローム粒子微量に含有。
  - 4 : 明黄褐色 (Hue10YR 7/6) 土。固くしまる。地山ロームのブロックを多量に含有。炭を微量に含有。
  - 5 : 黄橙色 (Hue10YR5/4) 土。ピット埋土。固くしまる。4 層の様相に似る。
- 地山 : 黄橙色 (Hue10YR7/8) ローム。



第 25 図 H 30 - II A 平面・土層断面図 (Scale : 1 / 40)

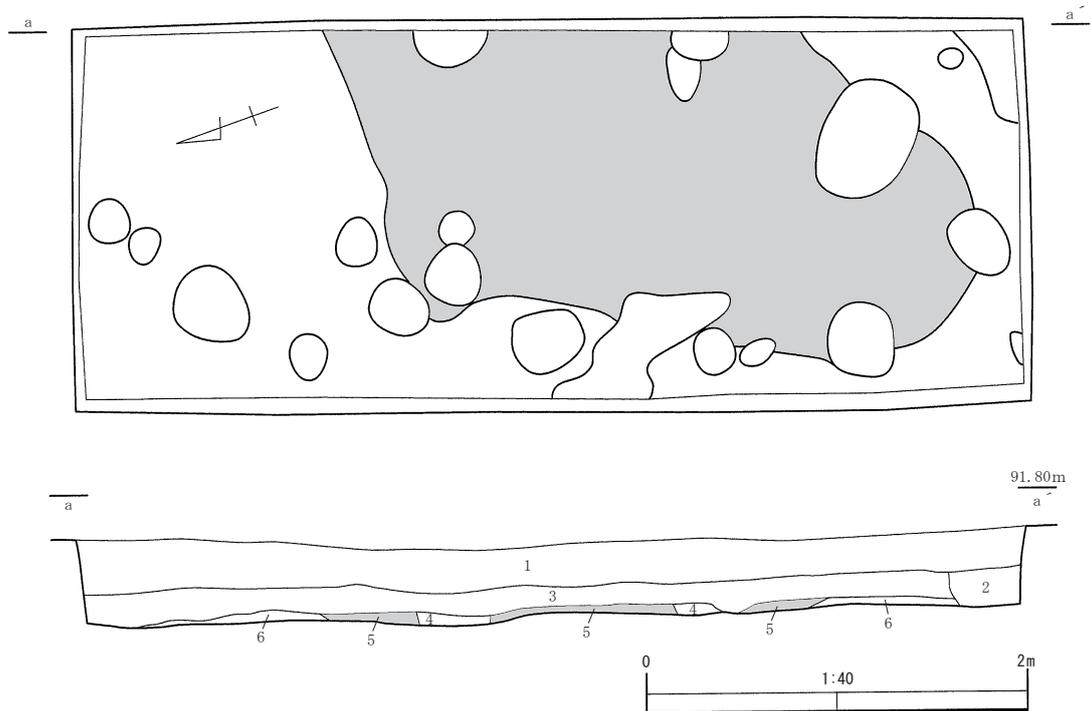


第 26 図 H 30 - II A 出土遺物 (97 ~ 112 Scale : 1 / 3、113 Scale : 1 / 2)



- 1: 褐色 (Hue 10YR 4/6) 粘質土。表・客土。硬くしまる。粘性有り。焼土粒、炭、小石含有。プラスチック片出土。
- 2: にぶい黄褐色 (Hue 10YR 5/4) 粘質土。遺構埋土。粘性があり、やややわらかい。炭、焼土粒をやや多めに含有。
- 3: 褐色 (Hue 10YR 4/6) 粘質土。1層に似るがやややわらかく、色も少し暗い。又、1層より焼土粒を多く含有。遺物包含層。
- 4: 褐色 (Hue 7.5YR 4/6) 粘質土。ピット埋土 (2基とも同じ土) ローム粒を多量に含有。炭、焼土粒含有。
- 5: 明褐色 (Hue 7.5YR 5/6) 粘質土。遺構埋土。やややわらかく、ロームブロック、アカホヤ(?) ブロック、焼土、炭を多量に含有。
- 6: 褐色 (Hue 10YR 4/4) 粘質土。地山漸移層硬くしまり、ローム粒、ブロックを含有。

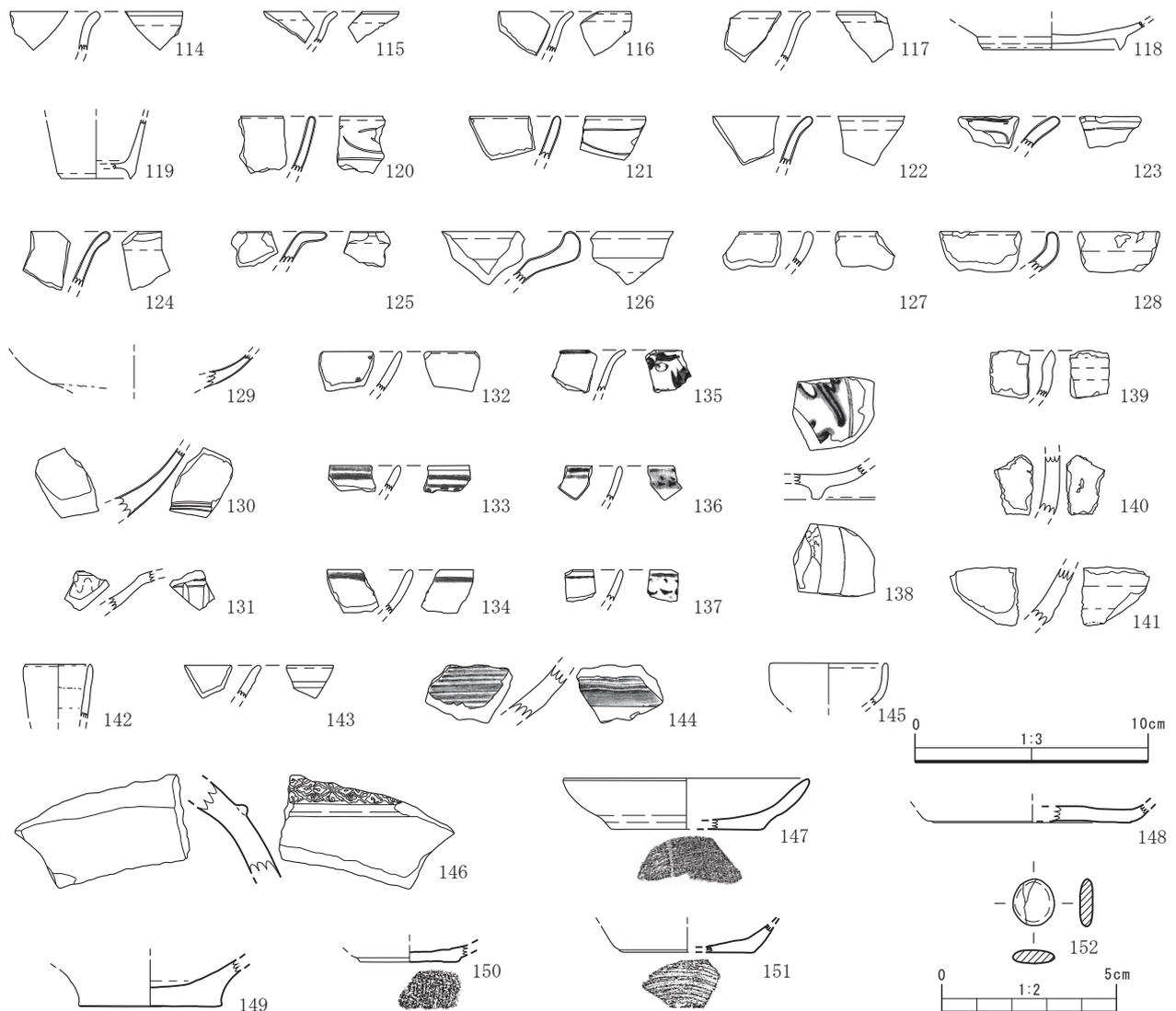
第27図 曲輪Ⅲ調査区配置図 (Scale: 1 / 1000)



第28図 H29-III A平面・土層断面図 (Scale: 1 / 40)

※アミは人為的な埋め立ての可能性が高い褐色土

H29-III C (第32・33図) 現地表よりの深0.4mでローム土の地山が検出され、この面においてピット21基、土坑1基、溝状遺構1条を検出した。地山上より火縄銃の弾丸 (同184) が、客土中より播鉢片 (第33図181)、基石等が出土している。



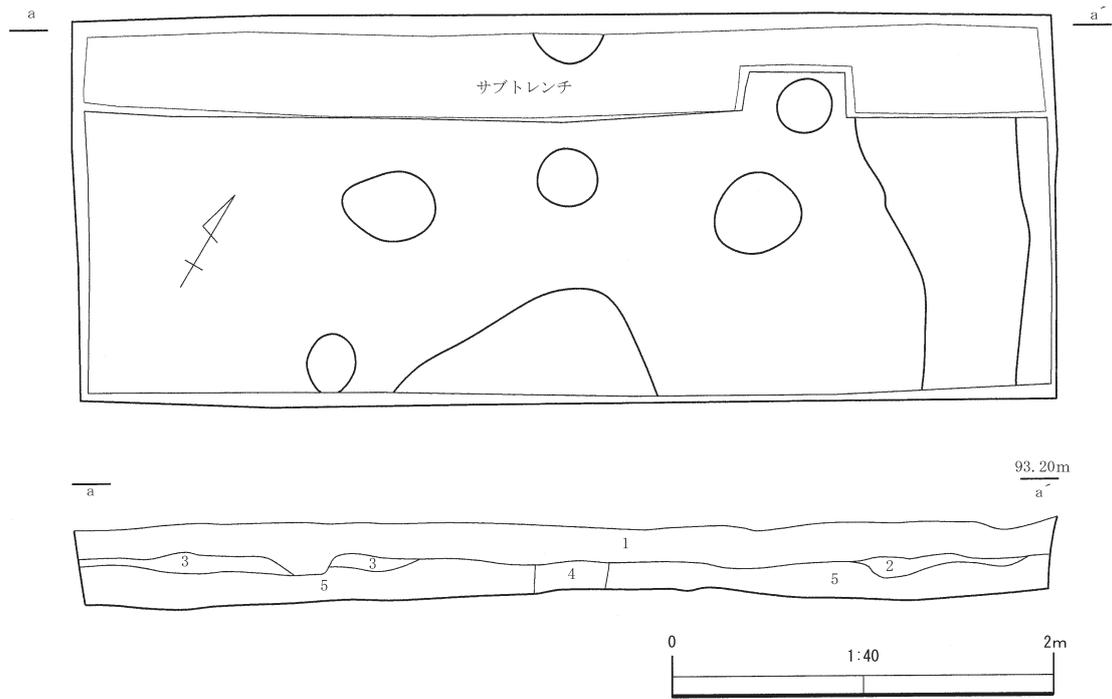
第 29 図 H 29 - III A 出土遺物 (114 ~ 151 Scale : 1 / 3、152 Scale : 1 / 2)

#### (4) 曲輪Ⅴ (彦右衛門城)

H 30 - VA (第 36・37 図) 現地表面よりの深 0.2 m でローム土の地山が検出されたが、地山中には円礫がまばらに混ざる。近接した堀切壁面に露出する自然堆積の観察もあわせ、本トレンチの曲輪面はローム層下に堆積する円礫層との境に近い高さにおいて形成されている。この面において上端幅 1.0 ~ 1.3 m の溝状遺構が検出された。調査区の北側に隣接して、曲輪Ⅱとの間の堀切に面する土塁が東西方向にのびるが、この溝状遺構はこれと 3 m ほどの間隔を空けて並行にのびる。一部にサブトレンチを設定したところ、溝中には円礫が多数入る。調査区北西角の地山部分も一部掘り下げて、含有される礫の密度を確認したが、この溝中では地山よりもはるかに高い密度で円礫が含まれており、人為的に入れられたものの可能性が高い。調査区の中央では風倒木痕も検出された。遺物出土は極めて少なく、土器 (第 37 図 201) をのぞくと染付が 1 点 (同 200)、瓦片が 3 点 (同 202 ~ 204) のみである。

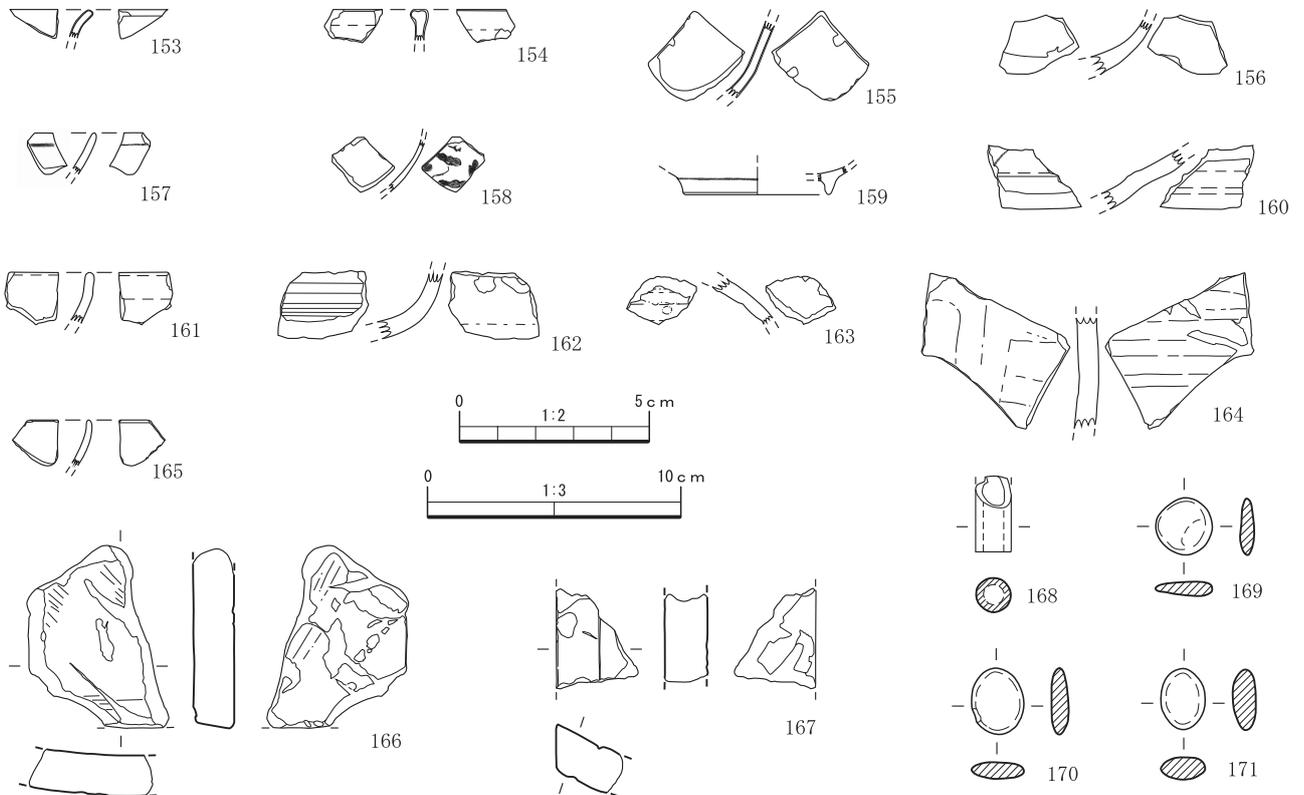
#### (5) 曲輪Ⅷ (服部城)

H 30 - VIIA (第 39・40 図) 現地表面からの深さ 0.03 ~ 0.1 m でローム土の地山となる。遺構の検出はなかった。またトレンチ中よりの遺物の出土も土師器坏片 1 点 (第 39 図 205) のみである。

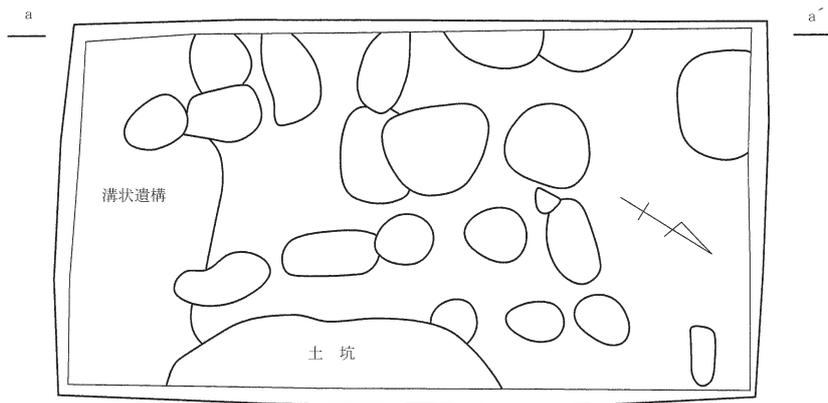


- 1: 褐色 (Hue 10YR 4/4) 粘質土。比較的硬くしまる。粘性あり。焼土粒、炭含有。  
 2: 褐色 (Hue 10YR 4/4) 粘質土。溝状遺構埋土。1層に近似するが、やや暗い。焼土粒、炭を多量に含有。  
 3: にぶい黄褐色 (Hue 10YR 4/4) 粘質土。地山との漸移層。やややわらかい。焼土等の含有なし。  
 4: 褐色 (Hue 10YR 4/6) 粘質土。ピット埋土。やわらかく粘性あり。焼土粒を多量に含有。  
 5: 暗褐色 (Hue 10YR 4/6) 粘質土。地山ローム。やわらかい。

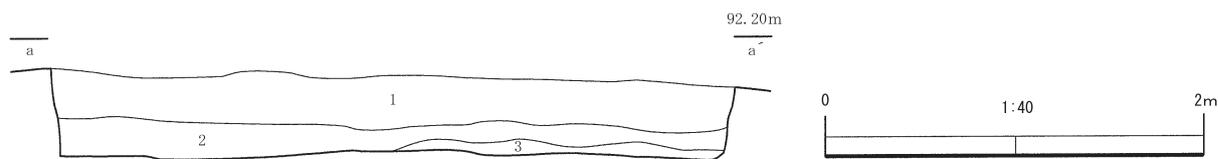
第30図 H 29 - III B平面・土層断面図 (Scale : 1 / 40)



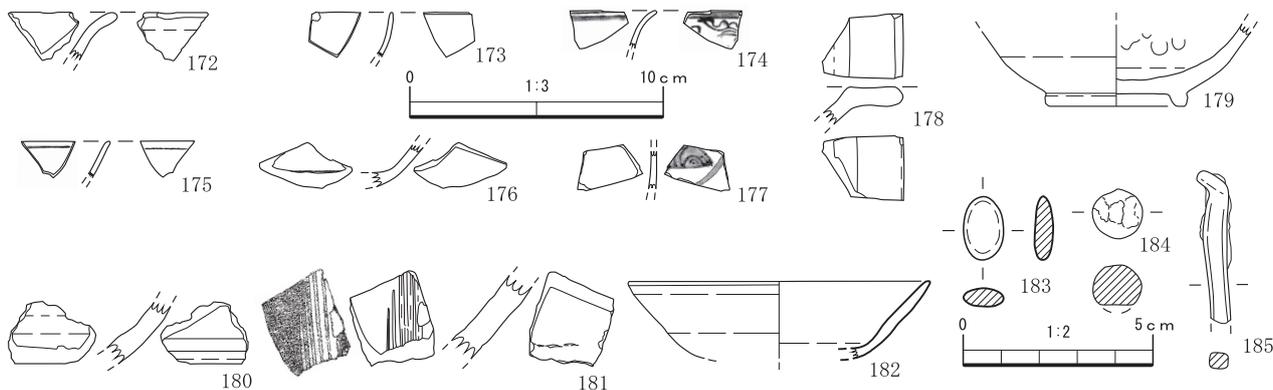
第31図 H 29 - III B出土遺物 (153 ~ 168 Scale : 1 / 3、169 ~ 171 Scale : 1 / 2)



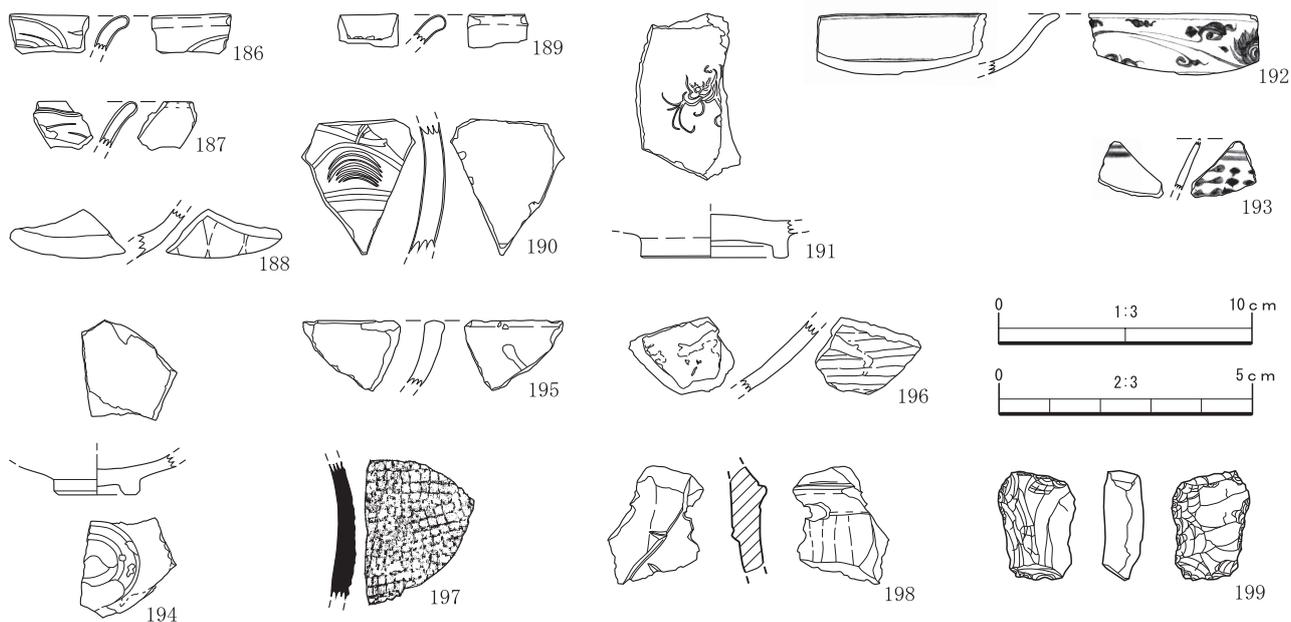
- 1: 褐色 (Hue 10YR 4/4) 粘質土。粘性がありやややわらかい。焼土粒、炭、小石を含有。
- 2: 暗褐色 (Hue 10YR 3/4) 粘質土。粘性がありやや硬くしまる。焼土粒含有。地山斑微量に含有。
- 3: 褐色 (Hue 10YR 4/6) 粘質土。粘性がありやややわらかい。地山ブロック・粒を多量に含有。地山漸移のような様相だが、遺構をバックする。
- 地山: 明黄褐色 (Hue 10YR 6/6) ローム土。



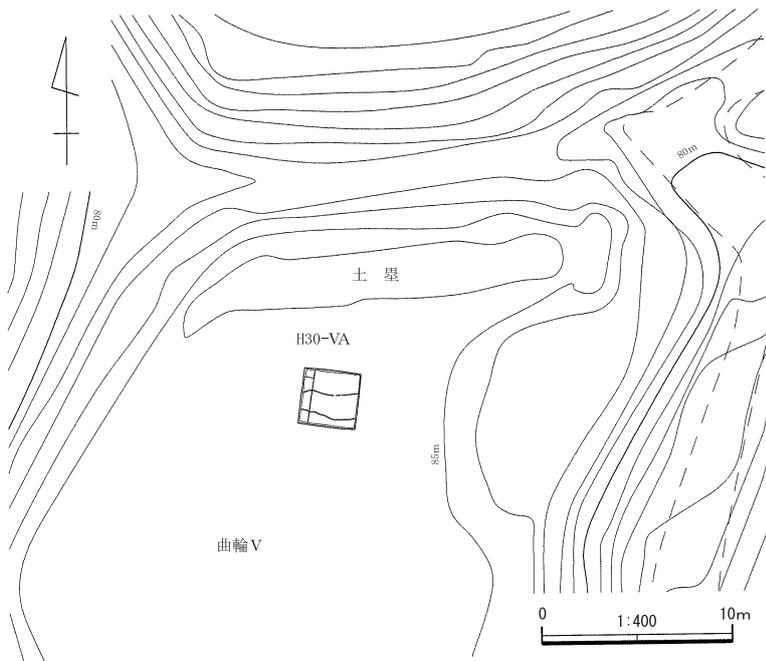
第32図 H 29 - III C 平面・土層断面図 (Scale: 1 / 40)



第33図 H 29 - III C 出土遺物 (172 ~ 182 Scale: 1 / 3、183 ~ 185 Scale: 1 / 2)

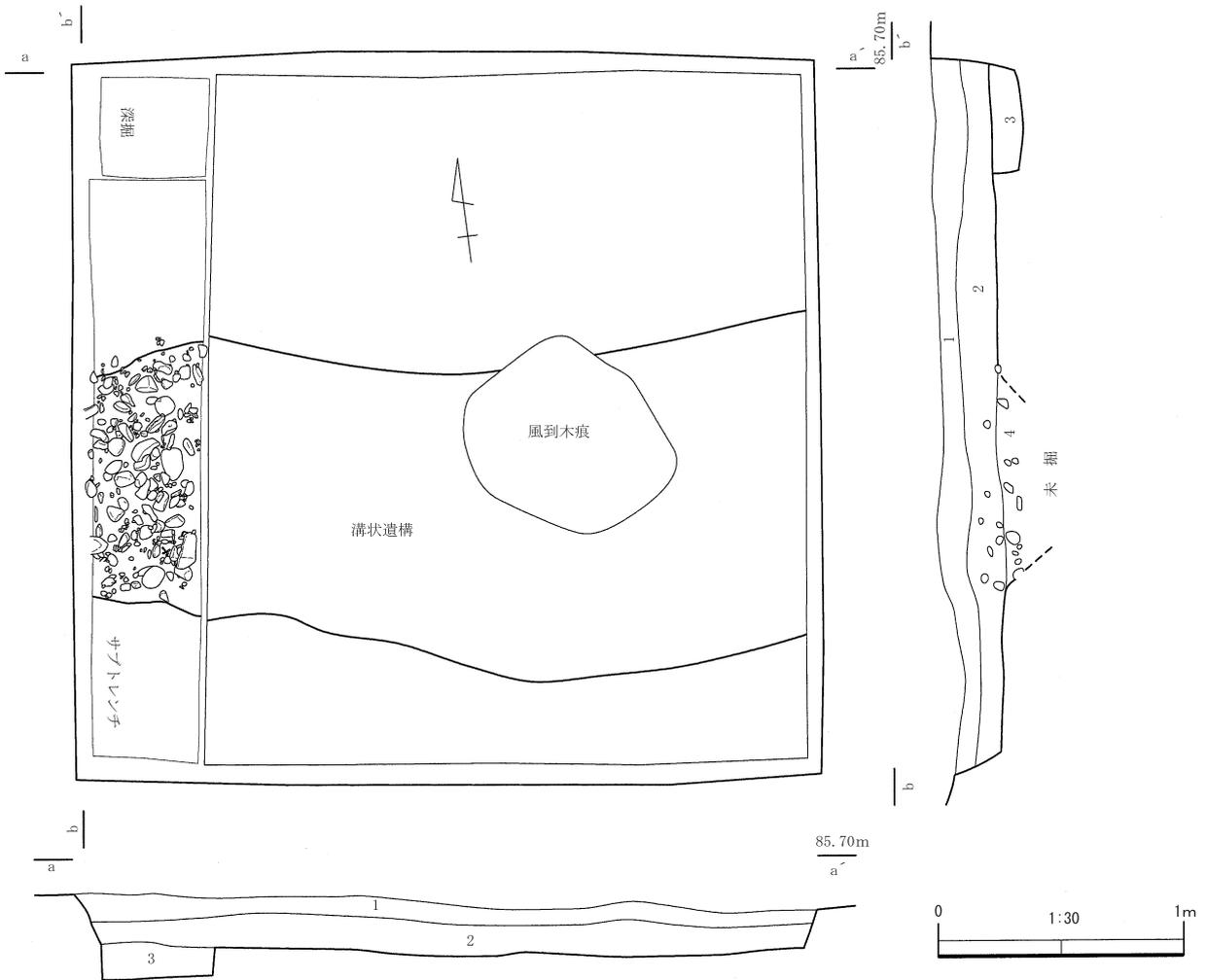


第34図 曲輪Ⅲ表採遺物 (186 ~ 198 Scale: 1 / 3、199 Scale: 2 / 3)

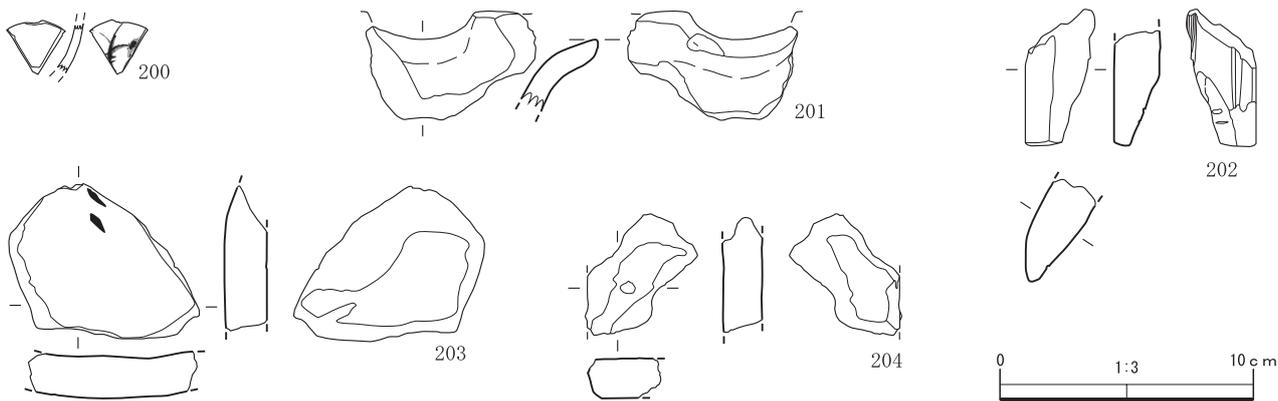


- 1: 褐色 (Hue 7.5YR 4/3) 粘質土。表土。竹の根が多量に入る。やわらかい。礫が混ざる。
- 2: 褐色 (Hue 10YR 4/4) 粘質土。竹の根が多量に入る。しまりあり。礫 (径 10 cm 以下の円礫が大半) 含有多。
- 3: 明黄褐色 (Hue 10YR 6/6) 粘質土。上記円礫群中に粘質土が入り込んだ様相。地山の礫層。
- 4: 灰褐色 (Hue 5YR 4/2) 粘質土。溝状遺構埋土。やわらかく円礫を多数含有。

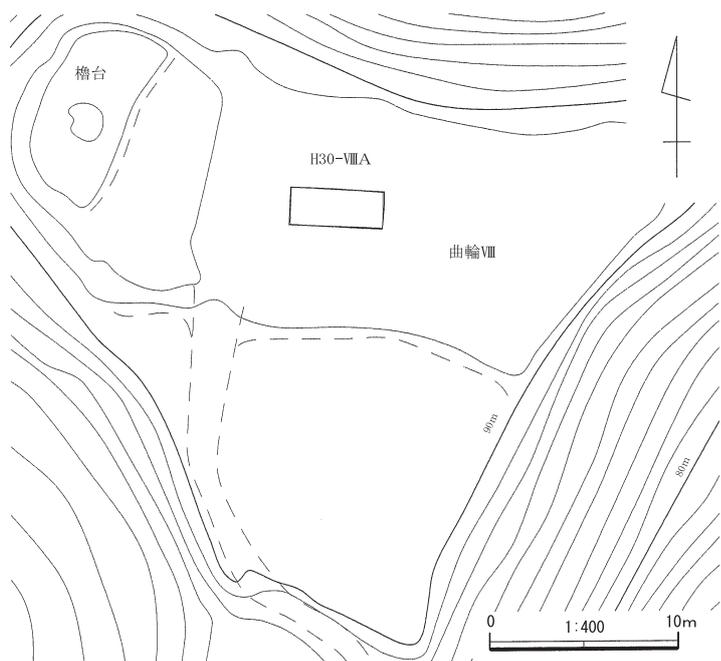
第 35 図 曲輪V調査区配置図 (Scale : 1 / 400)



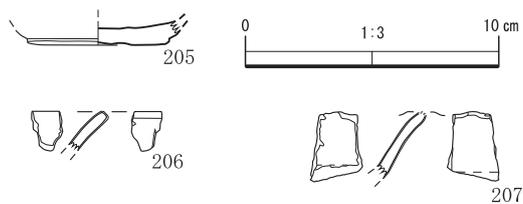
第 36 図 H 30 - V A 平面・土層断面図 (Scale : 1 / 30)



第37図 H 30 - V A出土遺物 (Scale : 1 / 3)

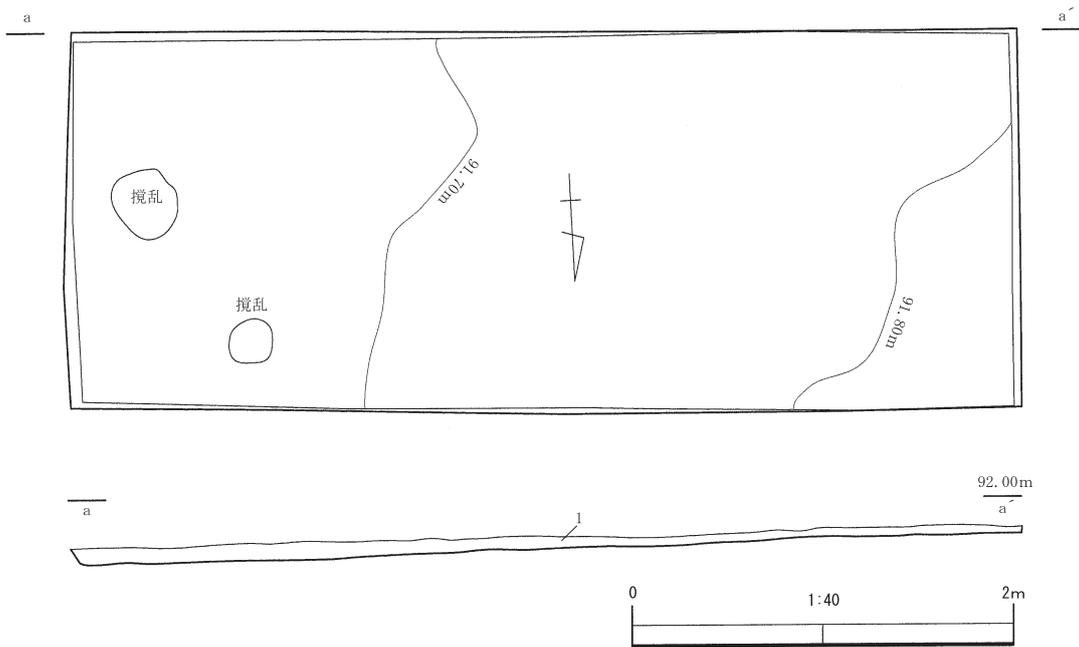


第38図 曲輪VII調査区配置図 (Scale : 1 / 400)

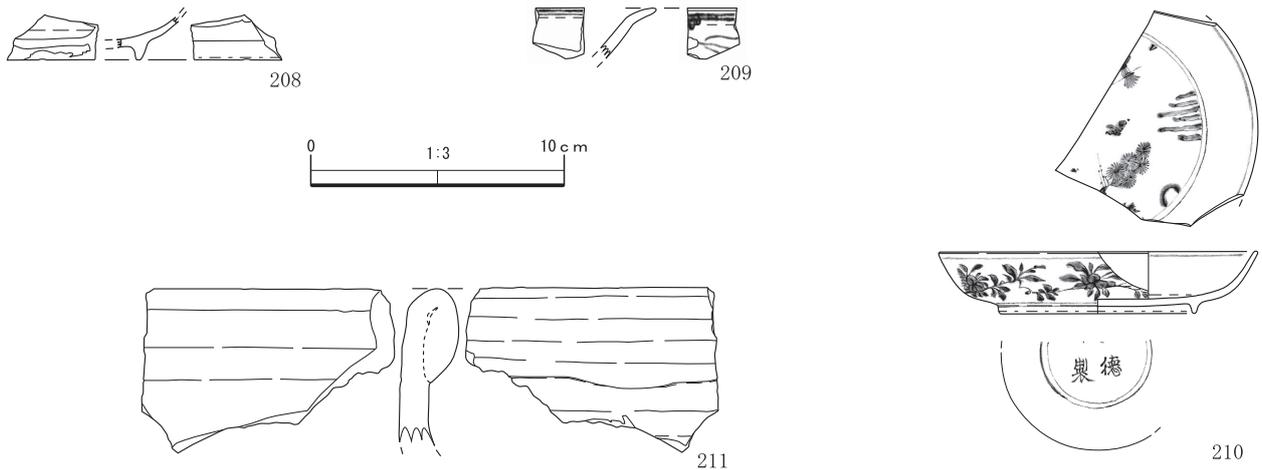


第39図 H 30 - VII A出土遺物  
および曲輪VII表探遺物 (Scale : 1 / 3)

1 : 褐色 (Hue 7.5YR 4/4) 粘質土。表・客土。  
 径 10 cm 以下の地山ブロックを多量に含有。し  
 まりあり。近接した石碑のもと類似した石  
 材の欠片が少量混じる。  
 地山 : 明褐色 (Hue 7.5YR 5/6) ローム。



第40図 H 30 - VII A平面・土層断面図 (Scale : 1 / 40)



第41図 その他の表採遺物 (Scale : 1 / 3)

### 第3節 小 結

主要5曲輪に計10ヶ所のトレンチ・調査区を設定して調査をおこない、結果として曲輪Ⅷのトレンチ1ヶ所をのぞく9ヶ所いずれでも遺構・遺物が良好な保存状態であることを確認した。以下、調査成果から特筆すべき事項を曲輪ごとに列挙する。

曲輪Ⅰで検出された広範囲の褐色土は、人為的な埋め立てによる曲輪面造成と考えられる。掘り込み状の施設を埋め立てて曲輪平坦面を広げたものと思われるが、H30-I B・Cでは地山と造成土との平面上における境が検出されており、その検出ラインから南東コーナー部は直角に近い形と予想される。サブトレンチでは検出面からの深0.4 mでも地山が検出されていない。もともとは曲輪面からの高低差を付けた狭小な平坦面や、掘り込みによる通路などであったと考えられる。後述のようにH30-I Bでは造成面上で献杯儀礼の痕跡と思われる土師器坏の集中出土があるため城郭時の使用面と判断してよいが、宮崎城の廃城が元和の一国一城令時であれば1615年が下限となる。くわえてこの造成土中に瓦片が含まれており(第14図、第16図64・65)、南九州の城郭における瓦葺建物の導入を豊臣秀吉の九州平定(天正15年:1587年)以降と捉えるのであれば、この造成は高橋・有馬氏領有期である織豊期(第3章第3節参照)に限定される。造成土には焼土、炭が多量に含まれるが、当該期中、慶長5年(1600)に宮崎城は飢肥伊東氏に攻められて落城しており(第1章第2節および第3章第3節参照)、あるいは戦闘時の火災と、その後の曲輪面改修を示すものかもしれない。なおH30-I C・Dで検出された竪穴建物が連結したかのような平面形の遺構も、埋土中に瓦片を含むことから織豊期のものと判断される。

曲輪Ⅰ造成面上における土師器坏の集中出土(第14図、第15図46~58)については、これらに使用時と判断される煤や焦げの付着、つまりは灯火具であったという明確な痕跡が見出されず、また道具の貯蔵と解釈できる要素もない。飲食に用いられた道具の一括廃棄と見受けられ、献杯儀礼の痕跡である可能性が高い。在地土器編年について宮崎平野部では堀田孝博氏による中世土師器の研究がある(堀田2016)。先述のとおり本資料が検出された造成面の使用は1587~1615年に限定されると考えられるため実年代としては氏の第Ⅻ期に比定されるが、復元口径11 cm前後、器高3 cm未満の法

量は当該期の様相に合致する。一方、形態的にはやや突出気味な底部と緩やかに内湾しながら立ち上がる体部を持つ個体が多く、これは堀田Ⅻ期の様相として新たに付け加えられるべきものとなる。

今回調査範囲においては礎石建物の痕跡や漆喰などは検出されていないものの、曲輪Ⅰ斜面下には一定量の瓦が散布しており、瓦葺建物の存在した可能性が高い。表採資料中、丸瓦ではコビキA・B両種が確認でき、コビキAのものには凸面縄目タタキが認められる。全国的な傾向として慶長5年(1600)前後を境にコビキAからBに移行する地域が多いとされているが(山崎2008)、現段階において宮崎県地域ではこの技法転換期の実年代検討はなされていない。隣接する熊本県地域ではこの移行期が慶長5年より後出する可能性が以前より議論されており(中井1998、山崎前掲同、宮武2003、中山2018)、一概にコビキA=1600年以前と即断するのは避けるべきと思われる。ただし凸面縄目タタキとあわせ、ある程度古相の技法が宮崎城跡の瓦に認められることは注意しておく必要がある。

曲輪Ⅱと曲輪Ⅲではともにピットが多数検出された(第25・28・30・32図)。陶磁器等も一定量出土し、日常的な居住がおこなわれていたものと見てよい。なお調理具である播鉢については、今回調査の全体を通して曲輪Ⅲで1点が出土したのみであり(第33図181)、やや奇異なことではあった。H29-ⅢAで検出された平面不整形の埋め立てについては、トレンチの位置が曲輪Ⅲの南際、堀切から数段の帯曲輪を経て曲輪内に進入する地点にあたり、掘り込み状の通路や虎口を埋めて曲輪面を広げたものの可能性が考えられる。

曲輪Ⅴでは、土塁に並行して円礫が多数入れられた溝状遺構が検出された(第36図)。土塁上から流れ落ちる雨水等を遮断するための暗渠排水として機能したものかと考えられる。この曲輪Ⅴではピットが検出されていない。検出面の多くを溝状遺構が占めていることも関係すると思われるが、そもそも曲輪面が円礫層との境に近い高さで形成されているため、掘立柱建物の構築には適さないとと思われる。また曲輪Ⅴでは遺物の出土が極めて少ない(第37図)。うち3点は瓦で、他の曲輪で多数出土している日常雑器は染め付け片1点のみであった。遺構、遺物の様相ともに日常生活の痕跡が希薄である。

なお瓦については曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴで出土しているが、表採資料もあわせ一定量が得られ、屋敷等、瓦葺建物の存在を想定できるのは現時点で曲輪Ⅰのみである。ただし曲輪Ⅴは大手である和田口の一面を形成しており(第3章第1節参照)、その関係で瓦が存在する可能性を考えておく必要がある。

曲輪Ⅷでは現地表からわずか数cmで地山となり、遺構の検出はなく、遺物の出土もわずかに1点のみである(第39・40図)。客土堆積の薄さから見て、近年削平を受けたものと思われる。ただし曲輪Ⅷは複数段で構成されており、今回調査は最上段の平坦面のみである。曲輪Ⅷ全体における遺構・遺物の遺存状態については、改めて確認をおこなう必要がある。

#### 【引用・参考文献】

- 田中克子 2011年「博多遺跡群出土の中国陶磁器と対外貿易」『博多研究会誌』20周年特別記念号 博多研究会  
中井 均 1998年「織豊系城郭の成立要素—南九州を事例として—」『織豊城郭』第5号 織豊期城郭研究会  
中山 圭 2018年「遺物としての瓦と陶磁器—九州の視点から—」『織豊城郭』第18号 織豊期城郭研究会  
堀田孝博 2016年「宮崎平野部の中世土師器」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年的研究Ⅱ』宮崎考古学会  
宮武正登 2003年「九州における織豊系城郭研究10年の現状と課題」『織豊城郭』第10号 織豊期城郭研究会  
山崎信二 2008年『近世瓦の研究』(株)同成社

表1 土器・陶磁器観察表①

掲載頁 図番号	番号	調査区 層位等	種別 器種	法量 cm ( ): 復元			色調		焼成	調整		備考	実測 番号
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
18 頁 第 13 図	1	30- I A 2 層	磁器 碗	-	-	-	灰白 10Y7/1	灰白 10Y7/1	良好	施釉	施釉		85
	2	30- I A 1 層	青磁 碗	-	-	-	灰オリーブ 7.5Y6/2	灰オリーブ 7.5Y6/2	良好	施釉	施釉		83
	3	30- I A サブトレ3層	青磁 碗	-	-	-	灰オリーブ 7.5Y6/2	灰オリーブ 7.5Y6/2	良好	施釉	施釉		86
	4	30- I A 1 層	青磁 碗	-	-	-	灰オリーブ 5Y5/2	灰オリーブ 5Y5/2	良好	施釉、蓮弁文	施釉	14 世紀後半～ 15 世紀中頃	81
	5	30- I A 1 層	青磁 碗	-	-	-	明オリーブ灰 5GY7/1	明オリーブ灰 5GY7/1	良好	施釉	施釉		78
	6	30- I A 1 層	青磁 碗	-	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	良好	施釉、線刻	施釉		77
	7	30- I A サブトレ3層	青磁 碗	-	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	良好	施釉	施釉		87
	8	30- I A サブトレ	青磁 碗	-	-	-	明緑灰 7.5GY7/1	明緑灰 7.5GY7/1	良好	施釉、蓮弁文	施釉	線彫り。15 世紀後半～	68
	9	30- I A サブトレ	青磁 碗	-	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	良好	施釉	施釉		69
	10	30- I A 1 層	磁器 碗	-	-	-	灰白 2.5GY8/1	灰白 2.5GY8/1	良好	施釉、一重圏線	施釉、一重圏線		79
	11	30- I A サブトレ	染付 皿	-	-	-	灰白 5GY8/1	灰白 5GY8/1	良好	施釉	施釉	青花。15 世紀後半～ 16 世紀中頃	73
	12	30- I A サブトレ	陶器 瓶	-	-	-	にぶい黄 2.5Y6/3	灰黄褐 10YR6/2	良好	底面施釉	見込自然釉		67
	13	30- I A サブトレ	天目 碗	-	-	-	灰オリーブ 5Y4/2	暗オリーブ灰 2.5GY4/1	良好	施釉	施釉		75
	14	30- I A サブトレ	天目 碗	-	-	-	黒褐 10YR3/2	黒褐 10YR3/2	良好	施釉、無釉	施釉		74
	15	30- I A サブトレ3層	陶器 甕か	-	-	-	褐灰 7.5YR4/1	褐灰 10YR4/1	良好	工具による横・斜方向のハケ目	工具による斜方向のハケ目		76
	16	30- I A サブトレ	陶器 甕か	-	-	-	灰褐 5YR4/2	灰褐 7.5YR5/2	良好	ナデ	斜方向のナデ		71
	17	30- I A サブトレ3層	陶器 甕か	-	-	-	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/3	良好	横方向のち縦方向のハケ目	工具による横・斜方向のハケ目		72
	18	30- I A サブトレ	陶器 甕か	-	-	-	灰褐 7.5YR5/2	灰褐 7.5YR5/2	良好	横方向のナデ	斜方向のナデ		70
	19	30- I A 2 層	土師器 坏	(7.9)	(6.0)	1.8	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り底	149
	20	30- I A 2 層	土師器 坏	-	(5.7)	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	良好			糸切り底。摩滅多	148
	21	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	(7.7)	(5.6)	2.15	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/6	良好	ナデ	ナデ	糸切り底。内面煤付着	143
	22	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	(7.9)	(6.2)	1.8	にぶい橙 10YR7/4	にぶい橙 10YR6/4	良好	回転ナデ	回転ナデ	糸切り底	141
	23	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	(6.0)	-	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	回転ナデ	回転ナデ	糸切り底。摩滅多	137
	24	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	(6.8)	-	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	良好	回転ナデ	回転ナデか	糸切り底。見込み中央盛り上がる。摩滅多	133
	25	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	(7.8)	-	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/2	良好		回転ナデか	糸切り底。摩滅多	147
	26	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	(8.0)	-	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	良好	回転ナデか		糸切り底。内外面煤付着か。摩滅多	146
	27	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	(7.4)	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	良好	回転ナデ	回転ナデ	糸切り底	135
	28	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	-	-	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	良好	回転ナデ	回転ナデ	糸切り底	134
	29	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	(7.25)	-	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	回転ナデか	回転ナデか	ヘラ切り底。外面煤付着	139
	30	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	(7.2)	-	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り底。摩滅多	142
	31	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	(7.2)	-	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	回転ナデか	回転ナデか	ヘラ切り底。摩滅多	136
	32	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	(5.4)	-	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	良好		回転ナデ	摩滅多	140
	33	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	(6.8)	-	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/2	良好			外面煤付着。摩滅多	144
	34	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	(7.2)	-	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	良好	回転ナデか	回転ナデか	摩滅多	145
	35	30- I A サブトレ3層	土師器 坏	-	(5.4)	-	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	回転ナデ	回転ナデ	穿孔あり。摩滅多	138
	36	30- I A サブトレ3層	須恵器 壺・甕か	-	-	-	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	良好	ナデ	工具による斜方向のハケ目		88
19 頁 第 15 図	41	30- I B 1 層	青磁 碗	-	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	良好	施釉	施釉		91
	42	30- I B 1 層	青磁 碗	-	-	-	オリーブ灰 5GY6/1	オリーブ灰 5GY6/1	良好	施釉	施釉		90
	43	30- I B 1 層	染付 碗	-	-	-	灰白 2.5GY8/1	灰白 2.5GY8/1	良好	施釉、一重圏線	施釉、一重圏線	青花か	89

表2 土器・陶磁器観察表②

掲載頁 図番号	番号	調査区 層位等	種別 器種	法量 cm ( ): 復元			色調		焼成	調整		備考	実測 番号	
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面			
19 頁 第 15 図	44	30- I B 2 層	陶器 碗	-	-	-	灰オリーブ 7.5Y5/3	浅黄橙 10YR8/4	良好	施釉	施釉		94	
	45	30- I B 1 層	華南彩 水柱・水滴	1.8 (残存 長)	1.7 (残存 幅)	0.8 (厚)	-	-	良好	全面緑釉、線刻	-	鴨形の尾羽部分	110	
	46	30- I B 3 層上面	土師器 坏	(10.7)	(7.6)	2.8	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り底。摩滅多	157	
	47	30- I B 3 層上面	土師器 坏	(10.3)	(7.0)	2.8	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	良好	ナデ	回転ナデ	摩滅多	163	
	48	30- I B 3 層上面	土師器 坏	(11.1)	(7.4)	(2.65)	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	良好			摩滅多	153	
	49	30- I B 3 層上面	土師器 坏	(7.4)	(6.0)	2.1	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい橙 7.5YR7/3	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り底	161	
	50	30- I B 2 層+3 層上面	土師器 坏	-	(7.55)	-	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	ナデか	回転ナデ	ヘラ切り底か。摩滅多	155	
	51	30- I B 3 層上面	土師器 坏	-	(7.8)	-	灰白 10YR8/2	浅黄橙 10YR8/3	良好			摩滅多	156	
	52	30- I B 3 層上面	土師器 坏	-	(6.6)	-	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	良好	回転ナデ	ナデ		162	
	53	30- I B 3 層上面	土師器 坏	-	(7.2)	-	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	良好			摩滅多	154	
	54	30- I B 3 層上面	土師器 坏	-	(7.3)	-	浅黄橙 10YR8/3	灰白 2.5Y8/2	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り底か。摩滅多	160	
	55	30- I B 3 層上面	土師器 坏	-	(7.4)	-	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り底	159	
	56	30- I B 3 層上面	土師器 坏	-	(6.2)	-	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	良好			摩滅多	151	
	57	30- I B 2 層+3 層上面	土師器 坏	-	(6.0)	-	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り底。摩滅多	150	
	58	30- I B 3 層上面	土師器 坏	-	(7.1)	-	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	良好	ナデ	ナデ	ヘラ切り底	158	
	59	30- I B サブトレ	土師器 坏	-	(5.0)	-	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	良好	回転ナデか	回転ナデか	摩滅多	152	
	21 頁 第 18 図	66	30- I C 2 層	白磁 皿	-	-	-	灰白 5Y8/1	灰白 2.5Y8/2	良好	施釉	施釉		106
		67	30- I C 2 層	白磁 皿	-	-	-	灰白 5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	良好	施釉	施釉		107
		68	30- I C SP1	青磁 稜花皿	(13.5)	-	-	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	良好	施釉、沈線	施釉、線刻	15 世紀前半～16 世紀前半。 二次被熱か	99
69		30- I C 1 層	染付 皿	-	-	-	灰白 2.5GY8/1	灰白 2.5GY8/1	良好	施釉	施釉	青花。15 世紀後半～16 世 紀中頃	97	
70		30- I C 1 層	染付 碗	-	-	-	灰白 7.5Y8/2	灰白 7.5Y8/2	良好	施釉、一重圏線	施釉、一重圏線		101	
71		30- I C 1 層	華南彩 水滴	2.35 (残存 長)	2.25 (残存 幅)	1.1 (厚)	-	-	良好	全面緑釉、線刻		魚形の尾部分	102	
72		30- I C 1 層	陶器 壺か	(7.6)	-	-	灰オリーブ 5Y5/3	灰オリーブ 5Y5/3	良好	無釉、施釉	無釉、施釉		100	
73		30- I C 2 層	陶器 おろし皿	-	-	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	良好		一部に釉残存	底部糸切り痕	105	
22 頁 第 20 図	77	30- I D サブトレ	白磁 碗	-	-	-	灰白 10Y8/1	灰白 10Y8/1	良好	施釉	施釉		112	
	78	30- I D 1 層	青磁 碗	-	-	-	オリーブ 5Y5/4	オリーブ 5Y5/4	良好	施釉、蓮弁文	施釉	14 世紀後半～15 世紀中頃	109	
	79	30- I D 2 層	陶器 皿	-	-	-	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	良好	施釉	施釉		111	
	80	30- I D 1 層	須恵器	-	-	-	灰 5Y4/1	灰 5Y5/1	良好	格子目タタキ	ナデ		108	
26 頁 第 26 図	97	30- II A サブトレ	青磁 碗	-	-	-	灰オリーブ 5Y5/3	灰オリーブ 5Y5/3	良好	施釉	施釉	14 世紀後半～15 世紀中頃 か	128	
	98	30- II A 3 層	青磁 碗	-	-	-	オリーブ黄 5Y6/3	オリーブ黄 5Y6/3	良好	施釉	施釉	14 世紀後半～15 世紀中頃	119	
	99	30- II A 1 層	青磁 碗	-	-	-	灰オリーブ 7.5Y6/2	灰オリーブ 7.5Y6/2	良好	施釉、蓮弁文か	施釉		123	
	100	30- II A 地山上	青磁 碗	-	-	-	灰オリーブ 7.5Y5/3	灰オリーブ 7.5Y5/2	良好	施釉、蓮弁文	施釉	細蓮弁文。15 世紀後半以降 か	124	
	101	30- II A 1 層	青磁 碗	-	-	-	灰オリーブ 7.5Y6/2	灰オリーブ 7.5Y6/2	良好	施釉	施釉		126	
	102	30- II A 地山上	染付 皿	-	-	-	灰白 5GY8/1	灰白 5GY8/1	良好	施釉、一重圏線	施釉、一重圏線		114	
	103	30- II A 地山上	染付 皿	-	-	-	明緑灰 10GY8/1	明緑灰 10GY8/1	良好	施釉、二重圏線	施釉、一重圏線	青花	115	
	104	30- II A サブトレ	染付 皿	-	-	-	明緑灰 7.5GY8/1	灰白 5GY8/1	良好	施釉、一重圏線	施釉、一重圏線		117	
	105	30- II A 1 層	染付 碗	-	-	-	灰白 10Y8/1	灰白 10Y8/1	良好	施釉、一重圏線	施釉、二重圏線		120	
	106	30- II A 1 層	染付 皿	-	-	-	浅黄 2.5Y7/3	灰白 10Y8/1	良好	施釉	施釉、一重圏線、 襷文		122	
	107	30- II A サブトレ	陶器 碗	-	-	-	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄 2.5Y6/3	良好	施釉	施釉、刷毛目		116	

表3 土器・陶磁器観察表③

掲載頁 図番号	番号	調査区 層位等	種別 器種	法量 cm ( ): 復元			色調		焼成	調整		備考	実測 番号
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
26頁 第26図	108	30-II A サブトレ	陶器 皿	-	-	-	オリーブ褐 2.5Y4/3	オリーブ褐 2.5Y4/4	良好	施釉	施釉、無釉		121
	109	30-II A 3層	陶器 碗	-	-	-	浅黄 2.5Y8/4	浅黄 2.5Y8/4	良好	施釉	施釉		125
	110	30-II A 3層	天目 碗	-	-	-	暗褐 10YR3/3	暗褐 10YR3/3	良好	施釉、無釉	施釉		118
	111	30-II A 地山上	陶器 甕・壺	-	-	-	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/3	良好	横方向のナデ	ナデ、自然釉		127
28頁 第29図	114	29-III A 地山上	磁器 碗	-	-	-	灰オリーブ 5Y6/2	灰オリーブ 5Y6/2	良好	施釉	施釉		40
	115	29-III A 1・3層	白磁 皿	-	-	-	明緑灰 7.5GY7/1	明緑灰 7.5GY7/1	良好	施釉	施釉		14
	116	29-III A 1・3層	白磁 皿	-	-	-	灰白 7.5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	良好	施釉	施釉		15
	117	29-III A 1・3層	白磁 皿	-	-	-	灰白 10Y8/1	灰白 10Y8/1	良好	施釉	施釉	二次被熱あり	19
	118	29-III A 1・3層	白磁 皿	-	(5.9)	-	灰白 5Y8/2	灰白 5Y8/2	良好	施釉	施釉	曇付一部無釉	11
	119	29-III A 1・3層	磁器 小坏	-	(3.0)	-	淡黄 2.5Y8/3	灰白 5Y8/1	良好	施釉	施釉		13
	120	29-III A 1・3層	青磁 碗	-	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	良好	施釉、雷文帯	施釉	14世紀後半～15世紀中頃	27
	121	29-III A 1・3層	青磁 碗	-	-	-	明緑灰 7.5GY7/1	明緑灰 7.5GY7/1	良好	施釉	施釉		28
	122	29-III A 1・3層	青磁 碗	-	-	-	灰オリーブ 7.5Y5/2	灰オリーブ 7.5Y5/2	良好	施釉	施釉		29
	123	29-III A 1・3層	青磁 稜花皿	-	-	-	明緑灰 7.5GY7/1	明緑灰 7.5GY7/1	良好	施釉	施釉		30
	124	29-III A 1・3層	青磁 碗	-	-	-	灰 10Y6/1	灰 10Y6/1	良好	施釉	施釉		31
	125	29-III A 1・3層	青磁 皿	-	-	-	明オリーブ灰 5GY7/1	明オリーブ灰 5GY7/1	良好	施釉	施釉		32
	126	29-III A ピット	青磁 盤か	-	-	-	灰白 10Y7/1	灰白 10Y7/1	良好	施釉	施釉		41
	127	29-III A 1・3層	青磁 皿か	-	-	-	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y5/2	良好	施釉	施釉		33
	128	29-III A 1・3層	青磁 盤か	-	-	-	灰白 7.5Y7/2	灰白 7.5Y7/2	良好	施釉	施釉		35
	129	29-III A 1・3層	青磁 碗	-	-	-	明オリーブ灰 2.5GY7/1	明オリーブ灰 5GY7/1	良好	施釉	施釉		204
	130	29-III A 1・3層	青磁 碗	-	-	-	明オリーブ灰 5GY7/1	明オリーブ灰 2.5GY7/1	良好	施釉、線刻	施釉		205
	131	29-III A 1・3層	染付 皿か	-	-	-	明オリーブ灰 2.5GY7/1	明緑灰 5G7/1	良好	施釉、線刻	施釉、染付		206
	132	29-III A 1・3層	染付 碗・皿	-	-	-	灰白 7.5Y7/2	灰白 7.5Y7/2	良好	施釉	施釉		18
	133	29-III A 1・3層	染付 碗	-	-	-	灰白 10Y8/1	灰白 10Y8/1	良好	施釉	施釉、二重圏線		21
	134	29-III A 1・3層	染付 碗	-	-	-	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	良好	施釉、一重圏線	施釉、一重圏線		20
	135	29-III A 1・3層	染付 皿	-	-	-	灰白 5GY8/1	灰白 5GY8/1	良好	施釉	施釉、一重圏線		26
	136	29-III A 1・3層	染付 皿	-	-	-	明緑灰 7.5GY8/1	明緑灰 7.5GY8/1	良好	施釉	施釉、二重圏線		22
	137	29-III A 1・3層	染付 皿	-	-	-	明緑灰 10GY7/1	明緑灰 10GY7/1	良好	施釉	施釉、一重圏線		23
	138	29-III A 1・3層	染付 皿	-	-	-	灰白 10Y8/1	灰白 10Y8/1	良好	施釉、一重圏線	施釉、一重圏線	高台外面砂付着	12
	139	29-III A 1・3層	天目 碗	-	-	-	褐 7.5YR4/4	褐 7.5YR4/4	良好	施釉	施釉		38
	140	29-III A 1・3層	天目か 碗か	-	-	-	青黒 5PB1.7/1	青黒 5PB1.7/1	良好	施釉	施釉		201
	141	29-III A 1・3層	天目 碗	-	-	-	黒 10YR2/1	黒 10YR2/1	良好	施釉	施釉		34
	142	29-III A 1・3層	磁器	(2.8)	-	-	褐 10YR4/4	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	施釉	施釉		39
	143	29-III A 1・3層	陶器 碗・坏か	-	-	-	灰白 2.5Y8/1	灰白 2.5Y8/1	良好	施釉	施釉		16
	144	29-III A 1・3層	陶器 浅鉢	-	-	-	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR6/2	良好	波状刷毛目、施釉、無釉	横方向の刷毛目、施釉		36
	145	29-III A 1・3層	陶器 坏	(5.0)	-	-	灰白 5Y8/2	灰白 5Y8/2	良好	施釉	施釉		17
146	29-III A 地山上	瓦質土器 浅鉢形火鉢か	-	-	-	灰 N4/	灰 N4/	良好	工具ナデ	工具ナデ	外面貼付帯、スタンプ文	9	

表4 土器・陶磁器観察表④

掲載頁 図番号	番号	調査区 層位等	種別 器種	法量 cm ( ): 復元			色調		焼成	調整		備考	実測 番号
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
28頁 第29図	147	29-III A 6層	土師器 坏	(10.6)	(6.4)	2.2	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	回転ナデ	回転ナデ	糸切り底	4
	148	29-III A 6層	土師器 坏	-	(8.5)	-	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り底	5
	149	29-III A 地山上	土師器 坏	-	(5.8)	-	灰白 7.5YR8/2	灰白 7.5YR8/2	良好	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り底	7
	150	29-III A 1・3層	土師器 坏	-	(4.0)	-	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/3	良好	回転ナデ	回転ナデ	糸切り底	3
	151	29-III A 地山上	土師器 坏	-	(5.8)	-	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	良好	回転ナデ	回転ナデ	糸切り底	8
29頁 第31図	153	29-III B 1層	青磁 碗	-	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	良好	施釉	施釉		45
	154	29-III B 1層	青磁 香炉	-	-	-	灰白 10Y7/2	灰白 7.5Y6/2	良好	施釉	施釉		46
	155	29-III B 1層	青磁 碗	-	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	良好	施釉	施釉		50
	156	29-III B 1層	青磁 碗	-	-	-	オリーブ灰 5GY6/1	オリーブ灰 5GY6/1	良好	施釉	施釉		48
	157	29-III B 1層	染付 碗・皿	-	-	-	灰白 5Y8/2	灰白 5Y8/2	良好	施釉、一重圏線	施釉、一重圏線		44
	158	29-III B 1層	染付 碗	-	-	-	灰白 7.5Y8/2	灰白 7.5Y8/2	良好	施釉、草花文か	施釉		207
	159	29-III B 1層	磁器 碗・皿	-	(5.6)	-	灰白 2.5GY8/1	灰白 N8/	良好	施釉	施釉	高台外面一重圏線。疊付無釉	208
	160	29-III B 1層	陶器 皿	-	-	-	灰褐 7.5YR5/2	灰褐 7.5YR5/2	良好	施釉	施釉、絵柄あり		52
	161	29-III B 1層	陶器 碗	-	-	-	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	良好	施釉	施釉		42
	162	29-III B 1層	陶器 土瓶	-	-	-	黒褐 10YR2/2	褐 7.5YR4/3	良好	施釉、無釉	施釉、回転ナデ	薩摩焼	53
	163	29-III B 1層	陶器	-	-	-	オリーブ褐 2.5Y4/6	オリーブ褐 2.5Y4/4	良好	施釉	施釉、回転ナデ		200
	164	29-III B 1層	陶器 甕・壺	-	-	-	にぶい褐 7.5YR5/3	褐灰 7.5YR5/1	良好	横方向の工具ナデ	縦横方向の工具ナデ		209
	165	29-III B 1層	陶器 碗	-	-	-	灰白 7.5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	良好	施釉	施釉		43
	168	29-III B 1層	磁器 馬具	1.4 (径)	-	(3.0) (残存長)	灰白 7.5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	良好	施釉	施釉		54
30頁 第33図	172	29-III C 1・2層	青磁 稜花皿	-	-	-	灰オリーブ 5Y5/2	灰オリーブ 5Y5/2	良好	施釉	施釉		60
	173	29-III C 1・2層	磁器 碗・坏か	-	-	-	灰白 N8/	灰白 N8/	良好	施釉	施釉		203
	174	29-III C 1・2層	染付 小坏	-	-	-	明青灰 10BG7/1	明青灰 10BG7/1	良好	施釉	施釉、二重圏線		55
	175	29-III C 1・2層	染付 碗・坏か	-	-	-	明緑灰 7.5GY8/1	明緑灰 7.5GY8/1	良好	施釉、一重圏線	施釉、一重圏線		202
	176	29-III C 1・2層	染付 碗	-	-	-	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	良好	施釉	施釉、二重圏線		56
	177	29-III C 1・2層	染付 碗	-	-	-	明緑灰 5G7/1	明緑灰 5G7/1	良好	施釉	施釉		57
	178	29-III C 1・2層	磁器 皿	-	-	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	施釉	施釉		58
	179	29-III C 1・2層	陶器 碗	-	(5.5)	-	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR5/1	良好	施釉	施釉		61
	180	29-III C 1・2層	陶器 土瓶	-	-	-	灰黄褐 10YR5/2	灰 5Y5/1	良好	無釉	施釉	薩摩焼	62
	181	29-III C 1・2層	陶器 播鉢	-	-	-	褐灰 10YR5/1	灰黄褐 10YR5/2	良好	無釉、横方向のナデ	無釉、横方向のナデ後5条の播目		82
	182	29-III C 1・2層	土師器 坏	(11.9)	-	-	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4		回転ナデ	回転ナデ		10
30頁 第34図	186	曲輪III 表採	青磁 碗か	-	-	-	灰オリーブ 7.5Y6/2	灰白 7.5Y7/2	良好	施釉、線刻	施釉、線刻	14世紀後半～15世紀中頃	183
	187	曲輪III 表採	青磁 碗	-	-	-	明オリーブ灰 2.5GY7/1	明オリーブ灰 2.5GY7/1	良好	施釉	施釉、線刻		185
	188	曲輪III 表採	青磁 碗	-	-	-	灰オリーブ 5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	良好	施釉、蓮弁文	施釉		193
	189	曲輪III 表採	青磁 碗	-	-	-	灰白 7.5Y7/2	灰白 5Y7/2	良好	施釉	施釉		184
	190	曲輪III 表採	青磁 碗・皿	-	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	良好	施釉	施釉、線刻		186
	191	曲輪III 表採	青磁 碗	-	(5.8)	-	明オリーブ灰 5GY7/1	明オリーブ灰 2.5GY7/1	良好	施釉		見込草花文。高台内面・疊付無釉	187
	192	曲輪III 表採	染付 皿	-	-	-	明緑灰 7.5GY8/1	明緑灰 7.5GY8/1	良好	施釉、花唐草文	施釉、二重圏線	青花。15世紀後半～16世紀中頃	190
	193	曲輪III 表採	染付 碗・皿	-	-	-	明緑灰 5G7/1	明緑灰 5G7/1	良好	施釉、二重圏線	施釉、二重圏線		191

表5 土器・陶磁器観察表⑤

掲載頁 図番号	番号	調査区 層位等	種別 器種	法量 cm ( ): 復元			色調		焼成	調整		備考	実測 番号
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
30頁 第34図	194	曲輪Ⅲ 表採	白磁	-	(3.0)	-	灰白 5Y8/2	灰白 5Y8/2	良好	施釉、回転ナデ		高台外内面無釉、削り高台	194
			皿か	-	-	-	黒 5Y2/1	黒 5Y2/1	良好	施釉	施釉		
	195	曲輪Ⅲ 表採	天目	-	-	-	灰白 7.5Y7/2		良好	緑釉	緑釉	内面金色に近い光沢	189
			緑釉陶器	-	-	-	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR4/1	良好	格子目タタキ	ナデ、横ナデ		188
32頁 第37図	200	30-V A サブトレ	碗	-	-	-	明緑灰 7.5GY8/1	明緑灰 7.5GY8/1	良好	施釉	施釉		211
			土器	-	-	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	良好	ナデ	ナデ、黒斑あり		165
32頁 第39図	205	30-VIII A 1層	土師器	-	(5.6)	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	良好	ナデ	ナデ	へら切り底、底面煤付着	164
			坏	-	-	-	灰白 7.5Y7/2	灰白 7.5Y7/2	良好	施釉	施釉		197
	206	曲輪Ⅷ 表採	青磁 碗・皿	-	-	-	灰白 7.5Y7/2	灰白 7.5Y7/2	良好	施釉	施釉		196
33頁 第41図	208	表採	白磁	-	-	-	灰白 N8/	灰白 N8/	良好	施釉	施釉	畳付無釉	63
			皿	-	-	-	明青灰 10BG7/1	明青灰 10BG7/1	良好	施釉	施釉、二重圏線		64
	209	表採	染付	-	-	-	灰白 10Y8/1	灰白 10Y8/1	良好	施釉、一重圏線、 柘榴	施釉、一重圏線	高台内面「…徳…製」	113
			皿	(12.4)	(7.6)	2.5	暗赤褐 2.5YR3/4	暗赤褐 2.5YR3/4	良好	施釉、横方向の ナデ	施釉、横方向の ナデ		129

表6 瓦観察表

掲載 頁	図 番号	番号	調査区 層位等	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考	実測 No.
20頁	第16図	64	30-I B 3層	平瓦	(14.90)	(25.00)	(2.10)	凸面丁寧なナデ	180
		65	30-I B 3層	平瓦	(16.60)	(21.00)	(2.10)	凸面丁寧なナデ	181
21頁	第18図	74	30-I C S Z 1	平瓦	(5.85)	(4.70)	(1.70)		103
23頁	第21図	81	曲輪 I 北斜面 表採	軒丸瓦	(11.20)	(12.30)	(2.30)	巴、連珠。コビキBか	173
		82	曲輪 I 北斜面 表採	軒丸瓦当	(10.20)	(14.55)	(2.60)	三巴、連珠。摩滅多	176
		83	曲輪 I 北斜面 表採	軒平瓦	(2.70)	(8.70)		唐草文。剥落面に沈線	178
		84	曲輪 I 北斜面 表採	軒平瓦	(5.15)	(8.90)	(2.05)	唐草文	65
		85	曲輪 I 北斜面 表採	飾瓦	(7.40)	(6.20)	(3.00)	剣方喰、唐花等か。茎状の表現あり	177
		86	曲輪 I 北斜面 表採	丸瓦	(16.55)	(13.55)	(2.10)	コビキB。釘穴	179
24頁	第22図	87	曲輪 I 北斜面 表採	丸瓦	(11.20)	(9.80)	(2.40)	コビキA。凸面縄目タタキ上からナデ。89 と同一か	171
		88	曲輪 I 北斜面 表採	丸瓦	(12.80)	(6.70)	(2.10)	コビキA。凸面丁寧なナデ。玉縁極めて薄 い	175
		89	曲輪 I 北斜面 表採	丸瓦	(7.80)	(7.10)	(2.30)	コビキA。凸面縄目タタキ上からナデ。凹 面板状工具タタキ。87と同一か	172
		90	曲輪 I 北斜面 表採	丸瓦	(6.10)	(4.90)	(2.30)	コビキA。凸面縄目タタキ。摩滅多	174
		91	曲輪 I 北斜面 表採	丸瓦	(12.00)	(9.00)	(1.65)	コビキB	170
		92	曲輪 I 北斜面 表採	丸瓦	(9.70)	(6.80)	(1.80)	コビキBか	212
		93	曲輪 I 北斜面 表採	丸瓦	(6.60)	(4.60)	(1.50)	コビキA。凸面丁寧なナデ	169
		94	曲輪 I 北斜面 表採	平瓦	(12.80)	(11.90)	(2.10)		167
25頁	第23図	95	曲輪 I 北斜面 表採	平瓦	(12.30)	(9.10)	(1.60)	凸面タタキないし成形台の痕と思しき条痕	168
		96	曲輪 I 北斜面 表採	平瓦	(9.80)	(9.00)	(1.60)		166
26頁	第26図	112	30-II A 地山上	平瓦	(3.10)	(2.90)	(1.70)	摩滅多	210
29頁	第31図	166	29-III B 1層	平瓦	(7.30)	(5.60)	(1.60)		198
		167	29-III B 1層	平瓦	(4.00)	(3.20)	(1.70)		199
32頁	第37図	202	30-V A	丸瓦	(5.45)	(2.75)	(1.85)	コビキAか。摩滅多	131
		203	30-V A	平瓦	(6.15)	(7.55)	(1.90)	摩滅多	132
		204	30-V A 2層	平瓦	(4.80)	(4.35)	(1.60)	摩滅多	130

表7 金属製品観察表

掲載 頁	図 番号	番号	調査区 層位等	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 No.
18頁	第13図	40	30- I A 3層	棒状製品	(8.20)	1.00	0.70	14.00		213
26頁	第26図	113	30- II A 地山上	火縄銃弾丸	(1.20)	1.15	(1.05)	7.30	鉛	25
30頁	第33図	184	29- III C 地山上	火縄銃弾丸	1.30	1.30	(1.05)	10.40	鉛	24
		185	29- III C 1層	釘	(4.00)	0.70	0.80	4.40		214

( )の値は残存値を示す

表8 石製品観察表

掲載 頁	図 番号	番号	調査区 層位等	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 No.	
18頁	第13図	37	30- I A 2層	碁石	2.15	1.6	0.4	2.2		66	
		38	30- I A 1層	碁石	1.75	1.1	0.45	1.4	頁岩	84	
		39	30- I A 1層	碁石	1.75	1.55	0.6	2.4	頁岩	80	
19頁	第15図	60	30- I B 2層	碁石	1.5	1.3	0.4	1.1		92	
		61	30- I B 2層	碁石	1.6	1.2	0.3	0.9	頁岩	93	
		62	30- I B 2層	碁石	1.5	1.3	0.35	1.0	頁岩	95	
		63	30- I B サブトレ 3層	砥石	(3.60)	(2.75)	(1.85)	18.6	頁岩	104	
21頁	第18図	75	30- I C 2層	碁石	2.0	1.4	0.5	2.2	頁岩	96	
		76	30- I C SC1	碁石	1.6	1.15	0.35	1.0	頁岩	98	
28頁	第29図	152	29- III A 1・3層	碁石	1.35	1.2	0.35	0.9	砂岩	37	
29頁	第31図	169	29- III B 1層	碁石	1.5	1.5	0.4	1.3	頁岩か	47	
		170	29- III B 1層	碁石	1.75	1.35	0.45	1.7	頁岩	49	
		171	29- III B 1層	碁石	1.6	1.15	0.6	1.6	頁岩	51	
30頁	第33図	183	29- III C 1・2層	碁石	1.7	1.05	0.5	1.3	頁岩	59	
		第34図	198	曲輪III 表採	石鍋	(4.70)	(3.80)	(1.40)		滑石製。15世紀代か	182
			199	曲輪III 表採	火打石	2.2	1.5	0.8	3.1	チャート	195

( )の値は残存値を示す

## 第3章 考察

### 第1節 宮崎城跡の縄張について

#### (1) 宮崎城跡の縄張研究

宮崎城跡の縄張図については、1987年の『図説中世城郭事典』における八巻孝夫氏作成のものが最初である(八巻1987)(9頁第6図)。その後、宮崎市教育委員会の依頼により千田嘉博氏が縄張図を作成し、2004年の同氏による論考(千田2004)および2009年の『宮崎城跡測量調査報告書』に掲載された(千田2009)(第42図)。さらに八巻孝夫氏は再調査に基づく新知見を加えて、2013年に縄張図第2版を発表した(八巻2013)(第43図)。宮崎城跡に関する今日現在の研究状況について最も特筆すべきは、この両氏それぞれの手になる縄張図が存在することであろう。

以下では両氏の調査・研究成果をもとに、宮崎城跡の構造について確認と若干の検討を試みる。ただし、その主軸となる両氏それぞれの縄張図においては、当然ながら各曲輪に付されたナンバリングが異なる。言うまでもなく、曲輪No.は多大な苦勞とともに縄張図の作成にあたった研究者の、その城跡に対する分析と解釈を表現するための重要な一要素であり、引用にあたってはこれを尊重すべきである。ただし本節は異なる研究者それぞれの縄張図を用いて、宮崎城跡の構造についての理解を深めるという目的を持つ。ゆえに対象となる曲輪を共通の番号で表現した方が、文意が通り易いと思われる。以下では記述上の便を図るため、2009年に宮崎市教育委員会が発行した『宮崎城跡測量調査報告書』(宮崎市教委編前掲同)掲載の千田嘉博氏作成の縄張図による曲輪No.を共通して用いたい。これと異なる論考で付された番号は「(原著曲輪○)」として記す。

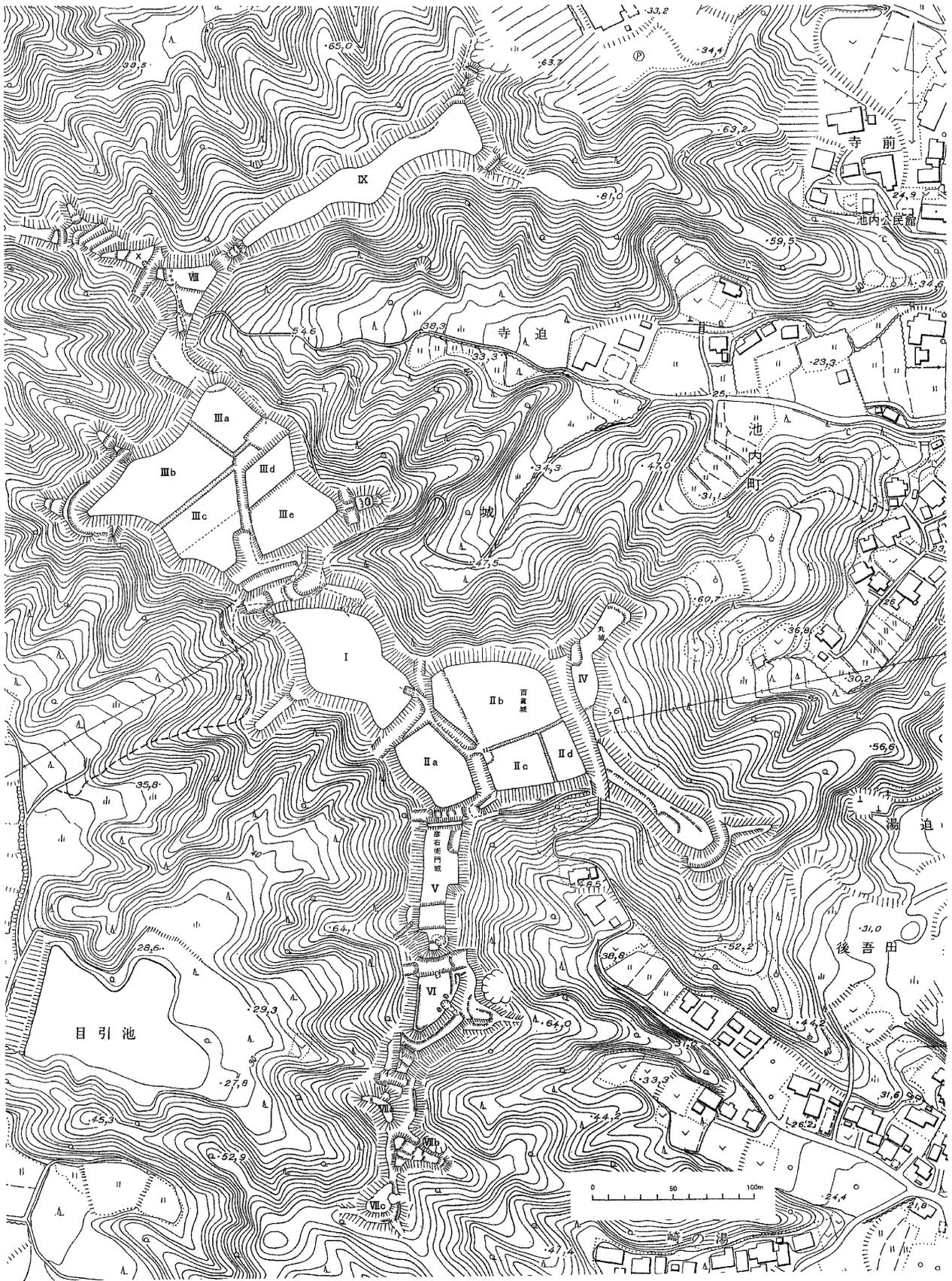
また特に断りのない限り、千田氏の見解は2004年の上記論考およびこれに共通した2009年の『宮崎城跡測量調査報告書』掲載のもの(千田2004および2009)により、八巻氏の見解は第2版である2013年の論考(八巻2013)による。

#### (2) 宮崎城跡の曲輪

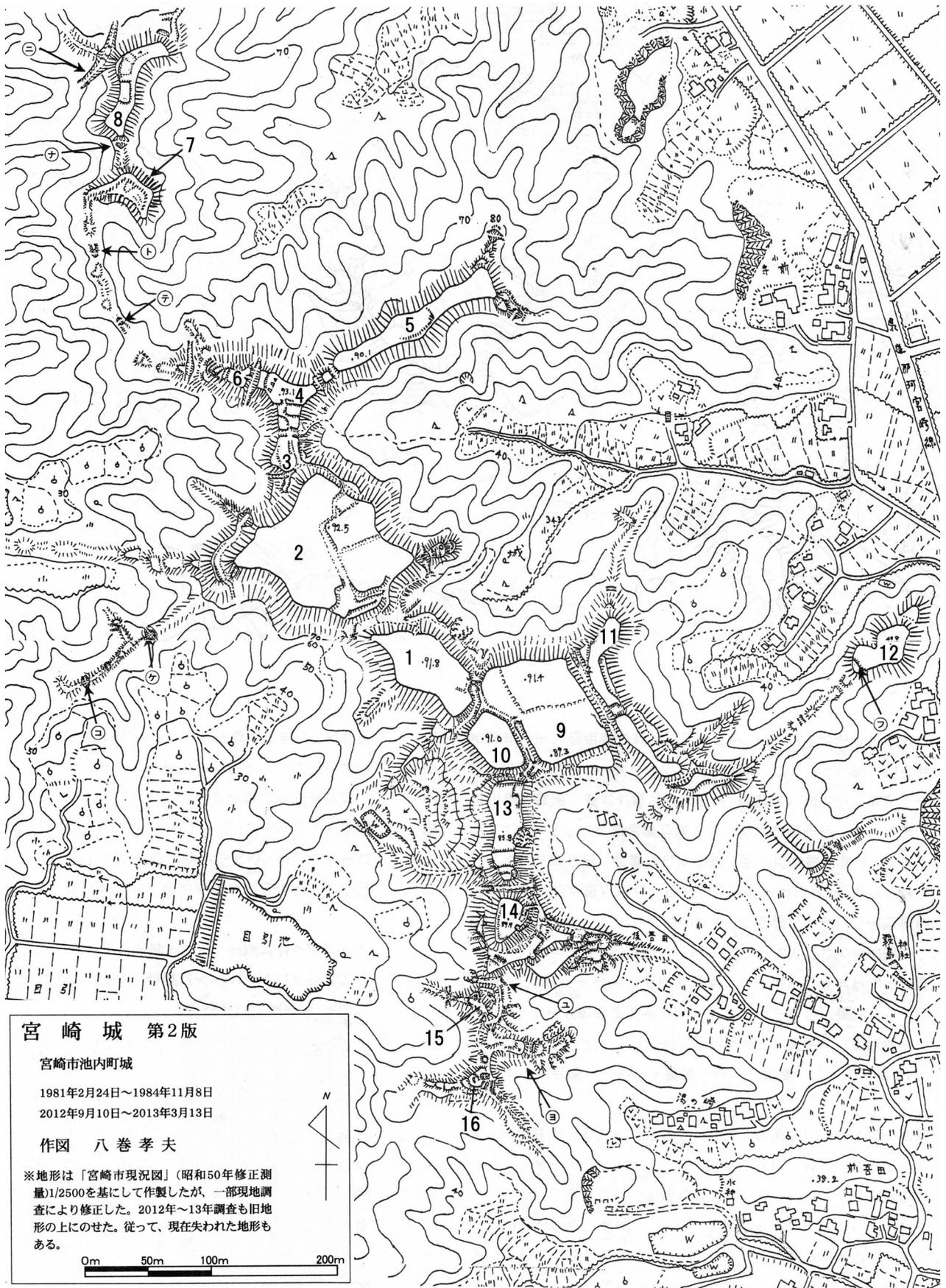
宮崎城跡は標高90m(麓からの比高差70m)前後の、大きくは南北に長く伸びる尾根上において、千田氏の縄張図では10の、八巻氏の縄張図では16の曲輪が構築されている。以下、主要部を中心として各曲輪の構造を確認する。

**曲輪Ⅰ(主郭)** 曲輪Ⅰは標高約91.5m、曲輪面の規模は東西92m、南北78m、面積約3,600㎡である。現況では内部に堀や溝、段差等による区画の認められない単郭の曲輪で、南東には曲輪内から横矢を掛けるスロープ状の虎口が設けられる。昭和50年前後に送電鉄塔が曲輪北端に建設され、その下に位置する北側斜面に瓦片が散布する。

現況、曲輪ⅠとⅢの間の堀切東端から曲輪Ⅰの北側斜面をつづら折りに登って曲輪内に至るルートがあるが、千田、八巻両氏ともに城郭当時のものの可能性は低いとしている。千田氏は曲輪Ⅰを挟んで位置する曲輪Ⅱ・Ⅲ間の連絡には、曲輪Ⅰの裾を巡るルートが存在したはずと予察しているが、八巻氏は曲輪Ⅰ(原著曲輪1)東側斜面の腰曲輪が本来の道ではないかと指摘している。現在、この腰曲輪は途中で崩落しているため道筋を辿ることができないが、字図では該当部分が細長く伸びる道状となり、曲輪南東の虎口に接続している(第44図)。八巻氏指摘のこのルートが曲輪Ⅰ・Ⅲ間堀切から曲輪Ⅰに進入する、また曲輪Ⅰを挟んで位置する曲輪Ⅱ・Ⅲ間の連絡に用いられた本来の城道であ



第 42 図 千田嘉博氏作成の宮崎城跡縄張図  
 ※宮崎市教委編 2009 より転載



第43図 八巻孝夫氏作成の宮崎城跡縄張図(第2版)  
 ※八巻2013より転載

る可能性が高い。

1987年の『図説中世城郭事典』において八巻氏は、大規模な堀切で外界から隔絶された曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ（原著曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）を主郭グループとし、その中でも横矢掛りの虎口を持つ曲輪Ⅰ（原著曲輪Ⅰ）が曲輪間の関係で最も上位にあると分析してこれを主郭と位置付けた（八巻1987）。千田氏は曲輪群の中央に位置すること、他に等高の曲輪があるものの城内中の高所を占めること、内部を分割した形跡のない単郭の広い曲輪であることから、同じく曲輪Ⅰを主郭としている。さらに八巻氏は2013年の論考においても、南に位置する曲輪Ⅱ（原著曲輪9・10）との間の空堀に曲輪Ⅰ（原著曲輪1）から横矢を効かせ、また共通の登城路からアクセスする北の曲輪Ⅲ（原著曲輪2）とは導線がより複雑で防御に堅い曲輪Ⅰの方が上位であることから、やはり曲輪Ⅰを主郭とする。



第44図 曲輪Ⅰ周辺の字図

※アミが道状の部分



写真1 曲輪Ⅰ現況 ※中央は地元有志による「本丸城跡」標柱

曲輪Ⅰ＝主郭は、戦国期末の『上井覚兼日記』に記された宮崎城の「内城」に比定される。織豊期における高橋氏の城代権藤種盛時の曲輪名を記したと思われる「直純寺由緒書」（瓜生野・倉岡郷土誌編委編1986）では、規模が整合することから記述中の「本丸」に比定され、同じく直純寺の「宮崎城見取図」（富永1978）（8頁第4図）でも「本丸」とされる。また明治期の『日向地誌』（野口1976）では「本城ヲ椎城ト云」と、別の伝承名も記されている。現在、地元でも本丸と伝承されている。なお各曲輪に対する「〇〇城」という呼称は、中世以来、南九州の城郭で広く認められる。

千田氏は『上井覚兼日記』より主郭における御殿、会所空間、庭園、茶室、風呂、毘沙門堂の存在と、城主（覚兼）に直属した職人の工房も併設されていた可能性を指摘している。

曲輪Ⅱ（百貫城） 曲輪Ⅱは間に堀切を置いて曲輪Ⅰ（主郭）の南東に位置しており、最高点の標高92.5

m、曲輪面の規模は東西 116 m、南北 91 mで、面積は約 8,000 m<sup>2</sup>にもなる。内部は堀、溝、段差によって複数の区画が作り出され、千田氏は曲輪Ⅱ a～d と 4 つに細分し、八巻氏は中央部に通路（空堀道）を入れて東西に分割された大きくは 2 つの曲輪としている（原著曲輪 9・10）。曲輪Ⅱ 南側の墨線や西寄りには曲輪外に張り出した土塁をともなう外柵形を志向した虎口（後述の和田口）が設けられるが、北西側の曲輪Ⅰと連絡する地点には土塁等の施設が認められず、先述の八巻氏の指摘通り、明確に曲輪間の上下関係が表出されている。現況、曲輪Ⅱ a とⅡ b～d を東西に分ける堀の間には土橋が認められるが、千田氏、八巻氏ともに往時からのものかどうか不明としている。また曲輪の東端（曲輪Ⅱ b 南東端）には送電鉄塔が建設されている。

曲輪Ⅱの機能について、千田氏は内部を細かく区画した屋敷地としている。「直純寺由緒書」の「南城（南之城）」に比定され、「宮崎城見取図」では「百貫ショウジ」とされる。現在の地元における伝承名は「百貫城」である。「百貫ショウジ」の伝承名について八巻氏は「本城を敵から守る重要な曲輪という意かもしれない」と考察している。

また曲輪Ⅱの東側には長大な堀切を隔てて南北に細長く伸びる曲輪Ⅳがある。さらにそこから続く南東の尾根には横堀が入り、その対岸の尾根上には土塁ないし段が設けられている。この曲輪Ⅳについて千田氏は、曲輪Ⅱに比べて面の削平がやや甘く、防御機能に主眼をおいた曲輪とする。これに沿えば曲輪Ⅱ以内を防御するための機能に重点を置いた曲輪ということになる。ここを「宮崎城見取図」では「猿渡一馬乗馬場」とする。

**曲輪Ⅲ（野首城）** 曲輪Ⅰ（主郭）とは間を大型の堀切で隔てた北西に位置し、最高点標高 92.8 m、曲輪の規模は東西 159 m、南北 119 m、面積 9,700 m<sup>2</sup>で、曲輪Ⅰを挟んで南に位置する先述の曲輪Ⅱ（百貫城）よりも更に広い面積を持つ。曲輪Ⅱと同じく溝、段差で曲輪内部が区画され、千田氏はⅢ a～e と 5 つに細分し、八巻氏は 3 つの区画を図示している（原著曲輪 2）。

曲輪の南側では曲輪Ⅰと共有する堀切から 2 段の帯曲輪を経て曲輪内に入るが、この進入地点は方形に近い形で窪んでおり、八巻氏は柵形と評価する。また反対側の曲輪北東端も方形に近く窪んでおり、ここから曲輪斜面を回り込むスロープを経て北側の丘陵鞍部に降りる。この方形部分を千田氏は「定型化したものではないが内柵形」、八巻氏も柵形とする。くわえて千田氏は、中心曲輪群への南北双方の出入口として、曲輪Ⅱ南側の虎口が外柵形であるのと対になって、北側のこの虎口が内柵形の形態をとっていると評価している。また八巻氏はこの虎口周辺を地元では「ビシャモン」と呼んでいることを紹介している。

曲輪Ⅲは派生する東西それぞれの尾根上における防御上の造作が特徴的で、曲輪直下にあたる西側尾根の基部には長大な横堀と、その対岸に土塁を設ける。また東側尾根は大規模な堀切で切り離され、その対岸に狭小な曲輪が設けられている。千田氏はこれを櫓台と推測し、また現況ここに認められる窪みについて穴蔵状施設の痕跡であった可能性を指摘している。同じくこの窪みについて八巻氏は、登城路を見下ろす重要な地点であることから、城内側の兵がこれを押さえるための塹壕状の施設ではないかと推測している。

曲輪Ⅲ内部の区画について千田氏、八巻氏ともにこれを屋敷割と評価している。「直純寺由緒書」中の「野首之城代・・・」の記述がこの曲輪に比定され、「宮崎城見取図」でも「野首城」とされる。地元における同所の伝承名には、「野首城」にくわえて「目引城・目曳城」があるが、これは宮崎城



写真2 曲輪Ⅱ・Ⅴ間堀切現況 ※東より撮影

められ、曲輪虎口と思われる。現況、この東側塁線に沿って城麓に通じる道が設けられているが、八巻氏は新道としている。曲輪南端は3段の段差をもって高くなり、城内最大の堀切に面しているが、千田氏、八巻氏ともにその最上段を櫓台と評価している。

「直純寺由緒書」中では記載されたその規模から「小城」に比定されるが、同書中ではその城代を曲輪Ⅰ（主郭）・曲輪Ⅱを隔てた曲輪Ⅲ（野首城）と「同人」としており、やや違和感がある。「宮崎城見取図」では「彦エ門城」と記され、『日向地誌』記載の「彦右衛門城」にあたる。

曲輪Ⅷ（服部城） 曲輪Ⅲ（野首城）北東の虎口から曲輪斜面を回り込むスロープを経て北側に降りると、八巻氏が曲輪3とする一定面積を持った丘陵鞍部に至る。曲輪Ⅷはここからさらに北側に位置する、大きくは3段に分かれた曲輪である。規模は東西38m、南北42m、面積870㎡と小型の曲輪で、最上段の標高は91.7mである。この曲輪は東西それぞれに尾根が伸びる基点にあり、八巻氏は北の防御の要とする。曲輪Ⅷの北東側には二重の堀切が入り、その先は細長く東に約1160m延びる長大な曲輪Ⅸ（八巻氏の曲輪5）となる。その東端からさらに北と東に細い尾根が延びるが、それぞれ削平段と堀切で区切ってあり、曲輪Ⅸが城域北東端となる。曲輪Ⅷの北西端には土塁状の高まりがあり、千田氏、八巻氏ともに櫓台の可能性を指摘する。その先は大型の堀切となり、対岸に狭小な曲輪Ⅹ（八巻氏の曲輪6）を設け、その先は4段ほどの段が入ったのち堀切となり、曲輪Ⅹが城域北西端となる。

曲輪Ⅷは「直純寺由緒書」、「宮崎城見取図」とともに該当する記載がないが、地元では『日向地誌』記載の「服部城」を同所の伝承名としている。曲輪Ⅸは「宮崎城見取図」で「射場城」とされ、『日向地誌』記載の「弓

全体の別名としても言い伝えられるものである。

曲輪Ⅴ（彦右衛門城） 曲輪Ⅱ（百貫城）と堀切を隔てた南側に位置し、標高85.6m、曲輪面の規模は東西28m、南北85m、面積1,800㎡で南北に長い平面形の曲輪である。曲輪北側には堀切に面して土塁が設けられ、八巻氏はこの堀切に入った敵への攻撃と防御を兼ねたものとする。この土塁に接して、曲輪東側塁線上の北端には方形に下がった段が明瞭に認め



写真3 曲輪Ⅷ現況 ※石碑列と、その後ろの土塁状の高まり

場城」と同一と思われる。地元での伝承名も「射場（ゆば）城」である。反対側の曲輪Ⅹには伝承名等がない。現在、曲輪Ⅷには北西の土塁状の高まりを背にして3基の大型の石塔、石碑が建っている。1基は板石による年不詳の「三界萬霊」、他の2基はそれぞれ「宮崎城三百五十年祭記念碑」「宮崎城四百年記念碑」で、慶長5年（1600）の宮崎城落城時に亡くなった人々を慰めるため、地元有志によって建立されたものである。

### （3）宮崎城跡の口（登城路）

登城路および出入口について、戦国期末の『上井覚兼日記』中には「和田口」、「目曳（之）口」、「野久美口」、「町口」、「柏田口」、「金丸口」の記載がある。「町口」以外は固有の地名を冠したものであり、あるいは「町口」はいずれかと重複する一般的な呼称の可能性も考えられるが、一次史料である『上井覚兼日記』から確認できるのは以上の6口である。また伊東氏の家譜『日向記』（宮崎県編1999）など一次史料以外のものでは、別の名称も確認できる。

これらの比定については先行研究の多くで検討されている。明治時代の『日向地誌』をはじめ、富永嘉久氏の論考中に掲載された「宮崎城見取図」（直純寺蔵の見取図原本には口の名称が記入されていないが、富永氏の検討によりこれを付加して掲載したものと思われる）、『日本城郭大系』中の石川恒太郎氏による「宮崎城要図」（児玉他1980）、若山浩章氏の論考（若山2002）、千田嘉博氏の論考（千田2004・2009）、『宮崎城跡測量調査報告書』中の「宮崎城周辺の地名」（宮崎市教委編2009）、八巻孝夫氏の論考（八巻2013）、新名一仁氏の論考（新名2018）に考察がある。

現在、宮崎城跡の登城に利用可能な道は4筋あり（令和2年3月現在、倒木被害や路面の陥没等によりうち2筋は通行不能になっている）、最もメインとして利用されている山麓の満願寺跡付近を起点として曲輪Ⅰ（主郭）・Ⅲ（野首城）間の堀切に東から入る道は「満願寺（万願寺）口」と通称され、同名は『日向地誌』にも記載される。千田氏はこれを『上井覚兼日記』の「金丸口」とし、新名氏も賛同する。なお「金丸」は宮崎城跡の山麓北東部に字名として残る（12頁第8図）。このルートについては地域の方から「数十年前に自分たちが上で耕作をするために作った道」との話をうかがったこともあるが、完全に新設されたものではなく、通行の利便性向上のために道の拡幅等をおこなったということかと思われる。

同じく満願寺跡を起点として曲輪Ⅲ・Ⅷ（服部城）間の丘陵鞍部に東から入るルートがあり、千田氏、新名氏は「野久美口」とする。

城麓南東に位置する字後吾田からは曲輪Ⅱ（百貫城）・Ⅴ（彦右衛門城）



写真4 金丸口（満願寺口）現況

間の堀切に入る道が2筋あり、うち曲輪Ⅴの東裾を通過して南から進入する道については、先述のとおり八巻氏は新道であろうとし、千田氏も縄張図に図示していないことから同じ見解と思われる。くわえて1978年時点の富永嘉久氏の測量図にも記載されておらず、近年設けられた道の可能性が高い。もうひとつの曲輪Ⅱの南裾を通過して東からこの堀切に進入するルートについては、若山氏の論考においてこれに通じる山麓部を「和田口」として図示したのをはじめとして、『宮崎城跡測量調査報告書』、八巻氏、新名氏のいずれも「和田口」としている。なお『日向地誌』では「船ヶ崎口」としている。

これらとは別に、現在日常的に使用されているものではないが、曲輪Ⅰ・Ⅲ間の堀切から西に通じるルートが確認できる。これについては『日向地誌』以降、「目曳口」とすることで各研究者の見解が一致している。

さて先の「和田口」について、その到達点である曲輪Ⅱの南側虎口は城内で唯一、土塁を張り出させた外柵形を志向したものとなっている。同所は「宮崎城見取図」において「大手口」とされており、千田氏、八巻氏ともにこれを主要部の玄関口として評価している。この空間に面する曲輪Ⅱ・Ⅴ間堀切はこれを見下ろすレベルにあり、その堀底には複数の仕切り土塁が確認される。千田氏はこれを外柵形に対する武者隠しとして機能したものと解釈し、八巻氏は発掘調査によって後世の造作でないことを確認する必要性を前提としつつ、本来のものであれば障子堀に似た、堀切内に敵を入れられないためのものと評価する。



写真5 和田口（曲輪Ⅱ南側虎口）現況 ※曲輪Ⅴ上より撮影

これに面する曲輪Ⅴ北側墨線には土塁が設けられており、平成30年度調査によって暗渠排水をとまなうものであったことがわかっている。この土塁は堀切対岸の曲輪Ⅱに面するものでもあるが、曲輪間の高低差が大きく、この上にさらに塀などが設けられたのでない限り、曲輪Ⅱに対する防備あるいは日常時の目隠しとしての意味は成していない。また東側、つまり和田口の進入口そのものに面しては土塁が回っておらず、あくまで曲輪Ⅱ・Ⅴ間堀切の堀底に対して設けられたものと理解できる。この曲輪Ⅴ北側における土塁の存在は、先の堀切底の仕切り土塁に対する八巻氏の見解を補強するものであろうが、この虎口空間が城内でも特に厳重な防御上の工夫を凝らしたものであったことは間違いない。

和田口＝大手については、『上井覚兼日記』に「此日、衆中名リ之人数揃候て普請也、和田口之道留候之普請也」（天正11年7月28日条）との記事がある。これについて若山浩章氏は和田口の完全な閉鎖と解釈し、これに替わって大淀川沿いの町への新道開設や町口の重点的整備をおこない、城郭の防備よりも城下の取り込みを重視したと分析した（若山2002）。一方、新名一仁氏はこの「道留」はあくまで一時的な通行止めであり、この間に和田口の全面的な修復がおこなわれたものと解釈する（新名2018）。現況の縄張では、虎口や登城路としての機能を完全に失わせるような破却が和田口におこなわれた形成はなく、新名氏の見解を補強する。

#### （4）主要部外の遺構

以上が宮崎城跡の主要部であるが、その外側にも小規模な曲輪群や堀切等が存在する。これらは主要部への侵入を防ぐいわば外郭の防御施設や、あるいは城域の拡大・縮小という宮崎城の変遷の中でその位置付けを検討すべきものと思われるが、それらの中に特筆すべき遺構群の存在を八巻氏が指摘している。

八巻氏は宮崎城中心部から派生する尾根上のいくつか、城外側が高くなる位置関係で堀切が設けられている箇所があり、曲輪平坦面や切岸の形成が不明瞭であることから、攻城戦時に敵方が臨時に設けた施設である可能性を指摘している。具体的には、曲輪Ⅱ（百貫城）の東に隣接する曲輪Ⅳ（原著曲輪11）から南東に派生した尾根上における城外側を高所とする堀切と、城内側に対して櫓台を設ける尾根突端の曲輪（原著曲輪12）、曲輪Ⅲ（野首城）から南西に派生する尾根の中程および突端付近に設けられた城外側を高所とする堀切、曲輪Ⅷ（服部城）の西に隣接する曲輪Ⅹから西にさらに北へと向きを変えて延びる尾根上における、城外側を高所とする堀切とその先に設けられた一定面積を持つ2つの曲輪（原著曲輪7・8）の大きく3箇所である。これらについて八巻氏は慶長5年（1600）の伊東氏による宮崎城攻撃時のものと推察しているが、同時に城内側が戦いに際して防備強化のために築いたもの、あるいはもともと城内側の施設だったものが攻城側に占領、改修されたものの可能性もあると指摘している。なお千田氏も曲輪Ⅲ南西尾根上の堀切について、攻城側による構築の可能性を指摘している。

また八巻氏は曲輪Ⅰ（主郭）・Ⅱ・Ⅴ（彦右衛門城）の西麓に、水源の存在を指摘している。曲輪ⅠとⅤのそれぞれから派生した尾根と土塁で囲まれた溜池で、溜池そのものは後世に整えられたものであろうが、これを囲む尾根と土塁は城の水源確保のため中世につくられたものであろうと推定している。

## (5) 宮崎城跡の縄張

ここまでに確認してきた千田・八巻両氏による縄張の分析にくわえ、平成29・30年度発掘調査における調査成果から、各曲輪の機能と曲輪配置の関係を検討したい。

宮崎城跡の主要5曲輪の配置を確認すると、大きくは南北に伸びる尾根上において、城域中央に単郭の曲輪Ⅰ（主郭）があり、その北と南それぞれに溝や段差で内部を細かく区切る広大な面積の曲輪Ⅱ（百貫城）・Ⅲ（野首城）が配置される。南に位置する曲輪Ⅱの南側には外柵形の、北に位置する曲輪Ⅲの北側には内柵形の虎口が設けられ、主郭へと至るための南北双方の出入口となっている。さらにこの曲輪Ⅱの外側である南には大型の堀切と櫓台がセットになった曲輪Ⅴ（彦右衛門城）が、同じく曲輪Ⅲの外側である北には同じく大型の堀切と櫓台がセットになった曲輪Ⅷ（服部城）が配置される。

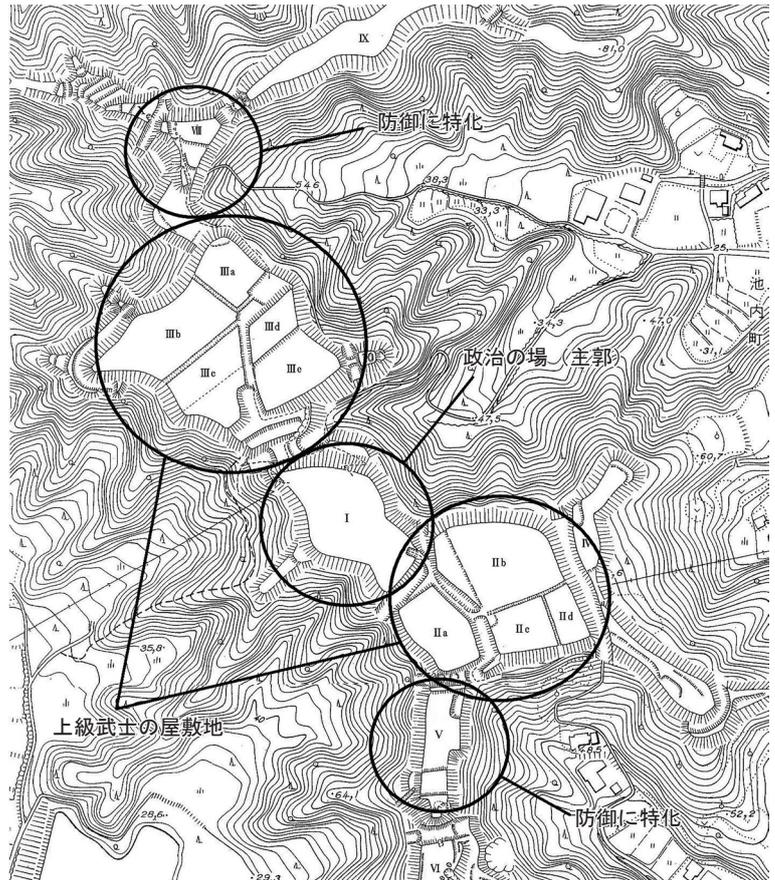
以上の5つの曲輪それぞれにトレンチ・調査区を設定して実施した平成29・30年度の発掘調査では、曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのいずれにおいても地山や造成土を曲輪面としたピットをはじめとする遺構が高密度で検出された。調査範囲が狭小なためピットの並びを復元するまでには至らないものの、これらの曲輪には当然ながら掘立柱建物が存在したことを示している。遺物は陶磁器、土師器などの日常雑器から、基石のように余暇に関わるものまでが出土しており、この3つの曲輪が日常的に使用される空間であったことを明確に示している。縄張の分析においては、改めて言うまでもなく曲輪Ⅰは主郭と位置付けられ、城主の居所、政治の場としての機能を持つ。曲輪Ⅱ・Ⅲは内部に屋敷割がなされており、城内に屋敷を構えた上級武士複数人の屋敷地として、日常的な居住空間として機能した曲輪ということになる。

一方、曲輪Ⅴ（彦右衛門城）・Ⅷ（服部城）の様相はこれと大きく異なる。曲輪Ⅷは近年の削平により遺構、遺物ともにほとんど検出されなかったため詳細を検討することができないが、曲輪Ⅴでは削平造成により礫層に近い高さを曲輪面としていることが判明した。これはあくまで平成30年度調査の狭小な調査範囲に限ってのことではあるが、当然ながらこの面は居住施設の主であったろう掘立柱建物の建築には適していない。瓦が出土しているが、織豊期の支城における瓦葺建物の存在は必ずしも日常的な居住を示すものではないということが、慶長期福島領（広島県）における支城の様相を検討した高田徹氏の論考で分析されている（高田1995）。つまり曲輪Ⅴでは日常的な空間として機能していたことを示す要素が見出されず、非日常的な空間であった可能性を検討する必要がある。曲輪の構造としては城外側に大型の堀切を配し、これに面して櫓台を設けている。また曲輪Ⅱとの間、大手である和田口からつながる堀切に面しては土塁を構え、防御の意識が顕著である。同じくこれら5曲輪の中で最も小型の曲輪Ⅷも城外側に対して櫓台と大型の堀切を持つという点で曲輪Ⅴと共通した構造である。日常における居住空間として機能した先の3つの曲輪とは異なり、曲輪Ⅴ・Ⅷは日常生活よりも非日常である軍事機能を重視した曲輪と言えるのではないだろうか。

この宮崎城の主要曲輪群の配置については、政治の場である主郭が中心にあり、その両脇に上級武士の屋敷地、さらにその外側に防御に特化した曲輪が位置するという、各曲輪の機能分化が明瞭で左右対称に配置された、極めて計画的な平面構造と言える（第45図）。南北それぞれに設けられた外柵形、内柵形をなす虎口空間の内側に位置する曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲが平時における地域支配の拠点として機能した中核部であり、非常時にこの中核部防衛という機能を発揮するよう期待されたのが曲輪Ⅴ・Ⅷ

であったと理解できる。

八巻氏は宮崎城跡で特筆すべき、南九州の城ではあまり見られない「突出した防御」として、曲輪Ⅰ（原著曲輪Ⅰ）虎口の横矢、曲輪Ⅲ（原著曲輪Ⅱ）西の横堀、曲輪Ⅲ東の陣地、堀切と連動して攻撃できる大型の枡形虎口である和田口を挙げている。これには同じく八巻氏が1987年の論考で指摘していた曲輪Ⅱ（原著曲輪9・10）東側の弧を描く堀切も加えて良いであろう。これらはいずれも曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを防御の対象としており、日常的な中核部が、先の曲輪Ⅴ・Ⅷもあわせた外郭の施設によって嚴重に防御されていたことを物語る。

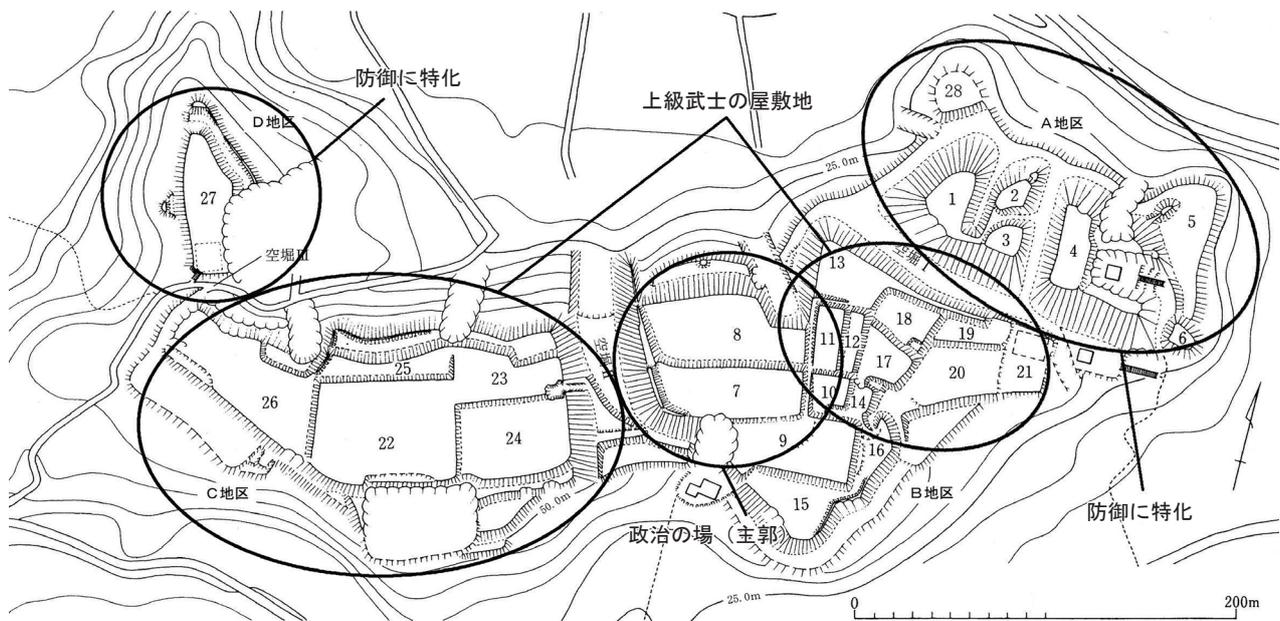


#### (6) 縄張りに表出される機能分化と南九州の山城について

第45図 宮崎城跡の機能分化 ※宮崎市教委編2009に加筆

同様に縄張りに機能分化が読み取れる南九州の山城としては、宮崎城跡の可視範囲にある穆佐城跡（宮崎市高岡町）を挙げることができる（第2図74・第46図）。穆佐城跡は宮崎平野の西辺に位置し、宮崎城跡と同じく南北朝期から元和の一国一城令まで存続した歴史を持つ。標高60m前後のシラスが卓越した東西に伸びる丘陵（シラス性丘陵）に占地し、シラス土壌の特性を生かした大規模な空堀によってほぼ等高の4つの曲輪群をつくり出している。A～D地区と呼称される4つの曲輪群内は、段差や小規模な堀によって総数30前後の曲輪に細かく分割される。

1992年に千田氏によって縄張図が作成されており、氏はその縄張構造から城域両端のA・D地区を防御主体、その内側に位置する2つの曲輪群のうち、主郭を含むB地区を政治中枢・城主一族の屋敷地、C地区を上級家臣の屋敷地と分析し、「一連の曲輪群の機能分化が明瞭に復元できる」としている（千田1992）。この千田氏による分析を更に突き詰めれば、B地区の「城主一族の屋敷地」という位置付けについては、15の曲輪からなる同地区の一面に島津氏9代忠国の生誕地と伝えられる曲輪の存在することによるが、これは室町初期の事象のため、最終段階の縄張を検討する上ではあまり重きを置かない方が良いと思われる。城主の「一族」をどこまでの範疇で捉えるかという問題もあるが、穆佐城跡主郭（曲輪7・8）は先の宮崎城跡主郭を上回る5,700㎡の面積を持ち、少なくとも城主「家族」の居住空間は主郭内で十分におさまるものと思われる。またB地区は1～3m前後の段差によってつくり出された各曲輪が、主郭を最高所として雛壇状に展開する。段差によって複数の区画をつくり出す構造はC地区と共通しており、B地区における主郭をのぞいた各曲輪の機能については、C地区と同じく城内に居住する上級武士の屋敷地と見て良いかと思われる。



第46図 穆佐城跡の機能分化 ※千田 1992 に加筆

このように考えると、穆佐城跡の縄張は政治の場である主郭を中心として、その両脇に上級武士の屋敷地、さらにその外側に防御に特化した空間が位置するという、宮崎城跡とまったく同じ縄張配置ということになる。ただし穆佐城跡の主郭は、西側の居住空間に対しては大規模な空堀と土塁を構えるが、東側の居住空間、つまり主郭と同じ地区内にある他の曲輪に対しては、地区内の最高所であることと他の曲輪にはない土塁を有することによって、かろうじてその優位性を表出している。

一方、宮崎城跡は大規模な堀切によって主郭を両脇の居住空間から完全に切り離し、主郭の隔絶性をより顕著に表出させている。主郭の求心性という観点からは、穆佐城跡よりも宮崎城跡の方がより一貫性のある縄張と言える。ただし宮崎城主郭の持つ求心性は、あくまで機能面の検討によって平面構造上に見えるものである。高所を占めて曲輪間連携の中心にあり、作事物も含めてその優位性を明確に可視化した織豊系城郭の主郭が持つ求心性とは、その度合いが大きく異なる。

南九州においては、このように曲輪配置から機能分化が明確に読み取れる山城自体が稀である。当然ながらこれは、各曲輪の機能分化がなされていた城郭が宮崎城や穆佐城だけだったということではない。すべからく城の各曲輪はそれぞれに機能を付されて運用されていたはずであり、単に宮崎城跡等ではこれが縄張上で見え易く、後の節で述べる特徴的な縄張を持った他の南九州の拠点城郭では読み取りにくいということであろう。今後は、宮崎城跡と同様な機能分化が他の南九州における拠点城郭でも見出されないか否か、見出せる場合どのようなレイアウトとなるか、その中で主郭の位置付けはどうか、主郭の持つ求心性がどのようなものか等の検討をおこなうことで、南九州の城郭研究をさらに深化させられるのではないかと考えられる。

【引用・参考文献】

瓜生野・倉岡郷土誌編集委員会編 1986年『瓜生野・倉岡郷土誌』宮崎市北地区振興会

児玉幸多・坪井清足監修 1980年『日本城郭大系』第16巻 大分・宮崎・愛媛 株式会社新人物往来社

- 千田嘉博 1992 年「穆佐城址について」『高岡町遺跡詳細分布調査報告書』高岡町埋蔵文化財調査報告書第 2 集 高岡町教育委員会
- 千田嘉博 2004 年「戦国期の城下町構造と基層信仰 上井覚兼の宮崎城下町を事例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 112 集 国立歴史民俗博物館
- 千田嘉博 2009 年「宮崎城の構成」『宮崎城跡測量調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第 75 集 宮崎市教育委員会
- 高田 徹 1995 年「慶長期における本城・支城構造—福島・毛利領を中心として—」『中世城郭研究』第 9 号 中世城郭研究会
- 富永嘉久 1978 年「宮崎城址及びその周辺」『会報』第 3 号 宮崎県地方史研究会
- 新名一仁 2018 年「『上井覚兼日記』にみる土木事業—城郭普請を中心に」『戦国大名の土木事業 中世日本の「インフラ」整備』戎光祥出版株式会社
- 野口逸三郎校訂・解題 1976 年『日向地誌（復刻版）』新潮社
- 宮崎県編 1999 年『宮崎県史叢書 日向記』宮崎県
- 宮崎市教育委員会編 2009『宮崎城跡測量調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第 75 集 宮崎市教育委員会
- 八巻孝夫 1987 年「宮崎城」『図説中世城郭事典』第三巻 株式会社新人物往来社
- 八巻孝夫 2013 年「日向国・宮崎城の基礎研究」『中世城郭研究』第 27 号 中世城郭研究
- 若山浩章 2002 年「中世城郭の普請と作事 —『上井覚兼日記』に見られる宮崎城の普請と造作を中心に—」『宮崎県地方史研究』第 15 号 宮崎県地域史研究会

## 第 2 節 文献史料からみた宮崎城跡

報告書末尾に示した宮崎城跡に関する史料をもとに、文献史料から見た宮崎城跡について考察する（掲載史料は末尾に（史料編）と明記した）。

### （1）宮崎庄と宮崎城跡

宮崎城跡が位置する大淀川左岸を大きく含む一帯は、豊前宇佐八幡宮領の荘園として成立した宮崎庄にあたる。建久 8 年（1197）の凶田帳には「宮崎庄三百丁」とあり、地頭に鎌倉幕府の御家人中原親能を示す「前ノ掃部頭殿」の名が見える（「島津家文書」宮崎県編 1994）。この宮崎庄の総鎮守は奈古八幡社で、『宮崎県史 史料編中世 1』に中・近世文書 88 通が紹介され、同庄の歴史を物語る貴重な史料となっている（宮崎県編 1990。以下、特に典拠を示さないものは奈古神社文書）。

この奈古神社文書に見える地名から、宮崎庄の荘域を探ってみよう。享禄 2 年（1529）の「奈古宮遷宮入用日記写」は、同庄が「南方」「池内方」「北方」に分かれていたことを示している。現在も南方町、池内町、上北方、下北方の地名が残っており、これらの地域が宮崎庄の荘域であったことは容易に推測できる。また、他の寄進状等から、「南方」には「笠本」「江良」、「池内方」には「萩藪」、「北方」には「和田」「萩原」「原之藪」の地名が確認できる。「北方」の「和田」は、宮崎城跡の南に現在も地名が残る前吾（わ）田、後吾田の辺りであり、「南方」の「笠本」は、文書内に「宮崎庄笠本村内奈古大宮司」と見えることから、現在の奈古神社が鎮座する付近の地名であることがわかる。さらに、寛正 6 年（1465）の「神事注文写」には、宮崎庄の村名として「和田」「池内」「笠本」「柏田」「本村」「和知瓦」が見える。「柏田」「和知瓦」は柏田（大字瓜生野）、和知川原（1～3 丁目）として、現在も地名が残る。宮崎庄の荘域が、前述した池内町～下北方町付近から、さらに大淀川左岸の下流

域一帯まで、広範囲に及んでいたことがうかがえる。宮崎城主上井覚兼が天正11年（1583）に城と柏田を結ぶ道を普請し、翌年、和知川原に新町を立てさせているが、その背景には、これらの地域が当初から宮崎庄の荘域に含まれ、宮崎城の支配が及ぶ範囲にあったことがわかる（『上井覚兼日記』）。

次に、奈古神社文書から、宮崎庄における支配の変遷を見てみよう。すでに鎌倉初期の建久8年の地頭に御家人中原親能がいたことに触れた。正中2年（1325）の「鎮西下知状」には、宮崎庄の地頭に「戸次左近蔵人貞頼」の名が見える。戸次氏は、豊後大分郡戸次庄（現大分市）より起こった大友氏一族で、観応2年（1351）の「戸次頼時讓状」（立花家文書、宮崎県編1994）には「日向国宮崎庄惣領分地頭職」が戸次氏の「或重代相伝之所領、或元弘・建武勲功地」として記されている。鎌倉後期から南北朝期までは重代相伝の所領として戸次氏の手にあったと見てよいであろう。なお、永徳3年（1383）の「大友親世当知行所領所職注文案」（立花家文書、宮崎県編1994）には「日向国守護職」とともに「同国宮崎庄」が所領として見える。

室町期になると、宮崎平野は伊東氏と島津氏の争奪の地となる。文安元年（1444）に家督を継承した伊東祐堯は、曾井城、穆佐城などを次々に攻略、同3年には宮崎城を攻め落とし、宮崎庄を支配下に置いた（『日向記』「祐持所々御退治事」（史料編）。伊東氏は、その領国支配において当初は南北朝期の代官の機能を継承した（宮崎県編1998）。それは宮崎庄においても同様で、文安3年の「代官祐守寄進坪付写」のごとく、代官が発給する文書が確認できる（宮崎県編1998では「祐守」を長倉氏の執事としている）。また、前述の享禄2年（1529）の「奈古宮遷宮入用日記写」には、「南方」「池内方」「北方」の代官として、それぞれ伊東氏家臣の稲津修理亮、右松左京亮、右松族右衛門の名が見える。また、『日向記』の「門河対治并祐吉早世事」（史料編）には、長倉能登守らに擁立され家督を継承した伊東祐吉が天文3年（1534）2月19日に宮崎城に入城し、「御住宅」した記事が見える。奈古神社文書には、祐吉が同年4月13日に「修理田壺町」を奈古八幡社に寄進したことを示す文書が残されている。

奈古神社文書中には、宮崎城跡を指していると考えられる（「城」の文言が見える）文書が2通ある。大永8年（1528）の「上別府祐子寄進状写」（史料編）には寄進の願意に「城内安全」の文言が見える。寄進者の上別府祐子は、代官に任ぜられた伊東氏家臣であろう（上別府氏は『日向記』の「分國中城主掇事」「諸侍衆惣領一人撰事」それぞれに名が見える。祐子はその一族と考えられる）。寄進地「上別府」は、現在の瀬頭、上ノ町、大工町（いずれも宮崎市）辺りのことで、宮崎庄には含まれていない。「城内安全」が宮崎城跡を指しているかどうか、なお検討を要する。

もう1通は年未詳9月10日の「炎綱・祐存連署状写」（史料編）で、奈古八幡社に「御宿」を調えるよう命じたものであり、「城内屋作」の文言が見える。宮崎城では「御宿」として不便（文言の後に続く「不使」は「不便」の誤写か）、地下にも適当な場所がないという意味で捉えると、「城内屋作」は宮崎城を指すと採れる記述と言えよう。「炎綱」は通字の「綱」から野村氏一族であろう。野村氏は『日向記』中「御感状連判人数」に名が見えることから、その連署状として発給されている。

『日向記』の記述から、伊東氏が宮崎城に城主を置いていたことが分かる。文安3年（1446）には落合彦左衛門尉、「分國中城主掇事」には肥田木勘解由左衛門尉・長嶺紀伊守・肥田木越前守の名が宮崎城主として見える（史料編）。この「城主」は、『日向記』「覚頭合戦敗北事」に記す「地頭」と同義と思われるがその実態は不明である。また、現在のところ、宮崎城主が在地（宮崎庄）の支配に関わったことを示す史料は残っていない。先に述べた「代官」や奈古八幡社との関係を示す史料もな

く、宮崎庄内における位置付けは不明である。さらに史料の検討が必要であろう。

## (2) 戦乱に係る文献史料

史料編に掲載した史料は、『上井覚兼日記』を除けば、ほとんどが戦乱に係る史料と言っている。これらの史料をもとに、宮崎城で繰り広げられた戦乱について見ていく。

建武3年(1336)2月7日の「土持宣栄軍忠状写」2通(いずれも史料編)は、本稿第1章第2節でも触れているが、宮崎城の史料上の初出である。足利方として戦った土持宣栄が前年12月以来の南朝方と合戦に及んだ「軍忠」を「島津庄惣政所」「守護御奉行所」に宛て披露したものである。この一連の合戦の中で、建武3年1月14日に「宮崎池内城」に立て籠もる「一坪入道慈圓」とその甥らを生捕り殺害したことが記されている。この「一坪」は、同日付け守護御奉行所宛ての文書には「圖師」と記す。一般的に図師は、古代の国・郡や荘園で図帳・田図等の作成にあたった役人として知られるが、慈圓らは、それらの図師を出自とする一族であろう。後世に記された『日向記』『伴姓兼重賦(伴姓肝属氏系譜)』(ともに史料編)の記述は、土持宣栄軍忠状を踏まえた内容となっている。この時の宣栄らの軍功は、後に足利氏に上申され、その恩賞として宣栄の子時栄に宮崎庄北方内の「和田村半分(勘解由左衛門跡)」が与えられたことが土持文書(宮崎県編1990)で確認できる(康永3年(1344)3月3日「若林秀信挙状」、貞和4年(1348)8月9日「某袖判宛行下文」)。

衾寝文書に、宮崎庄において合戦が行われた、もしくは行われようとしていることを記した文書が2通ある。いずれも伊東氏が宮崎に「勢遣」するという表現となっている。年末詳7月15日の「島津忠国書状写」(史料編)は、「仍山東之事、伊東宮崎ニ勢遣けるか、打負候て在所へ引帰候之由其間得候」と、伊東氏が宮崎を攻め、在所(都於郡)に引き返したとの伝聞を伝えている。書状に、「末吉城こしらへ」「旁御越候者喜可存候」とあることから、忠国が末吉に隠居した永享4年(1432)以降のものとなる。文安3年(1446)6月には、伊東祐堯が宮崎城を攻め落としているが(『日向記』「祐持所々御退治事」)(史料編)、この事件に関する伝聞か、あるいはそれ以前の伊東氏の動きなのか、詳細は不明である(宮崎県編1994は文安3年の可能性を示唆している)。また、年末詳7月12日の「島津忠治書状写」(史料編)には、宮崎から鹿児島に遣わされた使僧が、伊東氏から攻められているため、合力を求めていることが記されている。忠治が当主であった永正5年(1508)から同12年(1515)までの書状と思われる。

宮崎城に関する合戦でよく知られているのが、慶長5年(1600)9月晦日から10月朔日にかけて行われた、伊東氏家臣稲津掃部助による宮崎城攻めである。この時宮崎城は、縣高橋氏領でその家臣権藤種盛が城代として在城した。『日向記』に記す城攻めの経過を以下に示す(「左京亮祐慶日州へ下着宮崎ノ城ヲ攻取事」)(史料編)。

○晦日の夜、清武勢3000余人が川を渡り、先手の300余人が関をあげる。

○権藤父子は、清武勢が小勢と思い、城を打って出るよう下知す。

○先手は麓にて放火し、四方から城に攻めあがる。

○権藤父子3人をはじめとする城勢が防戦するも、父子3人痛手にて本丸に引き込む。

○万貫寺(満願寺)が出て降参を乞うも、清武勢は聞き入れず、翌朔日に落城す。

○城主権藤種盛以下城兵100余人、外雑兵に至るまで討死する。その後、稲津掃部助が在城す。

この合戦について記す軍記に『稲津掃部合戦記』がある(史料編)。清武勢は渡河の後、北方村に

て休息し、東向きの手門から城に攻めかかっている。大手の様子を「谷相にて双方は屏風を峠たるか如也」と表現し、北側の「満願寺口」とは別記している。現在の前吾田・後吾田方面の登城路が想定できるが、合戦の日付を10月30日とするなど、史料に誤った記述も多い。

宮崎城攻めに関しては、黒田如水が稲津掃部助など伊東氏家臣に宛てた2通の書状が『日向記』に収められている（「左京亮祐慶日州へ下着宮崎ノ城ヲ攻取事」）（史料編）。9月28日の書状では、如水から稲津掃部助他2名に宛て、関ヶ原の合戦後の九州の仕置きとして、宮崎城を攻め取る等の指示を申し送っている。また、10月19日の書状では、如水から稲津掃部助に宛て、宮崎城攻めの軍功を「無比類」と賞している。

### （3）『上井覚兼日記』に見る宮崎城

『上井覚兼日記』（以下『日記』と略す）については、すでに第1章において概略記述している。ここでは、特に城跡の構造に関する記述に焦点を絞りながら考察を加えたい。なお、表9は、若山浩章氏作成の表（若山2002）を参考にし、さらに城の各施設の広さや使われ方に関する記事を追加して作成したものである。

#### ①城内への居住

覚兼の統括下では、衆中は「城内之衆中」と「麓之衆中」、衆中以外は覚兼の家臣である「倅（かせ）者」がいた。このうち「城内之衆中」については、天正13年（1585）1月1日の記事に「城内之衆中廿人計二三献参会候」、翌日にも「鎌田源左衛門尉殿、其外城内衆中へ礼申候」とあることから、20人以上が宮崎城内に居住していたことがわかる。桑波田興氏は、『日記』から判明する「城内之衆中」は鎌田源左衛門尉（覚兼の実弟）、関右京亮、柏原有閑の3名とし、この3名が登場する場面から、彼らが地頭の外城統治における補佐役として重要な役割を果たしていたことを指摘している（桑波田1983）。また、覚兼は彼らに「殿」を付け、他の衆中と区別しているが、時には「鎌源」など略称を用いる場合も見受けられる。覚兼が彼らのことを島津氏直臣として尊重しながらも、日頃から親近感を持っていた様子がうかがえる。

城に衆中が居住した事例は他にもある。同じ島津氏の高岡では、慶長5年（1600）に外城が取り立てられてから同7年までの間、天ヶ城に14名の衆中が居住したことが史料に見える。以下は、その抜粋（中原家文書「野尻名勝誌・高岡由緒」）。

一移之節城内江被召置候人数屋敷

一下屋敷壹反 御代官所

一荒屋敷四畝廿歩 本田吉左衛門

（13名略）

一下々屋敷八畝 本丸

右人数天ヶ城之内ニ罷居候処、城内居住不相成段、慶長七年寅従公義被仰渡、麓江屋敷夫々被仰付候

天ヶ城には、「本丸」8畝と「御代官所」1反のほか、1畝～5畝余歩の衆中屋敷があった。江戸後期の記録ではあるが、今後行われる宮崎城跡の発掘調査において、衆中屋敷の解明の参考史料となるだろう。なお、千田氏は「倅者」は覚兼に近侍して親衛隊的な役割を負っており、職務から覚兼の館に近接して屋敷を持っていたとする。また、麓に屋敷を持ち、在番のための詰所が要所にあった可

能性も指摘している（千田 2004）。いずれにせよ、今後の発掘調査を待つほかない。

## ②城内の施設

宮崎城内にあったと考えられる施設については、『日記』に記す「普請」「造作」「作」「誘（こしらえ）」など、覚兼が行った土木事業に関する記事から推測できる（若山氏は、覚兼が「普請」を土木的な事業、「作事」を建築的な事業として区別していたことを指摘している）（若山 2002）。

『日記』に見える施設の建設は、天正 11 年（1583）1 月 30 日から始まる「風呂」の「造作」が最初で、その後、「毘沙門堂」（11 年 4～5 月）、「茶湯之座」（11 年 4～5 月）、「弓場（坪之弓場）」（11 年 5 月ほか）、「厩」（12 年 11 月）と続く。このうち、「毘沙門堂」と「茶湯之座」は、土地の造成（「普請」）から始まり、その後に建物の「造作」を行っている。4 月 28 日に「毘沙門堂作番匠衆、其外諸細工等」に酒を振舞っているのは、「造作」の開始に先立ってのことか。5 月 1 日には、「番匠」「金銀之細工」「刀之鞘細工」「塗師」などの仕事を覚兼が見廻っている。若山氏によれば、これらの職人の存在が、完成した建造物の豪華さや精緻さをうかがわせるという（若山 2002）。また、千田氏は、これらの職人集団が覚兼に直属した職人であり、主郭内にその工房が存在した可能性を指摘する（千田 2004）。それは、「毘沙門堂」「茶湯之座」の「造作」が成った後にも、「諸細工させ」（12 年 8 月 10 日）、「手火矢細工」（13 年 3 月 18 日）などの記述が見られることから、何らかの工房（作業場）が城内に存在したことがわかる。特に、装剣工として登場する「上野弥左衛門尉」は、覚兼のために製作した刀の鏝が島津義久の関心と呼ぶほどの名工で、度々覚兼はその作業の様子を見廻っている。

それぞれの施設の配置や大きさは、『日記』中に表れる日々の出来事から推測できる。天正 11 年 2 月 14 日に福昌寺（現鹿児島市）住持代賢を「内城」に招いた際の接待は、まず主殿で「御めし」の饗応があり、その後「奥座」で内々の「押肴にて御酒」、最後に「茶湯之座」での「点心」へと続く。こうした建物や部屋を使い分けた、室町期の武家儀礼に則った接待のあり方からは、主殿、会所、茶室といった建物群を廊下で結んだ御殿群が想定される（千田 2004）。また、「棧敷」では「酒宴」「乱舞」、庭では「蹴鞠」「（馬の）庭乗」「柏田より踊来」、毘沙門堂では「法楽之連歌」が行われたことが記され、それぞれの施設の大きさを想像することができる。

## ③「普請」と城のメンテナンス

『日記』で確認できる宮崎城の登城路は、「柏田口」「和田口」「目曳之口」「野久尾口」「町口」「金丸口」の 6 箇所、本章第 1 節（3）において考察している。ここでは、『日記』中の「普請」が指す意味を中心に若干の考察を加えたい。

覚兼は『日記』のなかで、綿密に計画され、長期間に及ぶ土木工事から日々の手入れと思われる土木作業まで、すべてにおいて「普請」という文言を用いている。天正 11 年（1583）閏 1 月に見える「柏田」の「道作之普請」は、「新路」とあり、事前に「普請之義談合」としていることから、大規模な工事であったことが推測できる。また、天正 13 年 1 月から 11 月まで行われた「町口」の「普請」についても、「城戸」や「垂」を建てさせていることや、半年以上に及ぶ工事期間から規模の大きさがうかがえる。

一方、「和田口直し候普請」（11 年 6 月 23 日）、「此朝、普請目曳之口ニさせ候」（12 年 7 月 29 日）という書きぶりは、臨時的な作業を思わせるもので、実際に作業も数日で終わっている。「例之掃地、普請等させ候」（11 年 6 月 19 日）という記事を見ても、「掃地」= 掃除と「普請」が同程度の作業として捉えられていることがわかる。さらに、天正 13 年 7 月 18 日の記事は「城之草払」「岸（切岸のこと）切せ」とあり、具体的な作業までわかる。「水流（つる）之普請」（12 年 6 月 3 日）も臨時的な「普

表9 『上井覚兼日記』に見える宮崎城関連記事

在城期間	年月日	関連記事	番号
天正11年1月21日～ 2月26日	天正11年1月26日	「城内の衆中へ礼儀」	(1)
	天正11年1月27日	「籠之衆中へ礼儀」	(2)
	天正11年1月30日	「風呂造作打立候也」	(3)
	天正11年閏1月4日	「庭前二木なとあまた裁させ候て見申候」	(4)
	天正11年閏1月15日	「(衆中参会し)普請等之儀談合」	
	天正11年閏1月18日	「風呂建させ候とて、終日普請させ候」	(5)
	天正11年閏1月21日	「柏田と城との間の道作せ候、新路にて候」	(6)
天正11年4月8日～ 8月21日	天正11年閏1月27日	「柏田と城之間之道作之普請」	
	天正11年2月14日	「福昌寺御礼とて御光儀」	(7)
	天正11年4月19日	「毘沙門假堂作二打立候」	(8)
	天正11年4月20日	「堂作番匠四、五人にて仕候」	
	天正11年4月21日	「茶湯座作候する覚悟之処二、樹なとさせ候」	
	天正11年4月22日	「茶湯之座之普請させ候」	
	天正11年4月23日	「毘沙門堂地の普請共させ候」	
	天正11年4月28日	「毘沙門堂作番匠衆、其外諸細工等多々居候に、御酒振舞」	
	天正11年5月1日	「堂作之番匠、又ハ金銀之細工・刀之鞆細工・塗師なと見候」	
	天正11年5月3日	「毘沙門堂造畢」	
	天正11年5月6日	「毘沙門堂二茶湯仕懸、衆中なとあまた寄合」	
	天正11年5月8日	「弓場普請各衆中へさせ申候」	
天正11年5月10日	「朝普請二、坪弓場誘させ候」拙者手之衆共、坪弓場にて弓之事		
天正11年5月11日	「弓場普請先日之關衆にてさせ申候」		
天正11年5月12日	「弓場普請之為躰見候するとて、乗物にて麓へくたり候」	(9)	
天正11年5月13日	「此日より茶湯座造作企候」		
天正11年5月18日	「爰元座敷造作最中取乱候間」		
天正11年5月29日	「掃地・普請各へさせ候」		
天正11年6月2日	「從都於郡來候番匠柿置飛驒拯、暇乞候て帰候」		
天正11年6月19日	「例之掃地・普請等させ候」	(10)	
天正11年6月23日	「此日より和田口直し候普請也」		
天正11年6月27日	「此日、和田口普請上候」	(11)	
天正11年6月30日	「内城にて各へ御会尺也」		
天正11年7月26日	「弓場、朝普請させ候」		
天正11年7月28日	「衆中名々之人勢揃候て普請也、和田口之道留候之普請也」	(12)	
天正11年8月9日	「夜入候てより棧敷にて乱舞也」		
天正12年5月12日～ 6月10日	天正12年5月22日	「若衆達被來候、鞠にて候」	
	天正12年6月3日	「水流之普請共させ候」	
	天正12年6月4日	「殊之外洪水也、此日、普請させ候て見申候」	
天正12年7月7日～ 8月27日	天正12年7月13日	「坪之弓場普請させ候」坪弓場にて的射候て慰候」	
	天正12年7月15日	「此日、柏田より踊來候、見物申候」	
	天正12年7月17日	「此日曳目之口弓場普請、衆中被指揃いたされ候、普請あかり候て」	(13)
	天正12年7月22日	「弓場朝普請させ候て見申候」	
	天正12年7月29日	「於毘沙門堂法樂之連歌仕」此朝、普請目曳之口ニさせ候」	(14)
	天正12年7月30日	「目曳之口普請也」	(15)
天正12年8月24日	「わち川原二船繋(繋力)候する入江候由」其邊二村を仕立」	(16)	
天正12年10月29日～ 11月24日	天正12年11月16日	「野久尾之口之普請させ也」	
	天正12年11月17日	「厩作せ候番匠なとへも御酒二而慰候」	
天正12年12月16日～ 天正13年1月27日	天正12年12月20日	「和知川原へ新町立させ候」	
	天正13年1月1日	「城内之衆廿人計二三献参会候」	(17)
	天正13年1月17日	「庭二かゝりの松なと裁させ」茶湯之座見越二常盤木なと種々裁させ」	(18)
天正13年3月8日～ 4月21日	天正13年3月11日	「久馬共留守にて不乗候間、庭乗なとさせ候」	
	天正13年1月18日	「町口普請之談合共申候、様子なと普請奉行へ見せ申候」	
	天正13年1月21日	「町口普請させ候」	
	天正13年4月20日	「谷口和泉拯三男、日州居留同前二城戸之番等させ」	(19)
天正13年5月20日～ 閏8月5日	天正13年5月22日	「此方風呂焼せ候て、城内之衆中又者拙者悴者共寄合、入候て慰候」	
	天正13年5月24日	「終日若衆達碁・将碁・双六」水流之普請なとも申付させ候」	
	天正13年6月16日	「内城へ然と候へ」若衆中内城庭にて鞠也」	(20)
	天正13年7月2日	「此日、弓場普請アリ」	
	天正13年7月5日	「掃地・普請させ候」	
	天正13年7月18日	「城之草払させ候て見申候、岸切せ候処も候、然者已上普請也」	(21)
	天正13年7月19日	「此日も草払、昨日一日にハ不事候間、普請させ候」	
天正13年閏8月5日	「城戸建させ候」	(22)	
天正13年10月20日～ 天正14年1月4日	天正13年10月26日	「從其直二町口普請させ候」	
	天正13年11月29日	「普請なとさせ候」	
	天正13年11月30日	「町口垂なと立させ、普請させ候」	(23)
天正14年1月27日～ 2月16日	天正14年1月28日	「此日、終日普請見申候」	
	天正14年2月9日	「柏田口普請之下知共申付置」	
	天正14年2月13日	「衆中各普請二被出候間、直二普請見申候」	
天正14年3月1日～ 5月27日	天正14年4月17日	「此日、金丸江(口)普請、終日させ候」	
	天正14年4月29日	「金丸口普請させ候」	

(註)表中の番号(1)～(23)は、巻末に掲載した史料編の番号を記した。

請」であろう。翌日の記事に「殊之外洪水也」とあるので、大雨に備えて、もしくは大雨の影響を受けての水路の「普請」と分かる。これら「山城のメンテナンス的」（若山 2002）な「普請」の多くは、6月～7月に集中する。草払いや登城路・切岸・水路の手入れが山城の機能維持にとって重要な作業であったことがわかる。

#### 【引用・参考文献】

- 桑波田興 1958 年「戦国大名島津氏の軍事組織について」『九州史学』第 10 号（福島金治編『島津氏の研究』戦国大名論集 16、1983 年に再録）
- 千田嘉博 2004 年「戦国期の城下町構造と基層信仰 上井覚兼の宮崎城下町を事例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 112 集 国立歴史民俗博物館
- 宮崎県編 1990 年『宮崎県史』史料編 中世 1 宮崎県
- 宮崎県編 1994 年『宮崎県史』史料編 中世 2 宮崎県
- 若山浩章 2002 年「中世城郭の普請と作事 - 『上井覚兼日記』に見られる宮崎城の普請と造作を中心に -」『宮崎県地方史研究』第 15 号 宮崎県地域史研究会

### 第 3 節 南九州における宮崎城跡の位置付け

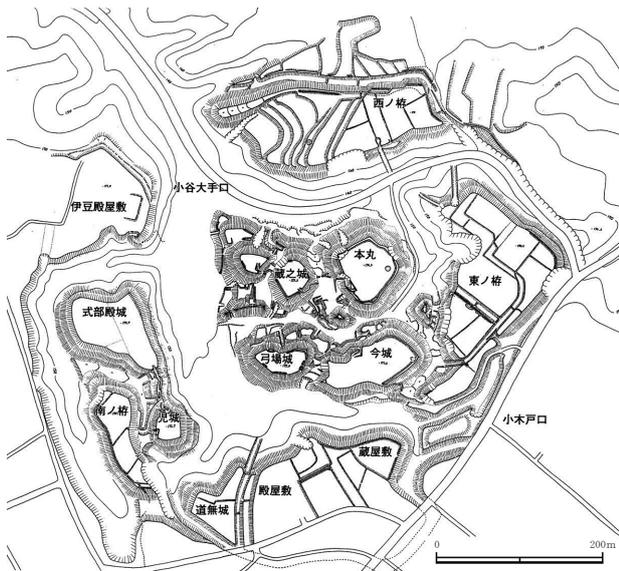
#### (1) 南九州の群郭式城郭と宮崎城

宮崎・鹿児島県域および熊本県南部のいわゆる南九州では、拠点城郭を中心として特徴的な縄張を持つ一群がある（第 47 図）。鹿児島県の知覧城跡や清色城跡、志布志城跡、宮崎県では都於郡城跡や都城跡などを典型例とし、多くはシラス台地の端部に占地する。城域内に大規模な空堀を縦横に入れ、もとが台地であるがゆえに主郭を含む各曲輪間に顕著な高低差が生じず、等高の曲輪が群島状になってひとつの城郭を形成する。この構造はやわらかく人力での加工が比較的容易なシラス土壌の台地が卓越するという南九州の地質的な要因によるところが大きい。

これら南九州に特徴的な山城については、村田修三氏による「辺境型」・「南九州型」（村田 1987）、千田嘉博氏による「九州館屋敷型城郭」（千田 2000）、中井均氏による「南九州型城郭」（中井 2016）等、複数の研究者により多種の名称が提起されているが、近年では「群郭式」の呼称に落ち着いている（南九州城郭談話会・北部九州中近世城郭研究会編 2013、吉本 2018）。以下ではこの南九州の群郭式城郭と宮崎城跡の関係について検討してみたい。

まず宮崎城跡の縄張について、千田氏は「南九州の典型的な中世城郭の形態」とし（千田 2004・2009）、八巻孝夫氏は「典型的ではないにしろ群郭式城郭の範疇に入ることになる」としている（八巻 2013）。宮崎城跡はほぼ等高の曲輪が丘陵上に並び、主郭が見た目にも明らかな高位を占めず、曲輪間の連携性が低い。このような縄張はまさに群郭式城郭の特徴であるが、縦一列の曲輪配置はいわゆる群島状ではなく、南九州の群郭式城郭として典型的な構造とは言い難い。

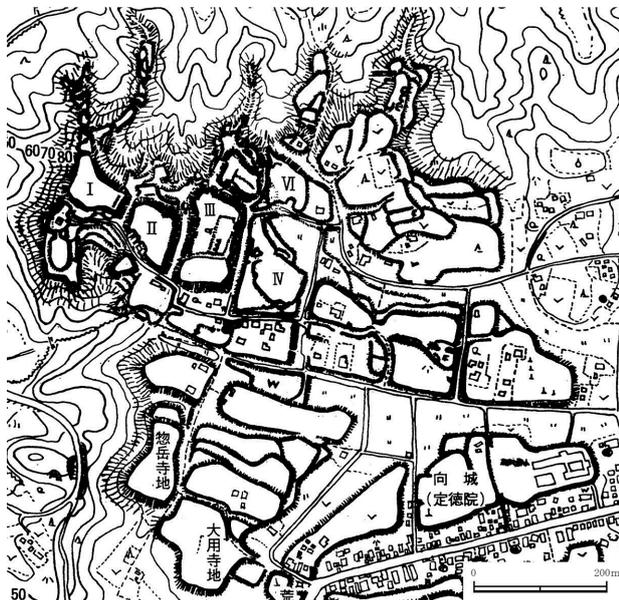
地質としては、山体の大半が四万十累層群の上に堆積した泥岩と砂岩の互層からなる宮崎層群と呼称される岩盤層によって構成される。その上部に更新世の河川作用で形成された拳大から人頭大の円礫層が数m堆積し、さらにその上に全体から見ればわずかばかりのシラス土、ローム土等が載る。現況の堀切壁面を観察する限り、曲輪をつくり出す普請の中心は、岩盤層より上の円礫層以上において



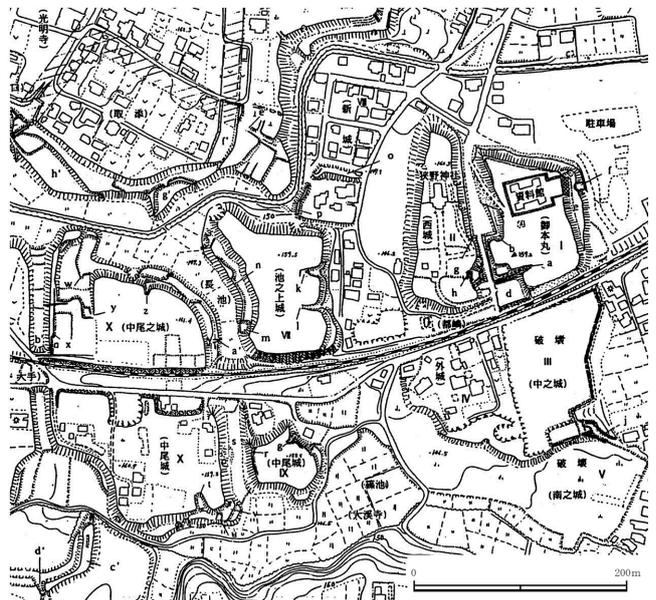
鹿児島県知覧城跡



鹿児島県清色城跡



宮崎県都於郡城跡



宮崎県都城跡

### 第 47 図 南九州の群郭式城郭諸例

※知覧城跡縄張図（知覧町教委編 2006）：千田嘉博氏作成、清色城跡縄張図（三木 2005）：三木靖氏作成、  
都於郡城跡縄張図（宮崎県文化課編 1999）：八巻孝夫氏作成、都城跡縄張図（都城市史編さん委編 2006）：八巻孝夫氏作成

おこなわれている。礫層において堀切等の造作をおこなうには、日常的なメンテナンスを含め多大な苦勞をともなったものと思われるが、シラス土を主体としない山体に築かれていることは、典型的な南九州の群郭式城郭と異なる点である。

つまり縄張、地質ともに、宮崎城跡は南九州における大型拠点城郭としてややイレギュラーな山城と言える。しかしその歴史を見ると、戦国期の伊東氏時代は家督候補の伊東祐吉が居所とし、同じく当主義祐が数年間在城するなど、本拠都於郡城に次ぐ重要拠点として位置付けられている。さらに戦国期末の島津氏時代には老中上井覚兼の居城として、日向国経営の中心的存在であった。このように日向国における最重要拠点として機能した理由については、宮崎城が宮崎平野南部を一望し、九州第



写真6 平成30年台風第24号の被害で剥き出しになった佐土原城跡の岩盤斜面

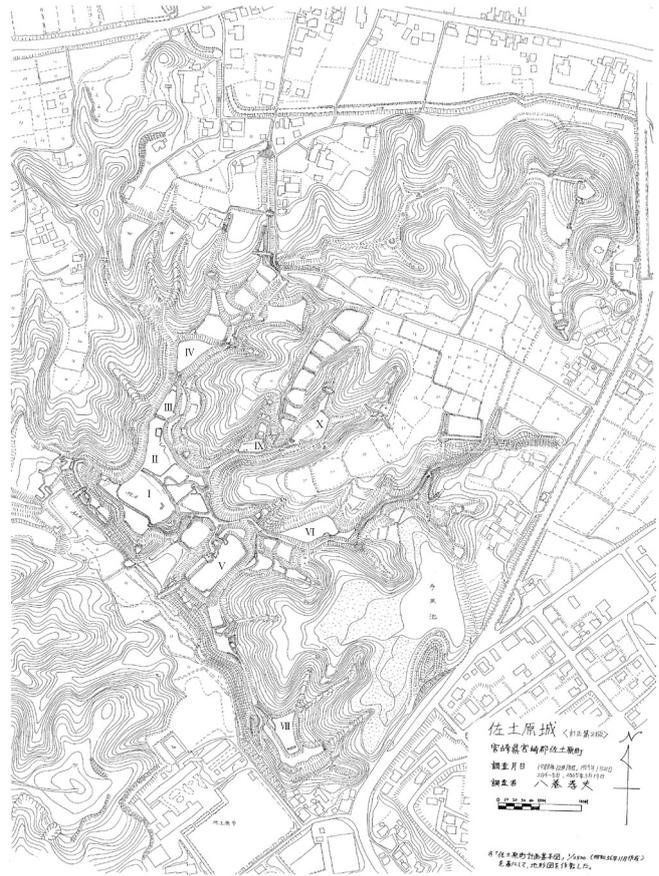
2の大河大淀川を臨む位置にあるという地域支配の拠点としての地政学的要因が大きいと思われる。

しかしながら軍事施設としての城郭という点で考えると、群郭式城郭の運用に長けていたであろう南九州諸勢力が最重要拠点として使用し続けたからには、宮崎城は一見イレギュラーな構造ながら、南九州世界で城郭に求められた必須の構成要素を十分に兼ね備えていた

ものの可能性がある。これを考える上で重要なのは、中井均氏による「切岸こそが山城にとって最大の防御施設」であり「登らせないことが最大の防御」との指摘である（中井2016）。氏は「その究極の切岸が南九州の城に見られる」として、南九州の群郭式城郭における垂直に削り込まれたシラスの切岸を重要な防御的要素と評価している。

これを踏まえて宮崎城跡を見ると、宮崎層群の岩盤による山体は、一見、垂直に近く削り込む切岸の造作が困難で、上記の要素を持った南九州の群郭式城郭に匹敵する軍事施設とはなり得ないようにも思える。しかしながらこの岩盤斜面は本来的に一面平滑で角度を持ち、人工で加工するまでもなく敵の登坂を阻む強力な防御施設となりうる。つまり宮崎城は岩盤による山体斜面を防御の要とし、その要素において南九州の拠点城郭として必須の要件を満たしていたと理解することができる。同様な地質条件と歴史的位置付けを持つ城郭として、宮崎城跡から直線距離9kmの北に位置する佐土原城跡（宮崎市佐土原町）がある（第48図）。同城は伊東氏の全盛時代を築いた義祐の居城であり、島津氏時代には当主末弟家久の居城となった、南九州の歴史上に果たした役割の大きな山城である。地質的には宮崎城跡と同じく宮崎層群の岩盤が山体の主を占める丘陵に占地し（写真6）、この岩盤斜面の持つ防御力ゆえに重要拠点として存続し続けたものと考えられる。

つまり南九州においては山体斜面自体が高い防御力を持つことが、拠点城郭に求められた重要な構成要素だったと言える。先の節に見た縄張の機能分化と同様、宮崎城跡は典型的なシラスではない地質条件であるがゆえに、かえって南九州で重視された築城上の理念が尖鋭化して縄張に表れたものと



第48図 佐土原城跡縄張図  
（佐土原町教委編2005より転載）

も理解できる。むしろこのようなイレギュラーな存在から見ることで、典型例からは見えにくい南九州の城郭が持つ特質をより浮き彫りにできるものと思われる。

## (2) 織豊期の宮崎城

織豊期という時期の実年代については、長く見積もれば永禄11年(1568)の足利義昭を奉じた織田信長の入京から、慶長20年(1615)の豊臣氏滅亡(大坂夏の陣。同年元和に改元し、一国一城令が布告)までとされている(高田2017)。以下では、南九州の城郭に織豊系城郭の影響が見出される(城郭ごとに影響の有無、多寡の別はある)のは豊臣秀吉の九州平定以降と捉え、天正15年(1587)から慶長20年までの期間を織豊期、これ以前を戦国期と表現する。

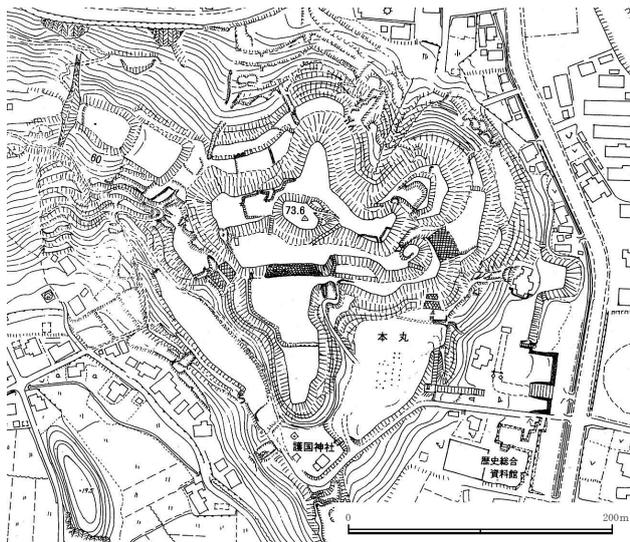
織豊期における宮崎城は延岡(縣)高橋氏の支城である。当時宮崎と呼ばれたこの地は、本拠延岡から間に複数の他領を挟んだ飛び地であったが、高橋氏領の総石高5万3千石のうち2万石を占める(宮崎県編2000)重要な地であった。直線距離70kmの南に位置するこの遠隔地の支配について、高橋氏は宮崎城を当該地唯一の支城としてこれにあたった。宮崎城は同時に、北の佐土原島津氏領、西の薩摩島津氏領、南の飫肥伊東氏領に対する境目の城という役割も担っていた。

当時の高橋氏は、北部九州で威を張った戦国大名秋月種実の次男元種を当主とする(一万田系高橋氏)。父とともに豊臣秀吉の九州征伐に抗戦したのち降伏し、天正16年(1588)、豊前国香春(福岡県)から日向国延岡(当時縣)に移封した。縄張研究において、戦国期の秋月氏は北部九州で多用された畝状空堀群を核として発展させた技巧的な縄張を創出し、勢力圏内(一門・同盟勢力)の拠点城郭で共有・展開させたと分析されている(木島・中西1998、中西2017)。高橋氏の福岡県香春城跡でも畝状空堀群に土塁が組み合わされ、秋月氏主導とされる縄張を持つ城郭群の一翼を担っている。

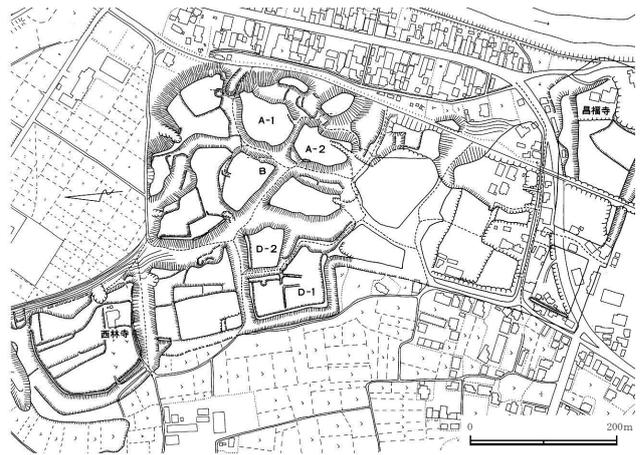
しかし、日向国移封後の秋月・高橋氏は畝状空堀群を使用した形跡がない(第49図)。秋月氏は種実の嫡男種長が当主として日向国高鍋(当時財部)に移封されるが、その本城高鍋城(宮崎県高鍋町)、支城櫛間城(宮崎県串間市)に畝状空堀群は用いられていない。同じく高橋氏も、移封直後の本城松尾城(宮崎県延岡市)では現在までのところ畝状空堀群が未確認であり、慶長6年(1601)から築城を開始した延岡城(同)も同様である。当然ながら、その支城宮崎城にも畝状空堀群は認められない。

八巻孝夫氏は、宮崎城跡に畝状空堀群が構築されていない理由について、当該期の倭城の様相をひき、この時期には既に畝状空堀群は使用されていなかったとする(八巻2013)。あるいは宮崎城跡をはじめとする南九州の城郭が、先に見た山体斜面における高い防御力を本来的に兼ね備えていたため、あらためて斜面に畝状空堀群を構築する必要性を認めなかったのかもしれない。その場合、「大名系城郭」の検討事例として挙げられる特徴的な縄張を構築した戦国大名権力もこれに固執したわけではなく、地域性(この場合は地質)に応じて城郭を運用したと言える。城郭の改修についての中央政権による規制の存在も念頭に置くべきであるが、ともあれ戦国期の北部九州で特定のパーツに特徴付けられる城郭群を形成していた秋月・高橋氏が、織豊期に移封先の南九州においてどのような形態の城郭運用をおこなったのかという視点も、「大名系城郭」の議論を深める上で重要であろう。

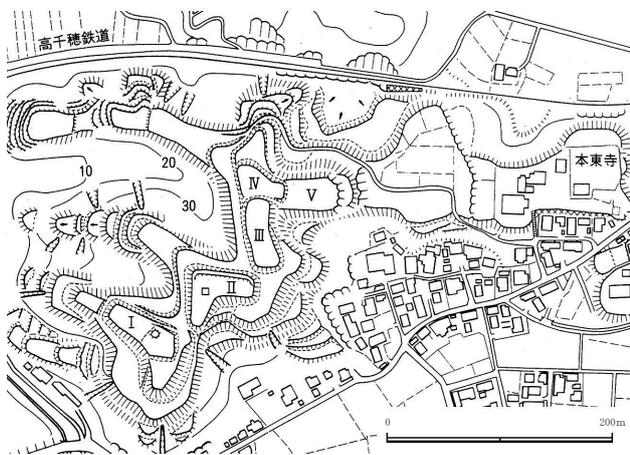
宮崎城跡では織豊期の城郭を特徴付ける要素のうち、石垣や天守相当施設は現在までのところ確認できず、一方で瓦葺建物は存在した可能性が高い。他地域の例として、豊臣政権下の蒲生氏領会津と、関ヶ原の合戦後の堀尾氏領出雲・隠岐では支城が天守級建物、石垣を備えながらも、瓦を持っていな



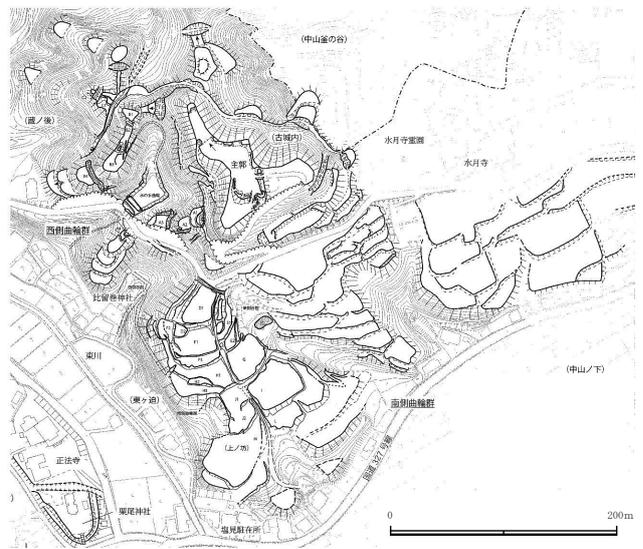
高鍋城跡（秋月氏本城）



楯間城跡（秋月氏支城）



松尾城跡（高橋氏本城）



塩見城跡（高橋氏支城）

### 第 49 図 日向国移封後の秋月・高橋氏の本城と支城

※高鍋城跡縄張図（宮崎県文化課編 1999）：八巻孝夫氏作成、楯間城跡縄張図（宮田・東 1994）：千田嘉博氏作成、松尾城跡縄張図（宮崎県文化課編 1999）：甲斐典明氏作成、塩見城跡縄張図（宮崎県埋せ編 2012）

かったと分析されている（中井 2017）。宮崎城跡とは正反対の様相であるが、石垣は重量を持った建物を支えるとともに防御に有利なよう地形を改変できる構築物であり、天守はシンボルであると同時に、高所から攻め手を押さえ、文字通り最後の砦ともなりうる構造物である。つまり、会津と出雲・隠岐の支城は軍事に重きを置いたパーツの選択がなされ、宮崎城の場合はこれらとは反対に、織豊的要素の導入にあたって軍事に重きを置いていないと言える。

瓦は耐火性に優れた戦闘時の防御に有効な建築部材であるが、あくまで漆喰壁とそれらの重量を支える石垣の組み合わせによってこそ有事において実用的に機能するものであろう。蒲生領、堀尾領では、個々の大名の政策によって瓦の有無に本城と支城の格差を表出したとされる（中井前掲同）。これに沿えば、織豊期の城郭における瓦はすぐれた権威の表象ととらえられるし、耐用年数の長い瓦は永続的支配の象徴にもなりうるものであろう。その瓦のみを導入した宮崎城が織豊的要素に期待したのは、政治的シンボルとしての機能であったと理解できる。

支城における瓦葺建物の存在について、宮崎城と同じく瓦をともなう慶長期福島領（広島県）の支城群では、瓦をのぞく遺物の出土が僅少であることから、支城は居住をともなう日常的な存在ではなく、あくまで非常時のみに機能する軍事施設として整備されていたとの分析がなされている（高田1995）。しかし宮崎城跡の場合は、今回発掘調査により慶長5年（1600）の落城戦以降に形成された可能性の考えられる面で献杯儀礼の痕跡が確認されており、城郭としての最終段階まで日常的に使用されていたと見られる。つまり織豊期における支城宮崎城は、有事のみに機能する軍事施設ではなく、日常的な地域支配の拠点として機能していたと考えられる。

戦国期末の島津氏に代わって宮崎を領有することとなった高橋氏は、宮崎城について地域支配の拠点という機能をそのままに踏襲した。そして新時代の支配者としての権威を高めるため、前時代には存在していなかった瓦葺建物という新種の建造物を山城の上に現出させた。その視覚的効果は極めて高かったものと思われる。

### （3）関ヶ原の合戦と宮崎城

慶長5年（1600）9月晦日の夜、延岡高橋氏の支城宮崎城に飢肥伊東氏が攻めかかった。これは9月15日の関ヶ原の合戦に連動したもので、西軍方について高橋氏と、東軍方として活動することとした伊東氏による、日向国という地方での戦いであった。宮崎城は10月1日明け方に落城し、城代権藤種盛も戦死した。しかしこの時点で、美濃大垣城（岐阜県）にあった高橋家当主元種はすでに東軍方に寝返り許されていたため、宮崎城戦の実際は東軍陣営の同士討ちであった。悲劇的色彩の強いこの事件は、現在でも地域の人々が宮崎城跡にまつわり大切に語り伝えているエピソードである。

飢肥伊東氏の家譜『日向記』では、総数3千の伊東勢が夜陰に紛れて攻め寄せ、その先鋒のみが上げた声によって敵の実数を見誤った宮崎城側（史料により3百とも6百とも言う）が籠城という当初の方針を捨てたため、落城に至ったとされている。これに沿えば、宮崎城落城の原因は伊東氏側の戦術が優れていたためということになるが、あくまで二次史料の記述であり、イコール歴史事実ということではない。当時、実際の現場でもこのような戦術上の駆け引きがあったであろうことは想像に難くないが、現在の我々にそれを検証する術はない。ここでは城郭研究の視点で、当該期の宮崎城という存在そのものに、落城に至る根本的な原因が無かったかを考えてみたい。

先に述べたとおり、宮崎城は延岡高橋氏が飛び地宮崎に設置した唯一の支城であった。高橋氏領全体で見れば、本城から直線距離で20kmの南に位置する日向市塩見城跡も、関ヶ原の合戦前後まで機能していた可能性が近年の発掘調査により示されているが（宮崎県埋せ編2012）、宮崎平野に設置された支城は宮崎城のみである。この支城設置数の少なさは、戦国大名が中央政権の存在を背景として家中の支城主層を削減し、自らに権力を集中させて近世大名化するという全国的な動向に沿ったものである。つまり唯一の支城宮崎城という存在は、政治的には織豊期という時代の流れに則ったものと言える。これは宮崎城が、織豊的な要素のうち政治的なシンボルであることを期待した瓦葺建物のみを導入したという先の考察とも符合する。

その一方で、宮崎城は石垣や天守相当施設を導入しなかったため、軍事施設としては前時代の中世山城そのままの姿であったと言える。中世以来の山城合戦においては、攻城軍に城外から攻め掛かる籠城側援軍の存在がセオリーである。南九州においても、やや時代が遡るが15世紀の史料の分析か

ら、「後巻」と呼ばれる城方への援軍が籠城戦の勝敗を決したという図式が明らかとなっている（高橋 2015）。つまり軍事的に「中世山城」である宮崎城は、有事にあたっては援軍の存在を必須とした。しかし同時に、本拠から遠く離れた飛び地に唯一設置された支城であったため、周辺からの即時の援軍は望みようがないという矛盾した条件下にあったということになる。

以上を見ると織豊期における宮崎城は、城郭が持つ政治的な面と軍事的な面とがアンバランスな存在になってしまっていたと言える。前時代的な中世山城のまま、織豊的な支城体制の中で存続したことが有事における落城という結末を招いてしまったものかと考えられる。慶長5年の宮崎城落城は、中世から近世へと時代が大きく移り変わる過渡期ならではの出来事だったのではないだろうか。地方における城郭発展史上の歪みが出たとしても言うべき事象であり、我が国における城郭の変遷を検討する上でも注目すべき、重要な事例と言えよう。

#### 【引用・参考文献】

- 木島孝之・中西義昌 1998年「天正中・後期の北部九州における城郭の様相」『戦国の城と城下町Ⅱー鳥栖の町づくりと歴史・文化講座ー』鳥栖市教育委員会
- 佐土原町教育委員会編 2005年『佐土原町の中・近世城館』佐土原町教育委員会
- 千田嘉博 2000年『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
- 千田嘉博 2004年「戦国期の城下町構造と基層信仰 上井覚兼の宮崎城下町を事例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集 国立歴史民俗博物館
- 千田嘉博 2009年「宮崎城の構成」『宮崎城跡測量調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第75集 宮崎市教育委員会
- 高田 徹 1995年「慶長期における本城・支城構造ー福島・毛利領を中心としてー」『中世城郭研究』第9号 中世城郭研究会
- 高田 徹 2017年「織豊系城郭とは何か」『織豊系城郭とは何か』サンライズ出版
- 高橋典幸 2015年「南北朝・室町期南九州の城郭ー『山田聖栄自記』よりー」『城館と中世史料ー機能論の探求ー』高志書院
- 知覧町教育委員会編 2006年『知覧城跡』（三）鹿児島県知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 知覧町教育委員会
- 中井 均 2016年『城館調査の手引き』山川出版社
- 中井 均 2017年「支城」『織豊系城郭とは何かーその成果と課題ー』サンライズ出版
- 中西義昌 2017年「『大名系城郭』概念と織豊系城郭」『織豊系城郭とは何かーその成果と課題ー』サンライズ出版
- 村田修三 1987年「城の分布」『図説中世城郭事典』第3巻 株式会社新人物往来社
- 三木 靖 2005年「薩摩国清色城の「縄張図」」『南九州城郭研究』第3号 南九州城郭談話会
- 南九州城郭談話会・北部九州中近世城郭研究会編 2013年『九州における群郭式城郭の登場と展開』合同研究大会資料集
- 都城市史編さん委員会編 2006年『都城市史』資料編 考古 都城市
- 宮崎県編 2000年『宮崎県史』通史編 近世上 宮崎県
- 宮崎県文化課編 1999年『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』Ⅱ詳説編 宮崎県教育委員会
- 宮崎県埋蔵文化財センター編 2012年『塩見城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第210集 宮崎県埋蔵文化財センター

宮田浩二・東憲章 1994 年「宮崎県南部における中世城郭の一例」『宮崎考古』第 13 号 宮崎考古学会  
八巻孝夫 2013 年「日向国・宮崎城の基礎研究」『中世城郭研究』第 27 号 中世城郭研究  
吉本明弘 2018 年「南九州のシラス台地に築かれた謎の城郭群」『中世島津氏研究の最前線』洋泉社

## 第4章 まとめ

宮崎城跡は中世動乱の時代に諸勢力争奪の舞台であった宮崎平野の南半中央に位置する。九州第2の流域面積を誇る大淀川の下流北岸において、海岸部から内陸丘陵地帯の縁辺までを一望する標高90 mの尾根上に築かれ、古くからの主要道が近接するその立地は、水運と陸運を掌握するに適した要衝の地と言える（第1章第1節）。14世紀前半の南北朝の争乱にともなって史料上に初出する、県内でも最古の城郭のひとつである。以降の室町期、戦国期においては伊東氏、島津氏と領有が変わる中でも宮崎平野の重要拠点として機能し続け、織豊期には延岡（縣）を本拠とする高橋氏、有馬氏の支城となって、元和元年（1615）の一国一城令で廃城に至ったと考えられる（第1章第2節）。

この300年近くにわたる歴史の中で最も光芒を放つのは、天正8年（1580）から7年間宮崎城を居城とした島津家老中上井覚兼による『上井覚兼日記』の存在であろう。宮崎城跡はこの日記から当時の城内の様子や城主自身の動向を具体的に知ることができる、山城として全国的に見ても稀有な存在と言える。宮崎城跡に関する近年の研究動向として、この『上井覚兼日記』の分析を主軸とした史料研究が継続しておこなわれており、本書でも宮崎城の構造に関する記事を中心に考察を加えたところである（第3章第2節）。原本が残る同史料は戦国大名の重臣自らが記した日記として希少なものであり、当時の政治・文化の実態を伝える一級資料である。そしてその舞台である宮崎城跡は、南九州の戦国期研究において極めて重要な位置を占めると言える。

本書に報告した初の考古学的調査である平成29・30年度調査では、主郭（曲輪Ⅰ）、百貫城（曲輪Ⅱ）、野首城（曲輪Ⅲ）、彦右衛門城（曲輪Ⅴ）、服部城（曲輪Ⅷ）の主要5曲輪に計10ヶ所のトレンチ・調査区を設け、全体的に遺構・遺物が良好な保存状態にあることを確認した（第2章）。主郭では瓦とともに多量の焼土、炭が含まれる埋め立て土が検出されたが、これは慶長5年（1600）の飢肥伊東氏による宮崎城攻城戦後の曲輪面改修の可能性が考えられる。この造成面上では土師器坏が集中して出土し、出土状況から実年代を絞り込めるため在地土器編年の検討において重要な資料となる。また主郭をはじめ多くの曲輪で瓦が確認されたが、南九州ではコビキAからBへの技法転換期の実年代検討をはじめ、織豊期における瓦の研究がほとんどなされていないのが現状である。宮崎城跡の瓦にはA・B両種が認められ、Aのものには古相の技法である凸面縄目タタキが施される。南九州における城郭瓦導入期の様相を検討する上で重要な資料と言える。

この瓦について本書では高橋氏の支城であった当該期の宮崎城は、織豊期の城郭を特徴付ける複数の要素の中から権威の表象として瓦を選択したと考察した（第3章第3節）。くわえて先に述べた主郭における土師器坏群の集中出土は、資料そのものに灯火具として使用された痕跡が希薄なため献杯儀礼にともなうものと思われるが、織豊政権下ではかわらけによる武家儀礼が廃れると分析されている（松井2017、鈴木2017）。これに反する宮崎城跡主郭の様相は、地方が中央発信の織豊文化を一律に受容したわけではなく、一定程度の主体的な「選択」をおこなっていたと見ることもできる。また先に触れた慶長5年（1600）の落城について、本書ではその根本的原因を宮崎城は当該期の城郭として政治面と軍事面がアンバランスな存在になってしまっていたためと考察した（第3章第3節）。先の瓦、献杯儀礼とあわせ、織豊期における地方の実態を検討する上で重要な事例であろう。

縄張については千田嘉博氏、八巻孝夫氏による研究があり、本書では両氏の論考をもとにその詳細を改めて整理した（第3章第1節）。宮崎城跡の縄張は主郭と他の曲輪が顕著な高低差を持たずに並

列する、南九州に特徴的な群郭式城郭の範疇に含まれる。ただし岩盤・礫層を山体の主とする丘陵上に曲輪が縦一列で並ぶ宮崎城跡の縄張は、シラス台地の一定範囲に空堀を縦横に入れて群島状の曲輪群をつくり出す群郭式城郭の典型的なあり方とは大きく異なる。これはシラスの北限でその堆積が薄い宮崎平野に立地することが大きいと思われるが、そのイレギュラーな地質条件ゆえにかえって南九州で拠点城郭に求められた築城理念が尖鋭化して表れている可能性がある。全国的に見ても極めて特徴的な構造を持ち議論の続く南九州の山城について、その構造や性格を解明する上で重要な鍵を握る存在ではないかと思われる。

南九州の群郭式城郭はやわらかく加工し易いシラス土壌を掘り込んで構築された大規模な空堀が目を見くが、中井均氏はむしろ空堀の壁面である垂直に近く切り立った曲輪切岸こそがその最大の特徴であり、「究極の切岸が南九州の城に見られる」と表現している（中井 2016）。これを踏まえて宮崎城跡を見ると、その山体はシラスではなく宮崎層群の岩盤を主とするが、この岩盤斜面そのものが一面に平滑かつ垂直に近い角度を持ち、斜面をよじ登るのはまず不可能と言ってよい。つまりシラス、岩盤と地質条件が異なっても、山城の斜面そのものが敵を阻む防御力を持つことが中世の南九州で城郭に求められた重要な要素であったと考えられる（第3章第3節）。くわえて宮崎城跡の縄張には各曲輪が政治・居住・軍事に特化した明瞭な機能分化が見て取れ、これらが主郭を中心として計画的に配置されている（第3章第1節）。同様な機能分化に基づく曲輪配置が南九州の他の城郭でも見出されないかを改めて見直す必要があるが、これは南九州における権力構造の議論にも発展するものであろう。

以上に列挙したように、宮崎城跡は南九州の中世史、城郭史研究において極めて重要な存在である。特に『上井覚兼日記』とセットになった山城として、縄張・史料・考古学3分野総合の城郭研究を具体的なレベルで実現しうる可能性を持ち、宮崎城跡における調査・研究の進展は、そのまま南九州における同調査・研究の深化に直結すると言って良いであろう。ただし遺跡としての宮崎城跡は、永く現状での保護をはかっていくことが今後の方向性として第一義であり、当然ながら地下に保存される遺構・遺物についても無作為な発掘調査を実施すべきではない。明らかとすべき主題を絞り込んだ明確な目的意識を持つ調査に限定されるべきであり、拙速な成果を求めず複数次にわたる調査計画を立案し、その都度検討・考察を重ねながら長期的な視点を持って慎重に進めていく必要がある。

今回調査では華南彩の水滴片が主郭で出土した（第18図71、図版18）。あるいは上井覚兼その人がこの水滴で墨をつくり、夜な夜な灯火のもとで現在の我々が『上井覚兼日記』と呼ぶ日記を記していたのかもしれないと想像する。現段階では短絡的な空想に過ぎないが、この風景を実証するのも宮崎城跡における今後の調査・研究が持つ課題のひとつであろう。

#### 【引用・参考文献】

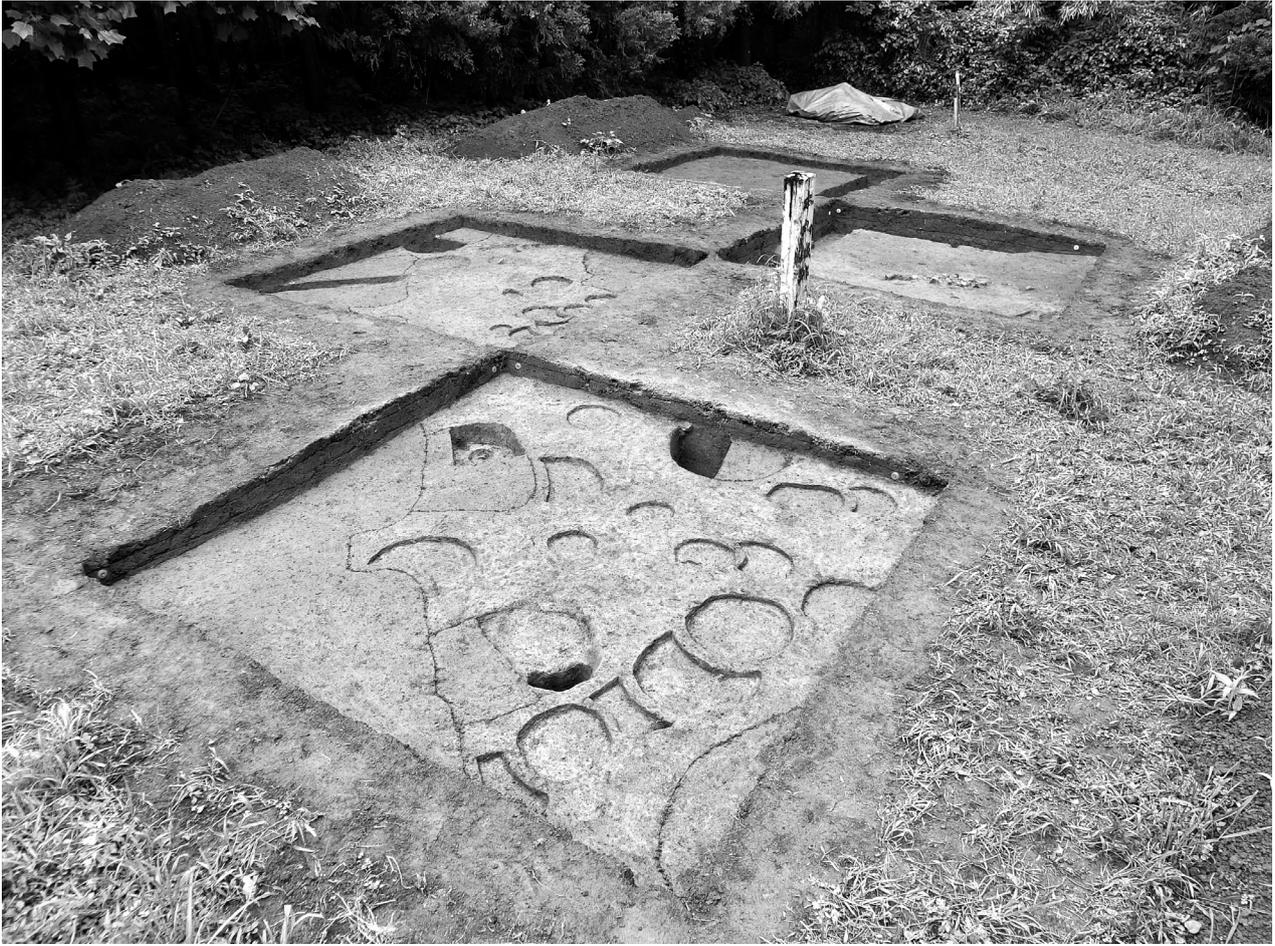
- 鈴木正貴 2017年「遺物組成およびそこからみる武家儀礼」『織豊系城郭とは何かーその成果と課題ー』サンライズ出版
- 中井 均 2016年『城館調査の手引き』山川出版社
- 松井一明 2017年「遺物から見た織豊系城郭」『織豊系城郭とは何かーその成果と課題ー』サンライズ出版



図版1 宮崎城跡遠景①（南より）



図版2 宮崎城跡遠景②（南より）



図版3 曲輪I調査区(手前H30-I D)



図版4 H30-I Bの土師器坏片出土状況



図版5 H30-I B 3層(人為的な埋め立ての可能性が高い褐色土)中の瓦片出土状況



图版6 H30—II A



图版7 H29—III A



图版8 H29—III B



図版9 H29-ⅢC



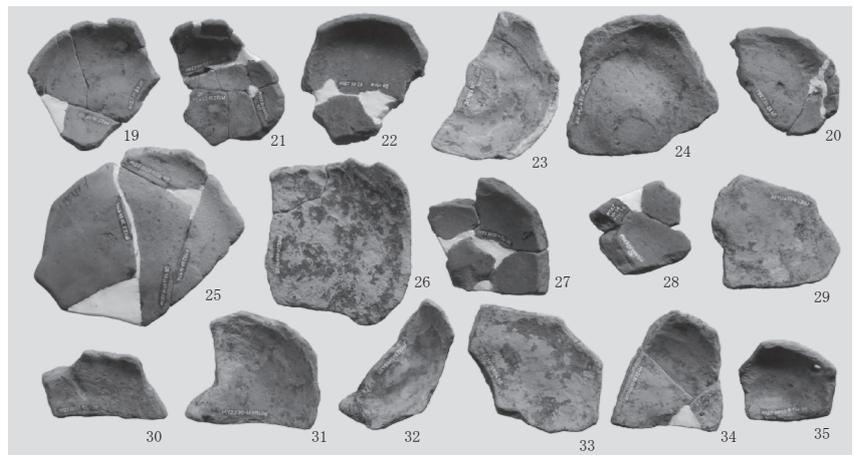
図版10 H30-ⅧA



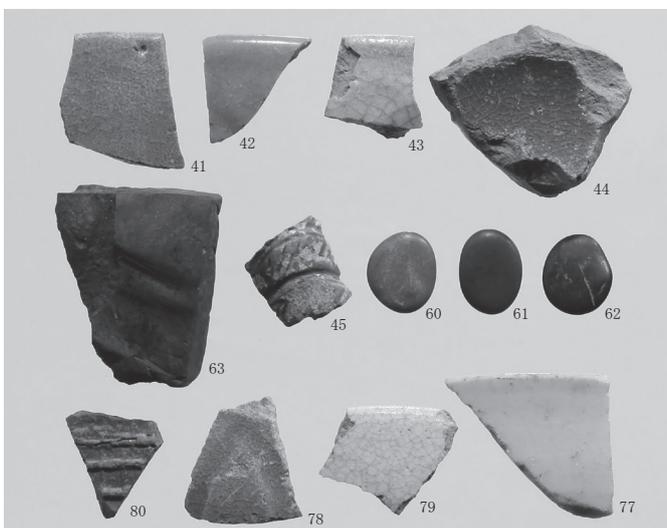
図版11 H30-V A (画面奥は土塁)



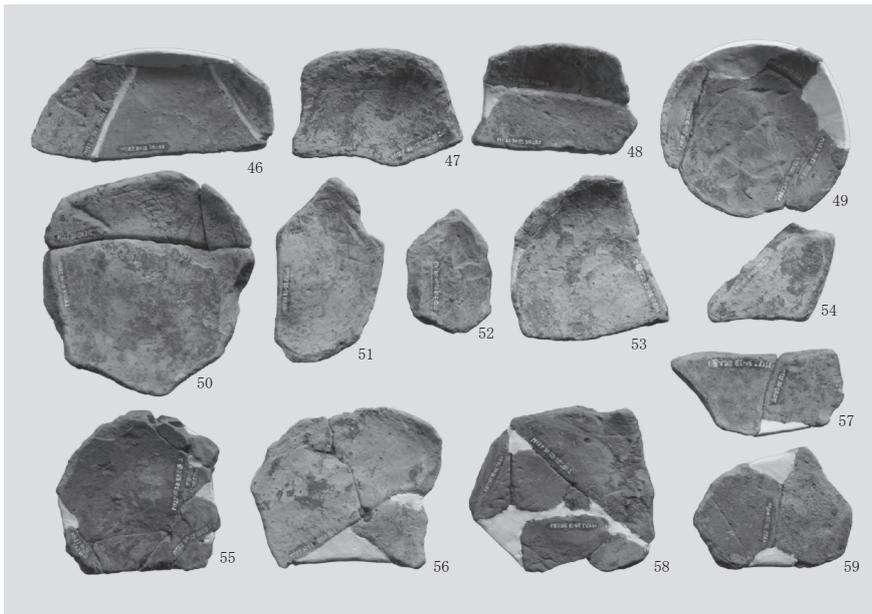
図版12 H30-  
I A出土遺物①



図版13 H30- I A出土遺物②



図版14 H30- I B出土遺物①および  
H30- I D出土遺物



图版15 H30-I B  
出土遺物②



图版16 H30-I B出土遺物③ ※64・65:表紙写真

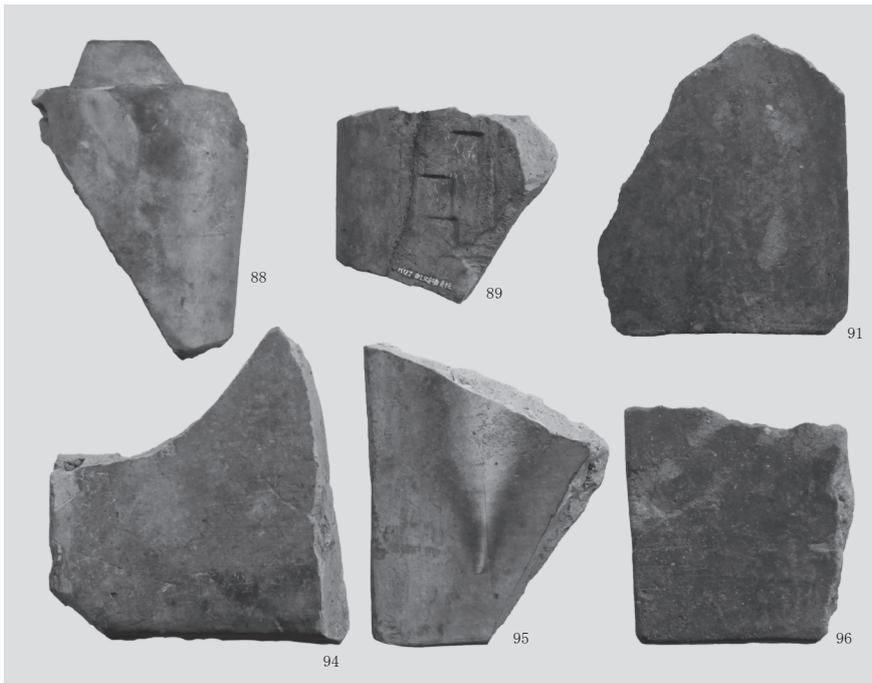
図版17 H30-I C  
出土遺物①



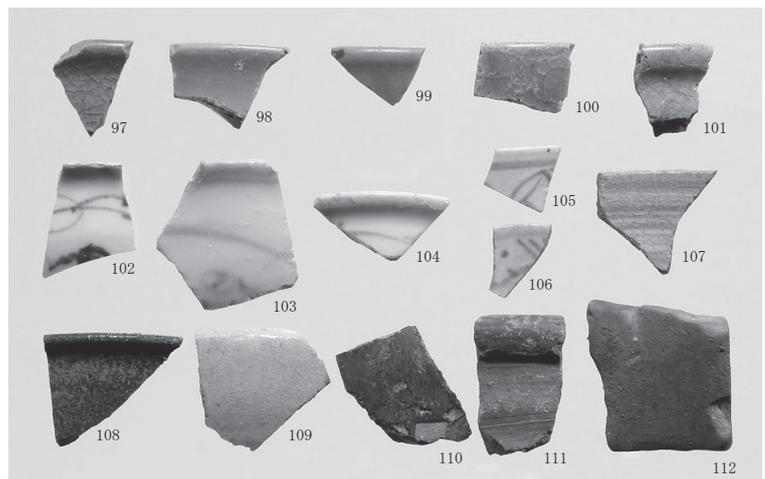
図版18 H30-I C  
出土遺物②



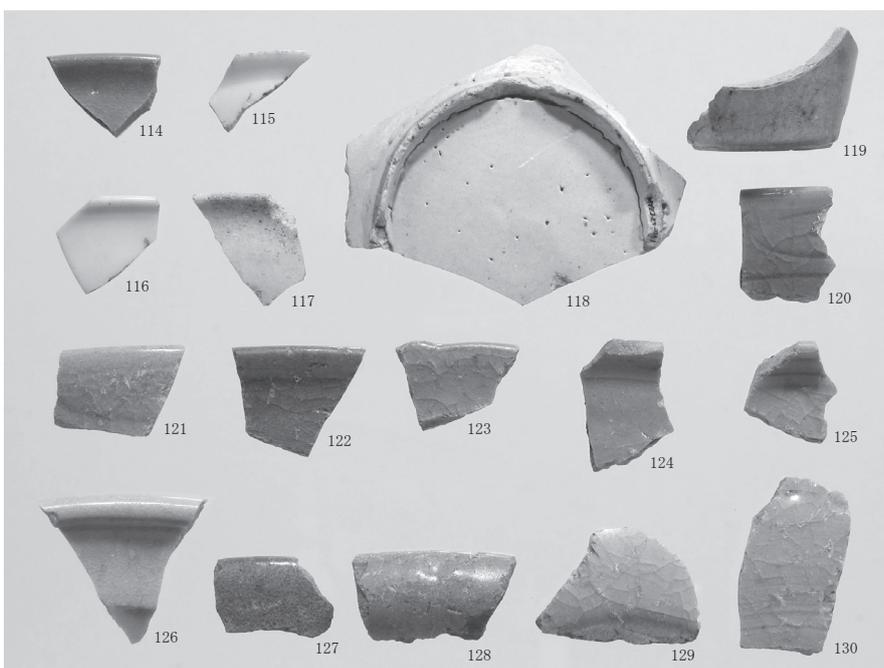
図版19 曲輪 I 表採遺物① ※81:表紙写真、82:中表紙拓本



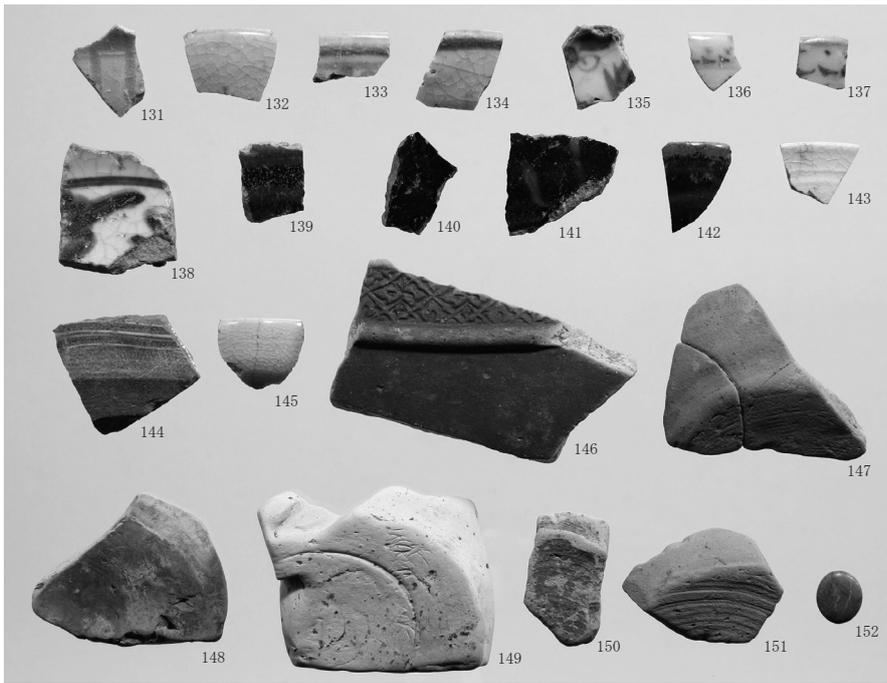
图版20 曲輪 I 表採遺物②



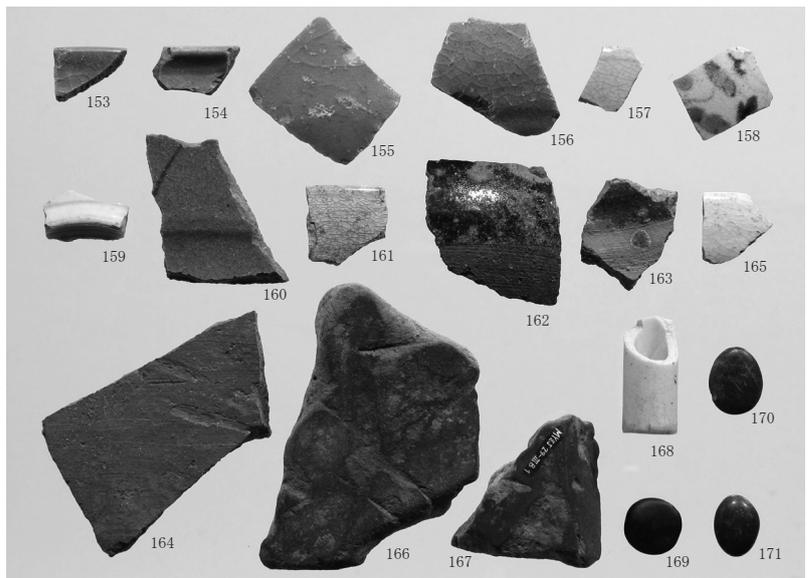
图版21 H30-Ⅱ A 出土遺物



图版22 H29-Ⅲ A 出土遺物①



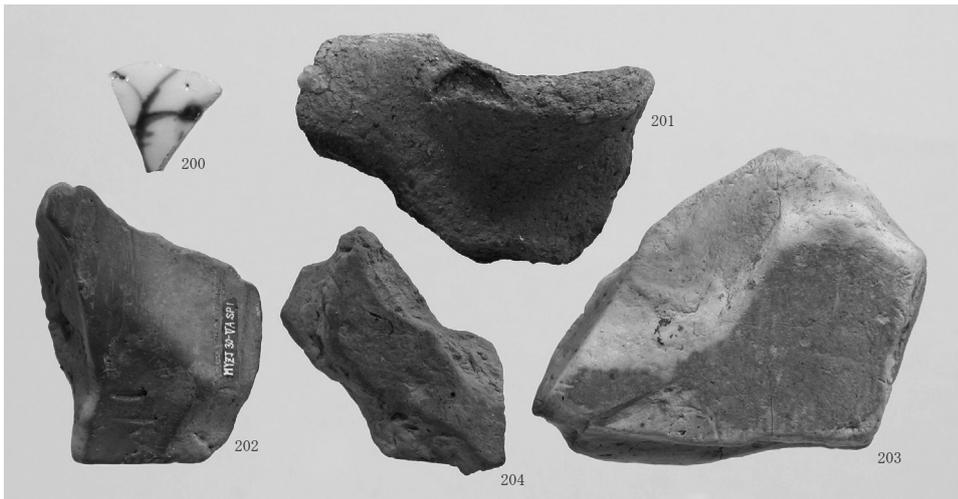
图版23 H29-ⅢA  
出土遺物②



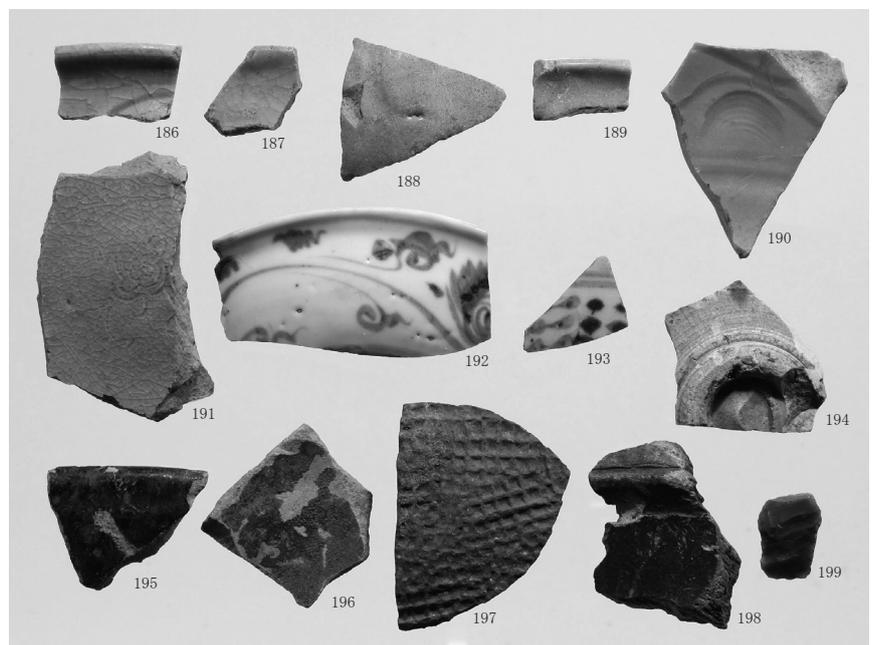
图版24 H29-ⅢB出土遺物



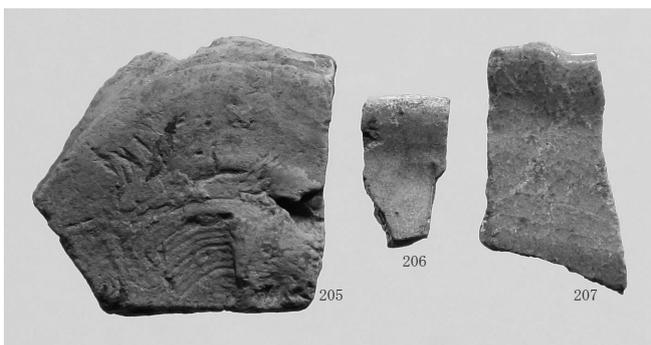
图版25 H29-ⅢC  
出土遺物



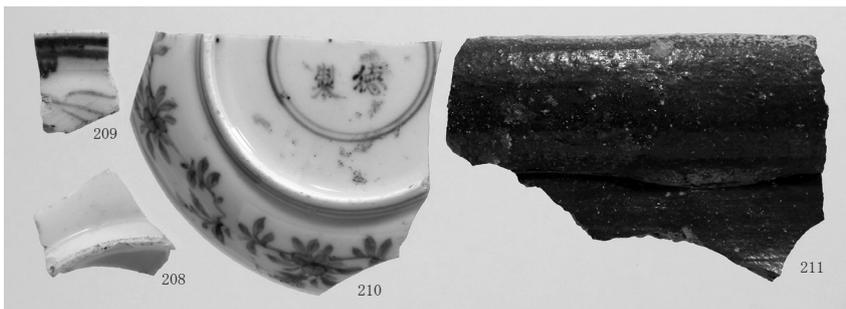
図版26 H30-V A  
出土遺物



図版27 曲輪皿表採遺物



図版28 H30-VII A 出土遺物



図版29 その他の表採遺物

### 三 近世以降の地誌など

(二) 日向地誌(平部嶺南著『日向地誌』より)

宮崎城墟

(以下割註)

本村ト上北方村トニ跨ル、故ニ古ノ記録ニハ池内城トモ云、其他群岡ノ表ニ挺立シテ高ニ十余丈、其嶺ニ登テ一眺スレハ宮崎近郡拾余里ノ勝躰ヲ一睫ニ収ム、岡項画テ七区トナル、本城ヲ椎城ト云、其次ヲ齋藤城ト云、服部城ト云、長友城ト云、彦右衛門城ト云、皆其城將タリシ者ノ姓名ヲ以テ名トセシト見ユ、弓場城ト云、射場アルヲ以テ名ク、皆慶長年間稱セシ名ナリ、四門アリ、西南門ヲ目曳口ト云、東南門ヲ船ヶ崎口ト云、東北門ヲ野頸口ト云、満願寺口ト云、此四門ノ外ハ屋壁峭立シテ攀躋ルヘカラス、日向記ヲ按スルニ延元元年丙子正月十二日官軍ノ將凶師六郎入道慈圓宮崎城ニ抛ル、十四日賊將土持新兵衛宣榮、土持又次郎頼綱之ヲ攻メ、慈圓及ヒ其姪某等ヲ斬ル、其後伊東氏ノ支族伊東縣氏宮崎ヲ領シテ、此城ニ居シカ宗家ニ叛テ島津氏ニ応シケレハ文安三年丙寅六月二十日伊東祐堯攻テ之ヲ取り、其家臣落合彦左衛門尉兼統ヲ守將トス、天文三年甲午伊東家臣長倉能登守、其君ノ嫡嗣義祐ニ服セス、義祐ノ弟祐吉ヲ奉シテ之ヲ此城ニ立ツ、五年丙申六月八日祐吉此城ニ卒ス、七月十日義祐佐土原城ニ立ツ、六年丁酉十二月二十二日義祐佐土原城ヨリ此ノ城ニ移住ス、十年辛丑七月二十八日能登守義祐ニ叛ク、飢肥ノ島津忠廣、其將日置美作守・島津藏人等ヲ遣テ之ヲ援ク、美作守能登守ニ問テ曰ク、柳瀬口ヨリ北ニ當ツテ金光ノ見エタルハ義祐ノ居城

宮崎ナル歟ト、是言ヲ以テ考フレハ当時此城ノ壯麗ニシテ金碧ノ城上ニ閃キシ景況想見ルヘシ、其後義祐都於郡ニ移住セシ、年月詳ナラス、永祿十一年ノ頃ハ義祐其家臣肥田木勘解由左衛門尉ヲ此ノ城ノ守將トス、伊東氏四十八城主ノ一ナリ、是ニ断テ長嶺紀伊守・肥田木越前守ヲ守將トス、義祐豊後ニ奔ルノ後ハ島津氏ヨリ守將ヲ置シカ、豊臣秀吉宮崎ヲ高橋種統ニ與フルニ及テ種統其老臣権藤種盛ヲ守將トス、居ルコト十四年ニシテ慶長五年九月二十九日ノ夜伊東祐慶之ヲ攻取り稲津牛之助ヲ守將トセシカ、六年辛丑八月幕命ニ因テ本城ヲ高橋氏ニ歸ス、十九年甲寅高橋種統罪アリ、國除セシ後有馬直純之ニ代ル、元和元年徳川氏一國一城ノ令ヲ下スニ及テ廢毀セシナルヘシ

満願寺趾

(以下割註)

真言宗都於郡黒貫寺ノ末派ナリ、宮崎城墟ノ東麓ニアリ、広凡一段明治三年庚午廢ス、今宅地トナル

(四) 惣翁公御賦中 (『鹿兒島県史料 旧記雑録前編一』より)

一山東当陥海江田倉底城之時、敵方宮崎士卒數十人斬獲矣、于時新納越後守實久之臣隈江某遂戰死也、(応永10年カ)

(五) 北郷時久賦中 (『鹿兒島県史料 旧記雑録後編一』より)

天正六年十月中旬、大友父子率大軍、入日州、圍新納院高城、太守公催薩隅日三州之兵、発向于高城、一雲並息次郎・同弾正忠忠虎引数千兵、為先鋒、路経鬼山、先屯于宮崎城定軍列、時間城中有反心者、耳語伊東勘解由左衛門、議招入敵兵於当城陥、則走会戦于都於郡河原田道場、北郷藏人久盛抽粉骨追退大敵、得全域、

(六) 稲津掃部合戦記 (『日向郷土史料集 第五卷』より)

日向国飢肥領清武之地頭

稲津掃部助謀叛之事

(前略) 即刻人数を催し一千騎には過ぎりける慶長五庚子十月卅日辛亥日州第一の川三つの瀬と云神代に諸神出生し給る川也三途八難の川と云、舟にては叶まし塩の満干の川なる故也其をかにかへ中野を打立大渡柳瀬を掛渡し北方と云村に暫く休息して今夜軍神の血祭に宮崎城を攻落し明日佐土原を攻落さんと其夜の戌の刻より城を取巻攻入ける彼城と申は東向き大手の門谷相たにあいにて双方は屏風を峠たるか如也一騎通之

処也、城内此事兼て聞ゆかゝり火焼たき有明たいまつ処々に焼、寄来敵を待かけたり、城にはわつか百騎斗そ籠たり権藤平左衛門尉大長刀舎弟八右衛門同忠右衛門尉太刀鏢也、大手の門に待懸たり、五人三人登り来る敵大長刀にてどうきり立わり車きり一人も不残切臥余り精も尽しは其より遊切一人も不残愚人夏の虫飛て火に入か如也目にさへか、れは切臥る何千騎にてもたまる可とは見えさりける、逃んとすれは跡より押登する事攻あくんでぞ見えたる処に味方三十六人逆心者有て北ノ方満願寺口より敵の勢ををひき入夫より悉く乱入れは叶しとて雑兵四方追散し終夜戦あかし辰の上刻に兄弟三人切腹也兄弟にて討捕敵三百余人也

使者ニテ、檢使同船ニテ如水翁ノ陣所筑後国ノ内水田ト云所迄為持遣シケレハ、如水翁早速ノ功ヲ感シ玉ヒテ留主居中へ賜シ状ニ云

猶々御使者口上ニ申候間不委候、以上

又申候、嶋津家来数人生取候間、則忝人遣候間嶋津方江被遣可

給候、以上

其表手切之儀申遣候処ニ則被仰付宮崎之城被切取之段御手柄無比類候、則上方江「茂」申遣候間内府様江可致言上候、豊後殿御煩于今然々無之由承千万無御心許候、併可有御本腹候条御氣遣有間敷候、小倉請取早筑後表江罷出候、彼表之儀茂高橋・柳川・筑紫使者ヲ付置候間即時可相濟候、当月中ニ者薩摩和泉江可罷出候条、其内御堅固之覚悟肝要候、恐々謹言

十月十九日

如水軒円清

伊那掃部殿

又左京亮祐慶主下国以後弥祐兵主病氣大切ニ及ヌレハ、日州心遣モ難成間万端頼ミ入由黒田如水翁へ申達シ、如水翁ノ指図モ有之ニヲイテハ直ニ国許ニ返リ其趣ヲ告ヘシトテ、使者何某ヲ豊前中津へ差越サレシカハ、其時留主居へ如水翁差図有之、状ニ云

猶々以益々言伝申候、息災之由満足申候、以上

豊後殿預御使者候、上方之様子者御物語可有之候間不申入候

一御行之儀者先宮崎之城御取可有之候、其次ニ佐土原於可成者御手遣被成扱引取、右之宮崎之城ヲ丈夫ニ持セ嶋津方へ成次第御働可在之

候、是何処迄モ城々ヲ御取御候而手前無越度様ニ御沙汰肝要候

一兎角手前無越度様ニ可被成候、上方之御利運ヲ浦山敷カリ候而人数ソコネ候様之御働一切御無用候

一上方へ者豊後守殿御仕合能様ニ拙者ヨリ可申上候、其段者可御心安候、此節豊後殿大名ニ御成候様ニ随分才覚可仕候同可御心易候、恐々謹言

謹言

九月廿八日

如水軒円清

伊那掃部殿

長倉三郎兵衛殿「へ」

伊那因幡殿

御宿所

(三) 伴氏兼重賦中 (『鹿兒島県史料 旧記雜録前編一』より)

建武三年丙子正月八日、兼重率子金童丸及萩原太郎兵衛尉兼政等数百騎、師于国富庄、烧夷南加納庁等、十日、兼重往攻穆佐城、十一日、不拔而退、乃抛高浮田城、浮田在於時瓜生野八郎左衛門尉抛跡江城、浮田庄跡江方圖師或作六郎入道慈圓抛池内城、皆皆黨兼重、十二日、土持宣采帥兵攻高浮田、我兵為虜、宣采又攻跡江、八郎左衛門尉不能防禦、委城而走、宣采等烧夷跡江、十四日、宣采及其族人又次郎頼綱等、俱攻池内城、城將慈圓及其甥某等堅拒、為虜遂死之、十六日、良□與宣采書、賞其軍功也、十八日、圓觀又與宣采書、亦如之、

逆二代ヲ繼セ申タル故ニヤ、漸三年ノ間国主ノ如アリシカ、戦国半ノ事ナリシカハ本望ヲ遂玉フ程ノ事モ不御座、法名利山光吉法音寺殿ト申、家老長倉駿河守・上別府備前守此兩人祐清公御代迄御加判也、

#### (4)分国中城主揃事

佐土原 三位入道殿御居城御隱居之後在城ハ佐土原撰津守

都於郡 左京<sup>天</sup>太夫殿御居城

三納城主 飯田肥前守

穂北城主 長倉藤七 改民部少輔息藤七ト云

富田城主 湯地五郎九郎 改志摩介

高城城主 野村蔵人佐

財部城主 落合民部少輔 若名藤九郎、子毛藤九郎ト云

那賀城主 郡司弥六左衛門尉 今湯地出雲守・宇津宮左馬助

宮崎城主 肥田木勘解由左衛門尉 今長嶺紀伊守・肥田木越前守

(後略)

#### (5)左京亮祐慶日州へ下着宮崎ノ城ヲ攻取事

(前略) 左京亮祐慶主同月廿四日日州紫波洲崎ニ着船シ玉ヒ、早速稲津

又次郎ヲ飢肥ニ相越シ嶋津・秋月・高橋等皆治部少輔ニ組シヌ、日州

宮崎ノ城ハ高橋右近カ抱ヘノ城ニテ権藤平左衛門尉ヲ城主トシテ其外

大勢入置ヌ、急キ宮崎ノ城ヲ攻取リ、彼城ヲ根陣トシテ薩州ヘ働キ入

ヘキ由、祐兵主命ヲ請テ帰国ニ及フ間、急キ軍勢ヲ催スヘキ由申渡サ

レケレハ其儀ニ於テハ不及僉議、宮崎ノ城ヲ攻ラルヘキニソ究リケル、

其上上方ノ勢ヒヲモ知ラセンタメ、又ハ宮崎ノ城ヲ弥攻取ルヘキ由云

含、稲津次兵衛ヲ差下サレシニ、同月廿八日下着シテ其趣ヲ告ルニヨツテ弥急ニ軍儀ヲ調ヘ飢肥・清武ノ軍勢三千余人宮川伴左衛門尉為檢見、同晦日ノ夜清武ヨリ宮崎ノ城行程三里間ニ雖隔大川<sup>河</sup>難ナク懸渡シ、先勢三百余ニテトキヲ挙タリ、是ヲ城主権藤父子聞テ、敵ハ小勢ナリ、ス、メ者共ト下知ヲナス、後陣ハ跡ニ支ヘヌルニ先勢ハヤ麓ニ至テ放火シケレハ、白昼ニ不異城ノ四方ヲ稲麻竹葦ノ如ク打圍攻上ル、鉄炮ノ音ヤサケヒノ声夥シ、城中ニモ権藤父子三人ヲ始トシテ究竟ノ者共籠居タレハ我モ吾モト進出テ防キ戦、権藤兄弟元来勇猛ニシテ鎗長刀ノ達人ナレハ進ミ上ル輩ヲ数十人カケ落シケリ、去共是ヲ事共セス相戦ヒシカハ権藤父子三人モ痛手数ケ所負テ本丸ニ引入ヌ、万貫寺出テ降参ヲ乞ケレトモ競登ル惣軍勢是ヲモ耳ニ聞入ヌ、十月朔日ノ曙ニ攻落シ、城主権藤平左衛門尉行澄入道ヲ始トシテ、嫡子仲左衛門尉・次男八右衛門尉・智牧駒右衛門尉・安西十郎右衛門尉・新名神祇・万願寺・大山刑部少輔・大庭勘兵衛尉親子三人、飯田右衛門尉・北原将監・富高主馬助・嶋津新助・加久五兵衛尉・湯地伝内・井上壹岐介、此等ヲ始宗徒ノ兵百余人其外雑兵伐捨テケリ、其日軍敗宮田次郎兵衛尉取行、宮崎ニハ稲津掃部助在城ス、其外伊東方ニハ本城・細江<sup>譯之</sup>・淳田・起水・中村、此五ヶ所ニ陣ヲ張り手堅ク番ヲ勤メケリ

同城乘之時敵ヲ討并疵ヲ蒙ル人数

(中略)

右ノ者共名譽ノ討死ヲ仕也、此外雑兵数々也、田野衆長倉五郎右衛門尉・海老原越中介・楠原彦左衛門尉等九月晦日之夜ヨリ野・倉永二人數ヲ伏セ置ク、同十月朔日ノ朝、穆佐ノ軍兵ト暫シ取合放火シテ直ニ細江ニ番ヲナシケリ、宮崎城主権藤父子三人ノ頸即一学坊ト云シ山伏ヲ

河北富田郷政所二楯籠リ濫妨狼藉ヲイタスニ依テ、國中平均ニ相隨ヘ  
党類ト披露シ、同廿七日一族并土持・矢野・河越等相共旗ヲ揚テ打出  
ツ、同廿九日二伊東弥七・同弥八宿所提<sup>提</sup>二押寄セ是ヲ追落焼払、然ル  
ニ伊東藤内左衛門尉以下凶徒等去ル廿四日足利殿御領嶋津庄穆佐院政  
所楯籠、逮于合戦致殺害放火狼藉之間、同一族并土持一党左衛門太郎  
親綱・同二郎重綱・惟信・宣栄以下ヲ催シ馳向、同晦日一日一夜合戦<sup>合</sup>  
ヒ彼城ヲ追落シ、祐広親類若党以下數十人討捕ケル、同三年丙子正月  
八日、肝付八郎兼重子息金童丸并荻原太郎兵衛尉義政率數百騎軍勢ヲ  
細川殿政所国富庄南加納焼払ノ由風聞スル故、同九日大田城主大田八  
郎入道助頼・右衛門二郎資家・矢野小二郎義基等是ヲ防セ、同十日  
十一日祐持・土持両家一同二穆佐城相働致合戦追落所々、同十二日兼  
重同意ノ本郷凶師隨円、子一坪六郎入道慈円楯籠宮崎池内城、同十四  
日兼重同意ノ者楯籠浮田庄預所間高浮田城郭押寄、土持新兵衛尉宣栄  
手ニテ散々ニ戦テ大將ヲ生捕、同日浮田庄跡江預所菰生野八郎左衛門  
尉彼政所ノ城郭二楯籠ルノ間一族并土持衆ヲ以テ馳向相戦追落、則彼  
城郭焼払直ニ土持又次郎頼綱相共池内城馳向手痛相働、凶師六郎入道  
慈円同甥以下ヲ生虜誅伐ヲナス、(後略)

## (2) 祐堯所々御退治事

祐堯家督ノ後、文安元年甲子ノ比ヨリ曾井殿当家ニ隨玉ハサル間、  
十一月十五日嶋津持久同意アツテ同廿五日ニ曾井城御進発アリ、同  
十二月三日曾井城責落シ玉フ、下大田・同恒久・大塚・田吉・本郷・  
隈野・鏡「洲」・源藤ヲ知行有、其時長井美作守加江田紫波洲崎ニ指寄  
使ヲ以テ申ケルハ、諸勢ヲ向ラレ候ハンスルニテ有シヲ某同名ノ事ナ

レハ作州ニ御任候ヘト申請テ候間美作ニ対シ渡シ玉ヘト有ケレハ、城  
主長井式部少輔被申ケルハ同名ト云無曲ナル申事、太刀ノツカニテ渡  
スヘシト強ク申切ヌ、然共作州シキリニ乞トリ御知行候也、地頭ハ串  
間殿也、今ニ当家ニテ野辺ヲ名乗玉フ也、夫ヨリ川崎五郎左衛門地頭  
卜定テ迂リ畢、同二年乙丑祐堯公土持同心ヲ以テ門河ニ押寄セ、六月  
四日ニ対治、同九月八日土持・縣同心ニテ穆佐城ヲ退治アリ、落合治  
部少輔ヲ地頭ニ迂玉フ、宮崎ハ昔藤北殿ノ格護也シヲ後ハ伊東・縣殿  
持玉フ也、彼縣殿嶋津ノ縁ニ入度々当家二楯ヲ突玉フ間、佐土原殿ヲ  
同心ニテ文安三年丙寅六月廿日宮崎ヲ責落シ玉フ、則為城主落合彦左  
衛門尉ヲ迂シ、同廿二日細江城ニ陣ヲ取、同廿九日ニ攻落、(後略)

## (3) 門河対治并祐吉早世事

其時福永乱左兵衛乱ニヨリテ所領多カリシカハ、長倉能登守分別ヲ以  
七百人ニハカライ、祐清公ノ御舍弟本ハ黒貫寺ニ出家有テヲワシマス  
ヲ還俗サセ、六郎十郎祐吉ト号シ彼人ヲ守護ニ取立可申ト内略有ケル  
ニヤ、同年正月六日財部・佐土原ニ入城アリ、同十二日曾井御入城、  
同十五日ニハ清武入城有、同二月十九日宮「崎」城ニ御入城有テ御住  
宅、然ルニ同年十二月門河ノ城主一兩人企野心旨白杵方縣ニ注進ヲ致  
シ、究竟ノ兵ヲ多勢彼城ヘ牽入間、國中ノ諸侍於兩度ニ発向有、去共  
城籠依難所其功ナシカタシ、重テ思慮ヲ廻シ評儀ヲ調被押寄、凡敵城  
ハ四ヶ所ナリ、本城・鳥越・狗山・佐々宇津、此要害ヲ手堅構ノ所ニ  
同月十五日鳥越ニ押寄ル軍士數不知、依之一陣破ルレハ殘党不全四ヶ  
所ノ城ヲ片時ノ間ニ責落シ玉フ事前代未聞ノ事共也、然ル所ニ翌五年  
丙申六月八日ニ祐吉公於宮崎早世アリ、誠ニ廿二満スシテ早世シ玉ヒ、

越二常盤木など種々栽させ候て見申候也、此夜も深行まで抜句共仕候、

(19) 天正十三年四月二十日条

一廿日、衆中など帰宅之由候て各被来候、細工などとさせ候て見申候、明日かこしまへ参上之支度共也、恭安齋當年就御養性気未御越候、然者拙者行候由聞せられ候間、与風御越之由也、先三献如常、従夫種々御会尺共申候、此夜、伊地知大膳亮酒肴種々被持来候、衆中など参会賞翫仕候、深更まで酒宴共也、此日、谷口和泉丞三男、日州居留同前二城戸之番等させ可申之由訴訟申候間任其儀候、衆中各へも談合申如此候、祝言として御酒并二百足持来候也、鹿兒嶋へ肥州三池殿使書進上候、并吾々へも織筋一・書状預候、かこしまかり屋より持せ候条、致披見候、彼堺当分無何事之由也、

(20) 天正十三年六月十六日条

一十六日、罷歸候として衆中など被来候、弥阿父子拙宿へ被来候、則食振舞候する、内城へ然と候へと申候へ共、今日就中絵二隙入事候俣、成かたき由候、其為計二雇申候条、無是非由申候也、此晚、若衆中内城にて鞠也、

(21) 天正十三年七月十八日条

一十八日、観音へ別而祈念申候、城之草払させ候て見申候、岸切せ候処も候、然者已上普請也、

(22) 天正十三年閏八月五日条

一五日、早朝和田刑部左衛門尉佐土原より被歸候、吉利殿より書状、委御披覽候、先日於潮見大方被聞召候筋、尤二被思召候、乍去、八城表より頻御立之由候処、彼義自然無首尾候ハ、必竟八城表へ為御不用之様に、武庫様被思召候て、笑止たるへく候、何れ共難分おほしめされ候、拙者校量次第之由御返事也、城戸建させ候、左様之普請させ候て見申候処、福永藤六殿より註進候、(後略)

(23) 天正十三年十一月三十日条

一卅日、町口垂など立させ、普請させ候て見申候、従佐土原長野下総守書状被遣候、趣者、(後略)

(二) 日向記(卜翁本) (『宮崎県史叢書 日向記』より)

(1) 依西国宮方蜂起祐持日向国下向事

(前略) 今亦天下モ宮方・將軍方トニツニ引分レテ宮方ニハ新田右衛門佐為大將軍、彼方与力ノ者モ当国ニ多カリケレハ同年十二月十三日鬪乱依有其聞、祐持モ土持一族ヲ「相」伴ヒ一同ニ欲令上洛之処ニ、義貞ニ与シケル人々ニハ伊東藤内左衛門尉祐広、同一族弥七祐貞、同弥八祐勝、益戸孫四郎行政、同四郎兵衛尉秀名以下ノ凶徒等國富庄其外所々ニ乱入シ、同十五日右一族穂北郡司平嶋三郎以下党類、國富庄

(11) 天正十一年六月二十七日条

一廿七日、如常、此朝又、堪丞<sup>(勘)</sup>へ茶湯会尺仕候也、此日、例之茶的也、勘丞路次之曳付之状、又ハ鹿兒嶋へも寄合中へ引付之一通認候也、泉長坊へ皆々渡候也、此日、前日大口<sup>(伊豆郡)</sup>へ新納武州<sup>(忠七)</sup>へ、子息刑部大輔<sup>(忠亮)</sup>殿於有馬慮外<sup>(肥前南島郡)</sup>ニ戦死之由聞得候之通、笑止之儀、寺田耆岐守を以申候、彼仁被帰候、一定之由也、此日、和田口普請上候也、

(12) 天正十一年七月二十八日条

一廿八日、池田志摩掾会尺仕候、從夫城のことく帰候也、此日、衆中名々<sup>(銘)</sup>之人勢揃候て普請也、和田口之道留候之普請也、此日、吉利山城守殿鹿兒嶋へ参なされ候ニ、寄合中より御伝言候とて御座候、趣者、御出勢之儀御鬮下候条、一定来月中旬之比ハ、御進発可被成之由也、次二者、此度大風ニ殿中御主殿悉損候、遠殿上葺當国より可仕之由也、御酒参会候也、

(13) 天正十二年七月十七日条

一十七日、如常、此日曳<sup>レ</sup>目之口弓場普請、衆中被指揃いたされ候、普請あかり候て、鞠たるへく候とて、拙者庭へ被揃候、然処ニ雨降来候間、無了簡候、漸々風呂焼せ候て、各寄合申入候、本田治部少輔殿無沙汰候とて越候、是も風呂へ入候也、閑談共也、

(14) 天正十二年七月二十九日条

一廿九日、於昆沙門堂法楽之連歌仕候、為綱と両吟也、執筆野村大炊

兵衛尉也、此日成就申候也、此朝、普請目曳之口ニさせ候也、

(15) 天正十二年七月三十日条

一卅日、目曳之口普請也、為綱寄合候て、昨日之懷紙指合など見候、并大炊兵衛尉へ懷紙清書申させ候也、此日民部左衛門尉ハ帰宅也、

(16) 天正十二年八月二十四日条

一廿四日、別而愛宕へ読経申候て祈念仕候、休世齋被成候、柏田船<sup>(宮崎郡)</sup>本まで送ニ罷出候、從夫直ニわち川原<sup>(同郡)</sup>ニ船繁候する入江候由申候、然者其辺ニ村を仕立候すると存候条、左様之跡見償候する為罷下候、(後略)

(17) 天正十三年正月朔日条

一朔日、如恒例、雨降候間社参者不仕候、鎧着始候、肴等如旧例、衆中各礼被成候、城内之衆廿人計ニ三献参会候、各酒肴等預候、銘々賞翫仕候、衆中悉皆ニ、拙者酌申候て御酒参せ候、終日酒宴共也、慶賀など如例年、今日、毎年祝言迄ニ発句申候、然者当年者立春遅候間、

越てたに春のまたるゝ今年かな

(18) 天正十三年正月十七日条

一十七日、弥右衛門尉御酒飲せ候、城内之衆中各会釈ニとて呼申候、種々之儀共也、此日ハ、愚句共撰抜候て紹巴<sup>(里村)</sup>へ登せ候するかと存候て、抜句仕候、其隙く、庭ニかゝりの松など植させ候、并茶湯之座見

談共申候、庭前二木などあまた栽させ候て見申候、

(5) 天正十一年閏正月十八日条

一十八日、看經・読経等如常、觀世音へ堂參候、從財部〔尾鷲郡〕光音寺被來候、茶・木綿二預候、此日從福嶋衆中一兩人御酒持せ被來候、各參会仕候也、從藏岡〔東海郡〕梶原方を以承候、山城守殿かこしまより被仰越候、太守様御虫氣未然々之由、若々我々不存や候らんとて註進也、此日、鎌田源左衛門尉從鹿兒嶋去十六日之日付書狀到來候、是も 太守様御虫氣未御快氣候、乗物などにも參上申候て可然之由、御責合中承由也、此日ハ風呂建させ候とて、終日普請させ候也、〔補註〕かこしまより泉長坊被歸候、御虫氣之分同前、

(6) 天正十一年閏正月二十一日条

一廿一日、柏田〔宮崎郡〕と城との間の道作せ候、新路にて候間、罷下見候て作せ候、其刻佐土原〔同郡家久〕より、弓削名字之人御酒持せ來候也、金剛寺御祈禱として大般若転読被成候由候て、札持せなされ候、

(7) 天正十一年二月十四日条

一十四日、福昌寺御礼とて御光儀候、御宿滿願寺〔宮崎郡池田〕へ申付候也、廳而内城へ申請候、先御礼茶也、其後御めし參候、御座、主居代賢様・玄龍首坐・拙者・柏原左近將監、客居御同宿三人、次本田治部少輔・鎌田源左衛門尉也、御時過候て、奥座にて内々懸御目候、押着にて御酒也、其後茶湯之座にて点心參候て、御酒數篇參候、御茶勿〔論〕輪候、此座中、田中主水佐御酒持來候間參候、明日涅槃会法花嶽にてなさ

れ候するとて御急被成、御歸輿也、鎌田源左衛門尉中途にて追酒共申候也、此日も、終日茶湯などにて雑談共申候也、此晚、報恩寺我々へ振舞也、

(8) 天正十一年四月十九日条

一十九日、念仏等如常、吉日にて候間、昆沙門〔理〕飯堂作二打立候、并茶湯之座可構普請等させ候也、此日、從佐土原御使者高崎越前守被越候、趣者、久御無沙汰之段、次七山左近將監去年已來別而辛勞共申候間、彼山続二相応之処一ヶ所遣られ候て可然之由也、尤令存候間、先々一ヶ処落着させられ候て可目出候段、御返事申候、越州御酒持せられ候間、參会申候、從福嶋〔南那郡伊集院久池〕、指宿丹後守被越候、是も御酒持せられ候也、即參会候、

(9) 天正十一年五月十二日条

一十二日、薬師へ別而読経共申候、弓場普請之為躰見候するとて、乗物にて麓へくたり候、從夫、直二鎌田源左衛門尉殿へ、久無沙汰申候まゝ罷候、めし振舞也、此日者、拙者前より手衆共二弓之事仕候、終日御酒にて候、此日、縣〔東臼杵郡〕より壁塗杉山新左衛門尉と申者來候間、〔補註〕抜合共ぬらせ候て見申候也、

(10) 天正十一年六月十九日条

一十九日、念仏等如常、例之掃地・普請等させ候也、此日、茶湯的也、弓数五十張計候、終日慰候、弓不叶之衆者暮・將暮にて候、忠棟より之書狀〔宮崎郡比志島義経〕、曾井へ持せ候也、

【史料八】長倉兵國書狀

『御文庫拾六番箱九卷中』

其許御本腹之後、依無題目不申通候、仍上方御弓箭、内府様被任御存分二付、豊後守对 殿下、一稜可致忠儀内証にて、宮崎表へ行仕候、然者嶋津殿御事、内府様御遺恨不浅之由相聞え候、貴家之御事、彼御方へ無別儀御座候事、連々為存前二候へ共、乍去ケ様二大錯乱之砌者、自他致才覚、其家のため二成事、世上在之儀候間、自然 殿下二被企御忠儀候者、諸事申承度候、近比何敷申候儀二候へ共、隣方之儀二候間令啓候、恐惶謹言、

十月十九日

長倉三郎兵衛尉

兵國（花押）

小杉丹後守殿

御宿所

（『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』所収）

二 記録類（日記・軍記など）

（一）上井覚兼日記（東京大学史料編纂所編『大日本古記録 上井覚兼

日記 上・中・下巻』より）

（1）天正十一年正月二十六日条

一廿六日、城内之衆中へ礼儀申候、銘々二御酒もたせ候也、各三献寄合なされ候、其外種々会尺共也、

（2）天正十一年正月二十七日条

一廿七日、麓之衆中へ礼儀申候、（宮崎郡）岩戸へ伊勢之田中主水左衛門尉へ礼申候、めし振舞、終日之会尺也、拙者も御酒もたせ候也、

（3）天正十一年正月三十日条

一卅日、福永藤六殿年頭礼二被来候、御酒持せ也、三献参会申候、米良弾正忠被来候、尾八重衆也、（尾八重郡）本庄衆中御酒もたせ被来候、堀四郎左衛門尉被帰候て、都於郡・穂北之返事被申候、何も得其心由也、此日、風呂造作打立候也、

（4）天正十一年閏正月四日条

一四日、從都於郡鎌田雲州、（尾八重郡）自身御座候すれ共、虫気然々なく候之条、先々同名衆にて年始之礼承由也、拙者も養性気二候て不出合候、人して返事申候、御酒振舞候也、此日、木花寺ハ被帰候、此日、雨中徒然居候処、堀四郎左衛門尉・勝目但馬掾来候間、御酒参会候て雑

七月十二日

忠治(島津) (花押影)

祢寝殿(尊連)

御返事

○本文書の原本、実は「平姓祢寝氏正統文獻」卷十二(東洋文庫所蔵)に収録される。

(祢寝文書「新編祢寝氏世祿正統系図」二七『宮崎県史 史料編中世二』所収)

【史料五】上別府祐子寄進状写

宮崎奈古於八幡寄進田之事

上別府之内大窪壹反

右祈念之意趣者、偏信心大檀那藤原氏祐子并氏女大願主息災延命、子孫繁昌、城内安全、諸人快樂、武運長久、身心堅固、五穀成就、心中求願、皆人々満足悉地如意之故也、仍可致精誠祈念之旨趣如件、

大永八年戊子二月卅日 彼岸内

上別府雅樂助祐子裾判

○本文書は、長田家文書にもあり。

(奈古神社文書五三『宮崎県史 史料編中世一』所収)

【史料六】炎綱・祐存連署状写

態用書候、仍就奈古八幡宮代官江御宿候事被仰出候処、今程城内屋作

不使、又地下二も可申在所候ハれ由被申候間、夫様ハ御宿之事、御意も於以後者被仰ましく候、今度之事も、社役之隙入時分二候へ共、御意二任せられ、輕御宿もしらべ被申候へと申付二候、此等之一段御代官方江も可有談合事候、恐々謹言、

九月十日

炎綱裾判  
祐存裾判

奈古大宮司殿

色々取合之事ハ代官方江被仰候、御宿迄之事二候、

(奈古神社文書五七『宮崎県史 史料編中世一』所収)

【史料七】安国寺惠瓊書状

『諏訪氏蔵』

宮崎事、福智三河守方二申談候条、早々一人御差出候而、可被仰談候、過分之下地にて候間、御礼儀等一廉可被成御分別候、尚使者ら申候、恐々謹言、

安国寺

六月十三日

上井伊勢守殿(寛兼)

御宿所

惠瓊 (花押)

(『鹿児島県史料 旧記雑録後編二』所収)

【史料二】土持宣采軍忠状写（「新編伴姓肝属氏系譜」所収）

原本御領諸縣郡大田原村新助家蔵

新田右衛門佐殿與同仁伊東藤内左衛門尉祐廣以下凶徒等、去年十二月廿四日、押寄足利殿御領穆佐院逮<sub>二</sub>于合戦<sub>一</sub>之由承及候間、一族馳向、同十二月晦日、一日一夜致合戦追落畢、并兼重同乘圖師六郎入道慈円楯籠池内城之間、正月十二日馳<sub>二</sub>向彼城<sub>一</sub>捨<sub>二</sub>身命<sub>一</sub>尽<sub>二</sub>合戦之忠<sub>一</sub>、召捕其身誅伐候畢、其後押寄祐廣之城<sub>代八</sub>、同廿三日・同廿九日兩度及合戦候之處、自身并子息一人・若黨一人被疵候、適々於<sub>二</sub>戰場<sub>一</sub>御見<sub>智候</sub>之間、為後證令申候、恐惶謹言、

建武三年二月七日

左兵衛尉宣采

進上 守護御奉行所

承了 沙弥重賢在判

（予章館文書四『宮崎県史 史料編中世一』所収）

【史料三】島津忠国書状写（第十）

『正文在家蔵』

猶々和田辺のふしん北郷か方より承候、近明日委聞得へく候、

其時分早々申へく候、

恒吉か方へ之状細々承候了、石井使者進候処<sub>二</sub>、伝言様御状<sub>二</sub>見得候、無心元覚候、仍山東之事、伊東宮崎<sub>二</sub>勢遣候けるか、打負候て在所へ引歸候之由其聞得候、中途策籌之事、未定候、一さ右承候て可申遣候、

ふと勢之入事あるへく候、用意可然候、随而未吉城こしらへ仕懸たる事に候、旁御越候者喜可存候、又種嶋へ遣状候、恐々謹言、

七月十五日

忠国（花押影）

祢寝殿

（墨引影）

○本文書の原本、実は「平姓祢寝氏正統文献」巻十一（東京大学史料編纂所所蔵）に収録される。

（祢寝文書「新編祢寝氏世祿正統系図」二六『宮崎県史 史料編中世二』所収）

【史料四】島津忠治書状写（第十一）

『正文在家蔵』

御札細々承候畢、仍一昨日進状候、定参着候哉、今度御越早晚と申ながら、無調法候、殊又三郎殿御出候よて不得便候之間、無沙汰之至、所存之外相存候、如何様御越御札令参可申入候、就其、去七日宮崎方より出家者、為使麿嶋へ被進候、其意趣者、伊東方より勢遣れ候、御合力候者、可畏入之由被申候、庄内之事共、寄来り候や、屋形昨日十一日恒吉へ御着之由聞得候、都城よりハ御越之さ右未被申候、異不審之時者、早々可申候、兼又檳榔少存候へ共、嚴旨を給候之間、多作と存候、亦親にて候者之船出候て後も、舟ともあまた出候、是ハ如何風にて候へ共、奥ハよく吹候や、後之舟共通候、幸浦辺へも着候ハんと廻船之者共申候、万期来信候、恐々謹言、

## 「宮崎城」関係史料

### 【例言】

一宮崎城に関する記載がある史料を収録した。  
一典拠は、一は各古文書の最後に、二および三は史料名の後ろに示した。  
一基本的に典拠に掲載している文章をそのまま引用したが、旧漢字については適宜、当用漢字にあらためた。ただし、固有名詞は適宜旧漢字を使用した。

### 一 古文書

#### 【史料一】土持宣栄軍忠状写（『新編伴姓肝属氏系譜』所収）

原本御領諸縣郡大田原村新助家蔵

土持新兵衛尉宣栄於日向国所々致軍忠次第事

一去年<sup>建武</sup>十二月十三日世上鬪乱之由、依<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>其聞<sup>一</sup>、一族相共欲令上洛之処、伊東藤内左衛門尉祐廣<sup>新田右衛門佐祇候人</sup>・同弥七・同弥八・益戸以下凶徒等、令乱入国富庄以下所々、依<sup>レ</sup>致<sup>レ</sup>濫妨狼藉、国中平均相<sup>レ</sup>随彼党類<sup>一</sup>之由披露之間、同廿七日一族相共揚<sup>レ</sup>御旗<sup>一</sup>打<sup>レ</sup>出宿所<sup>一</sup>候畢、

一同廿九日、押寄伊東弥七・同弥八宿所<sup>堤</sup>、追落之焼拂畢、  
一去年<sup>建武</sup>十二月廿四日、祐廣以下凶徒等楯籠嶋津庄穆佐院政所之間、同晦日一族相共馳<sup>レ</sup>向彼城<sup>一</sup>、致<sup>レ</sup>散々合戦<sup>一</sup>追落之時、祐廣親類若党以下数十人討<sup>レ</sup>取之<sup>一</sup>畢、

一正月<sup>建武</sup>八日、肝付八郎兼重子息金童丸并萩原太郎兵衛尉兼政卒<sup>二</sup>数百騎軍勢<sup>一</sup>、打<sup>レ</sup>越国富<sup>一</sup>、南加納政所以下焼<sup>レ</sup>払之<sup>一</sup>、同日・十一日寄<sup>レ</sup>来穆佐城<sup>一</sup>致<sup>レ</sup>合戦<sup>一</sup>之間、防返畢、

一同十四日、兼重与同仁楯籠浮田庄預所、押寄高浮田城柳、於宣栄其日大将致散々合戦令生虜候畢、

一同十四日、兼重同仁浮田庄跡江方預所瓜生野八郎左衛門尉、於<sup>二</sup>彼政所<sup>一</sup>於城擲楯籠之間、馳<sup>レ</sup>向致散々合戦追落之、則焼拂城擲候畢、

一同十四日、兼重党類一坪六郎入道慈圓楯籠宮崎池内城之間、一族又次郎頼綱相共馳<sup>レ</sup>向彼城<sup>一</sup>、慈圓同甥以下生<sup>レ</sup>虜之<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>誅畢、

一同廿三日、押寄祐廣宿所<sup>代八</sup>焼払之処、楯籠猪埜見城之間、則時馳向彼城雖致合戦、御方勢依<sup>レ</sup>討死手負出来<sup>一</sup>成<sup>レ</sup>無勢<sup>一</sup>引退畢、

一同廿九日、重押寄祐廣<sup>見</sup>於大手責戦之時、二月一日宣栄<sup>額</sup>、同三日子息八郎時栄<sup>右膝</sup>被<sup>レ</sup>疵畢、此等子細御見<sup>智</sup>候畢、

右、宣栄所々軍忠如件、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年二月七日 左兵衛尉宣栄

進上 嶋津庄惣政所殿

承了 左兵衛尉秀信在判

（予章館文書三『宮崎県史 史料編中世一』所収）

# 報告書抄録

ふりがな	みやぎきじょうあと							
書名	宮崎城跡							
副書名	平成 29・30 年度確認調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 132 集							
編著者名	竹中克繁（編）・今城正広							
発行機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒 880-2101 宮崎市大字跡江 4200 番地 3							
発行年月日	2020 年 3 月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやぎきじょうあと 宮崎城跡	みやぎけん 宮崎県 みやぎし 宮崎市 いけうちちょう 池内町 かみきたかた ・上北方	45201	21-085	31°58'00" 付近	131°24'31" 付近	20171106 } 20171130  20180416 } 20180613	92.2	重要遺跡 確認調査
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		要約		
城館跡	中世・ 近世初期	曲輪面  ピット  土坑  溝状遺構		輸入陶磁  国産陶器  土師器  石製品  金属製品  瓦		遺構・遺物の保存状態確認を目的として、主要 5 曲輪に計 10 ヶ所の小規模な調査区を設定し調査をおこなった。結果として 1 つの調査区では遺構が検出されなかったが、他の 9 ヶ所ではいずれも遺構・遺物が良好な状態で検出された。遺構の大半はピットで、各調査区が狭小なため建物としての並びを復元するまでには至らないが、主郭では埋め立てによる曲輪面の造成が確認された。造成土中に瓦片が含まれることから、織豊期に形成されたものの可能性が高い。他に土壘に並行する暗渠排水と考えられる溝状遺構等も検出された。出土遺物としては陶磁器類が大半で、華南彩の水滴等も含まれる。先の主郭造成面上では土師器坏が 1 ヶ所に集中して出土した。灯火具として使用された痕はないため、献杯儀礼を示すものと考えられる。また主郭周辺には集中して瓦片が散布し、瓦葺建物の存在した可能性が高い。		

宮崎市文化財調査報告書 第132集

# 宮崎城跡

平成29・30年度確認調査報告書

2020年3月

発行 宮崎市教育委員会